

第43図 天神林遺跡16号住居跡出土遺物(4)

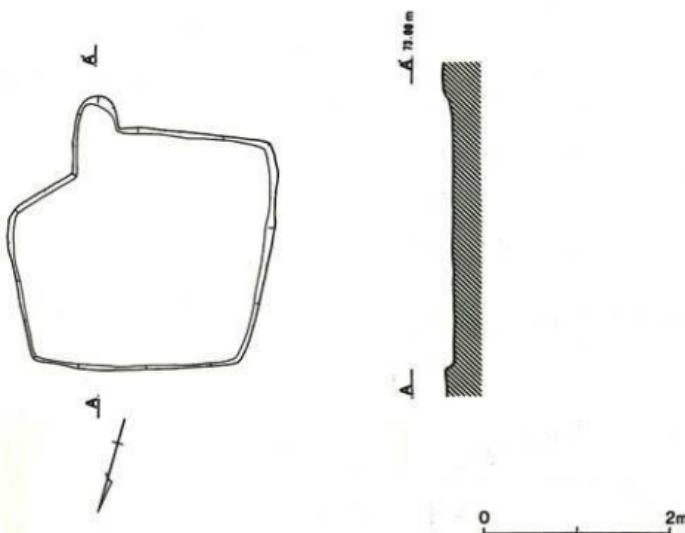
## 天神林遺跡16号住居跡出土遺物(4)(第43図)

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)  | 形態の特徴  | 手法の特徴   | 備考  |
|----|-----|----------|--|---|---|
| 1  | 甕   | 口径(21.0) | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。口縁部との境には緩やかな段を持つ。             | 全面に亘って磨滅が見られる。口縁部外面は横ナデ。胴部は斜位のヘラケズリ。内面は殆ど磨滅しているが、一部にヘラナデあり。 | A+A'+B+F<br>内外:淡茶褐色<br>1/5存 床                 |
| 2  | 甕   | 口径(22.3) | 口縁部は肥厚し、外反する。端部は丸い。胴部は直線的である。                            | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。                      | A+A'+C+F<br>内外:淡赤褐色<br>1/5存 覆土                |
| 3  | 甕   | 口径(19.3) | 口縁部はやや肥厚し、大きく外反する。端部は丸い。口縁部と胴部の境には緩やかな段を持つ。胴部は若干張る。整形丁寧。 | 胴部外面の一部に縦位のヘラケズリが確認できる他は、全面に亘って磨滅している。                      | A+A'+C+E+F<br>内外:灰黒色~淡灰茶色<br>3/10存 カマド左袖      |
| 4  | 甕   |          | 胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。                                      | 胴部外面は縦、斜位のヘラケズリ。内面はやや斜位のヘラナデされるが不明。                         | A+A'+B+C+D+F<br>内:暗赤褐色<br>外:灰茶褐色<br>1/5存 覆土   |
| 5  | 甕   |          | 胴部は輪積痕の為、段を持って立ち上がる。                                     | 胴部下半は斜位、上半は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。                             | A+A'+B+C+D+E<br>内:暗示褐色<br>外:赤褐色<br>3/10存 ピット内 |
| 6  | 甕   |          | 胴部は中位で少し張る。器内は一定している。輪積痕による段差が生じている。                     | 胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面はナデ?  | A+A'+B+D+F<br>内外:暗赤褐色<br>3/5存 カマド袖            |
| 7  | 壺   | 口径(19.0) | 口縁部は外反して、外傾する。端部はやや細く丸い。形態や亞む。                           | 口縁部は内外面とも横ナデ。   | A+A'+B+C+D+F<br>内外:暗褐色<br>1/10存 床             |
| 8  | 壺   | 口径(18.4) | 口縁部は内傾ぎみに外反する。   | 全面に亘って磨滅している為、整形手法不明瞭。                                      | A+B+C+F<br>内:暗褐色<br>外:灰褐色<br>1/10存 床          |
| 9  | 小形壺 | 口径(12.0) | 口縁部は内傾して外反する。胴部との境には浅いが沈線が一本巡る。胴部は大きく張る。                 | 内面から口縁部外面は横ナデ。  | A+A'+C+F<br>内外:淡赤褐色<br>1/10存 覆土下層             |

| 番号 | 器種       | 大きさ(cm) | 形態の特徴                             | 手法の特徴                             | 備考  |
|----|----------|---------|-----------------------------------|-----------------------------------|---|
| 10 | 甕        | 底径 5.5  | 底部は平底で、やや内湾ぎみに外傾して立ち上がる。          | 胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は不定方向のヘラナデ。底部は磨滅。 | A+A'+C+D+E+F<br>内外：暗茶褐色～明茶褐色<br>1/5存 床    |
| 11 | 甕        | 底径 4.6  | 底部は上底である。胴部は内湾ぎみに外傾する。            | 胴部内面は不定方向のヘラナデ。他は磨滅の為、整形手法不明瞭。    | A'+B+C+E<br>内外：灰茶褐色 やや不良<br>1/5存 覆土(ピット内) |
| 12 | 甕        | 底径 3.9  | 底部はやや不安定な平底を呈し、胴部は外反後、内湾ぎみにて外傾する。 | 胴部外面は不定方向のヘラケズリ。内面は磨滅している。        | A+A'+F<br>内外：暗赤褐色～淡茶褐色<br>1/5存 カマド        |
| 13 | 須恵器<br>甕 |         | 胴部の破片である。                         | 外面は無文で、内面は青海波文が施される。              | A'+D+F<br>内：黒灰色<br>外：暗灰色 覆土               |
| 14 | 須恵器<br>甕 |         | 胴部の破片である。                         | 外面は無文の上に部分的にカキ目調整され、内面は同心円文が施される。 | A'+D+E<br>内：暗灰色<br>外：暗青灰色 覆土              |

## (2) 天神林遺跡17号住居跡(第44図)

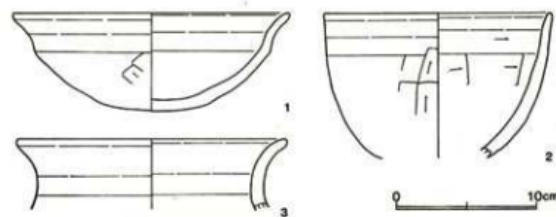
2.8m×2.55mの竪穴遺構であるが、壁プランはかなり不整形である。地山層状況が不良でプラン確認がかなり困難であったが黒褐色土の落ち込み土が分布し、またその覆土中に焼土・炭化物が認められたので竪穴遺構と判断した。壁プランは黒褐色土の落ち込み状況で検出したものである。床面はほぼ全体に炭化物・焼土のブロック状粒子が認められ、そのレベル分布により床面を確定することができた。平坦な床面である。なお焼土ブロックは通例の住居跡内に散布する焼土とは異なりその粒子がやや粗いものであった。東壁側にカマドらしき遺構が壁外に突出している。ただしこれは側壁、底面とともに特に強く焼けた痕跡は無く、焼土・炭化物片がやや多く集中していたのでカマド状遺構と判断した。構造の細部は全く不明であった。床面からは柱穴らしきピットは検出されていない。出土遺物は若干あり、床面から坪、鉢、覆土中から長甕が出土している。以上の状況からこの竪穴は通例の住居跡とは異なる構造をもっている。遺物は他の例と同様であるが、住居以外の機能をももつものと思われる。



第44図 天神林遺跡17号住居跡

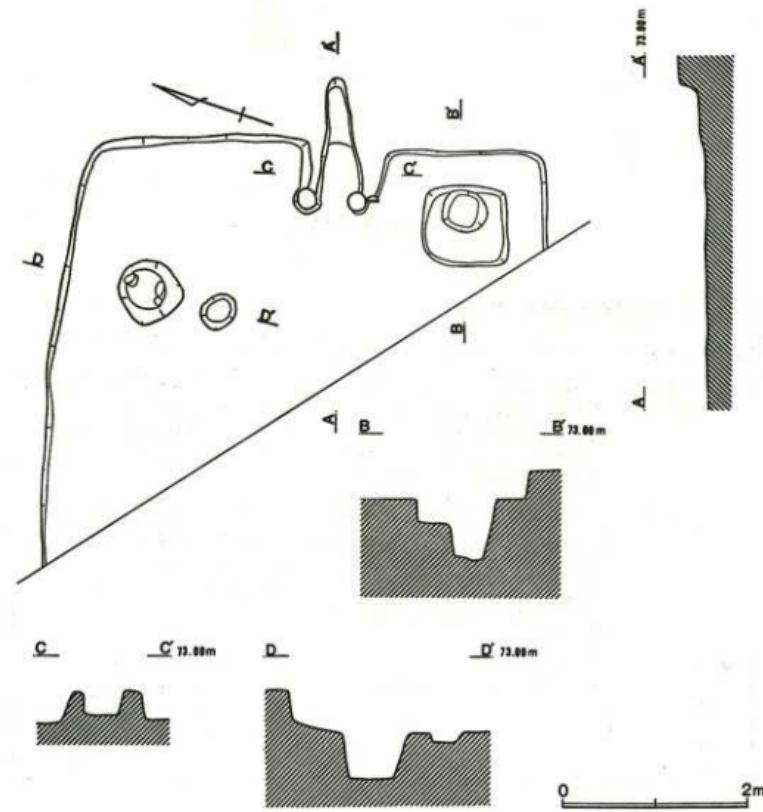
## 天神林遺跡17号住居跡出土遺物（第45図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考   |
|----|----|---------------------|--|--|--|
| 1  | 壺  | 口径(19.9)<br>器高(7.0) | 口縁部は大きく外反し、外傾する。端部は丸い。体部との境の棱は明瞭。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。形態やや歪む。        | 内面から口縁部外面は不定方向のナデ。横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。体部外面は器面の凹凸、磨滅が著しい。 | A+A'+B+C+F<br>内:淡茶褐色<br>外:暗赤褐色~赤褐色<br>3/5存 床 |
| 2  | 壺  | 口径(16.3)            | 口縁部は緩やかに外傾する。端部は丸い。腹部との境はやや不明瞭。腹部は器肉を厚くして、内湾しながら底部へ移行する。瓶の可能性あり。 | 口縁部は内外面とも横ナデ。腹部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。全面に亘り、若干、磨滅している。 | A+A'+B+C+E<br>内外:淡橙褐色<br>1/5存 床              |
| 3  | 甕  | 口径(19.4)            | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。   | 口縁部は内外面とも横ナデ。  | A+C+E+E<br>内外:淡橙褐色<br>1/5存 覆土下層              |



第45図 天神林遺跡17号住居跡出土遺物

(d) 天神林遺跡18号住居跡 (第46図)



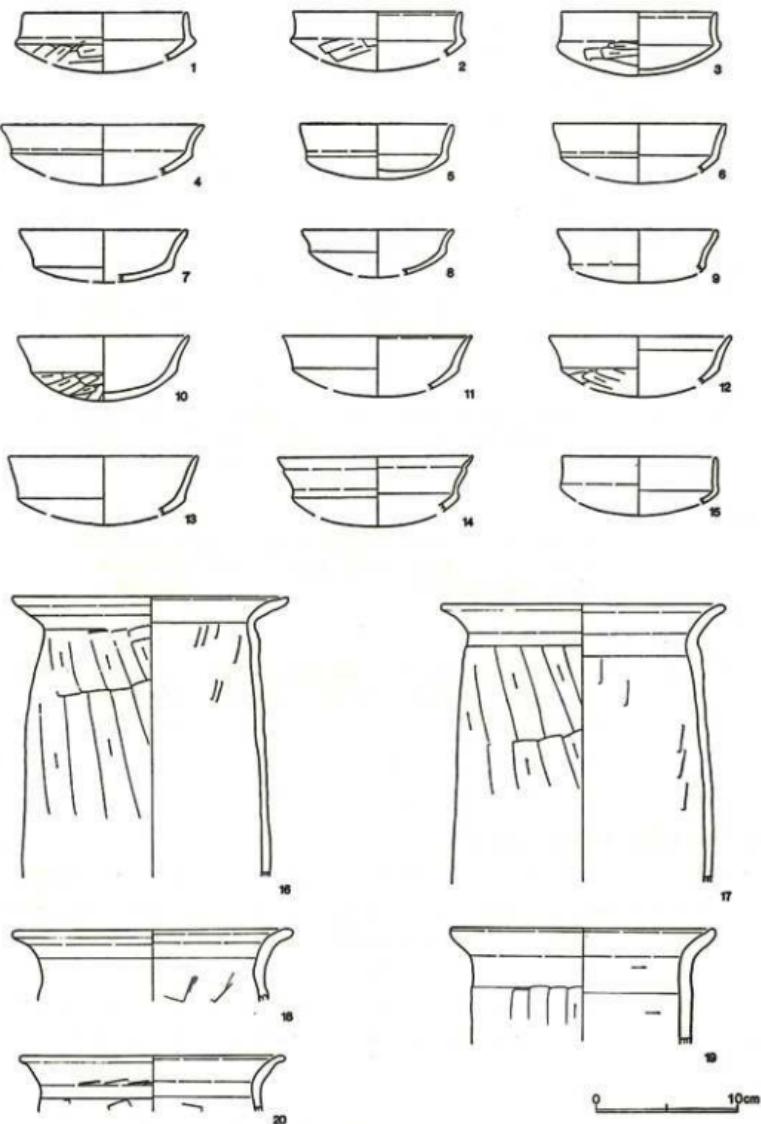
第46図 天神林遺跡18号住居跡

南側が調査範囲外で全体形はわからないが、一辺5.15mを測る整ったプランをもつ住居跡である。壁は33cmまで確認できた。床面は中央部がやや高く、良好な状態である。炭化物・焼土が広く散布しており、特にカマド前面付近に多く認められ、ワラ状の炭化物も床面に密着して検出された。柱穴は2ヶ所確認されたが通例とはやや異なる位置にある北壁寄りのピットは床面下38cmで、底面に自然礫が5個置かれていた。長さ10~20cm、幅5~10cmで、形態、規模ともにやや差がある。柱の根本を巡る形である。床の中央寄りに更にピットがあるがこれは床面下13cmで、やや浅いピットである。両者ともに焼土・炭化物等の混入はなかった。カマドは両袖型で先端に長甕を倒立させて補強材をしている。袖内には長甕の破片が埋め込まれた粘土使用袖である。焚口は両長甕間の35cmで、燃焼部の奥行は60cmであった。煙道は70cmである。カマド右側の貯蔵穴に長方形の整った掘り込みで床面下27cmに平坦な底面があり、更に40cm程度深いピットがある。遺物はカマド内から壺、床面から壺、長甕が出土している。

天神林遺跡18号住居跡出土遺物（第47図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考                                     |
|----|----|---------------------|---|--|--|
| 1  | 壺  | 口径(11.4)            | 口縁部は外反ぎみに内傾する。端部は丸い。体部と境の稜は明瞭。体部は丸味を持つ。                 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部の斜位のヘラケズリ。                               | A+E<br>内外：暗茶褐色<br>1/10存 覆土下層           |
| 2  | 壺  | 口径(12.1)            | 口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は外側に尖る。体部との境の稜は明瞭。                      | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部は斜位のヘラケズリ。                           | A'+F<br>内：暗褐色<br>外：淡黒褐色<br>3/20存 覆土下層  |
| 3  | 壺  | 口径(11.3)<br>器高(4.6) | 口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は外側に鋭く尖る。体部と境の稜は明瞭。体部は丸味を持って底部へ移行。調整丁寧。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。底部は縱位のヘラケズリ。稜の下端は鋭く削り込まれている。 | A+E<br>内外：暗赤褐色～黒褐色<br>7/20存 覆土下層       |
| 4  | 壺  | 口径(14.5)            | 口縁部は大きく外反し、丸い端部は外側に屈曲する。稜は明瞭で、体部は丸味を持つ。                 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅の為、整形手法不明瞭。                         | A+A'+E<br>内外：明茶褐色<br>1/5存 覆土           |
| 5  | 壺  | 口径(11.1)<br>器高(3.9) | 口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は丸い。体部と境の稜は明瞭。体部は丸味を持って底部へ移行。           | 全面に亘って、磨滅している。   | A'+B+E+F<br>内：赤褐色<br>外：茶褐色<br>7/10存 床直 |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)           | 形態の特徴  | 手法の特徴                                 | 備考                                      |
|----|----|-------------------|--|---------------------------------------|---|
| 6  | 壺  | 口径(12.4)          | 口縁部は外反ぎみに外傾して立ち、内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。稜は緩やかで、稜と口縁部下端の間に一本の沈線が廻る。 | 口縁部内面に横ナデの一部が認められる他は磨滅している。           | A+A'+E<br>内外: 暗赤褐色~淡赤褐色<br>1/10存 覆土下層   |
| 7  | 壺  | 口径(11.5)          | 口縁部は外反する。端部は尖る。稜は緩やかである。体部は丸味を持つ。口縁部と稜の間に浅い一本の沈線が廻る。       | 内面から口縁部外面にかけて横ナデ。他は磨滅。                | A+D<br>内外: 淡黒褐色~黒褐色<br>3/10存 覆土下層       |
| 8  | 壺  | 口径(10.9)          | 口縁部は大きく外反し、端部は丸い。体部と境の稜は明瞭。体部は丸味を持つ。                       | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。他は磨滅している。           | A'+E<br>内: 淡赤褐色<br>外: 茶褐色<br>3/10存 カマド内 |
| 9  | 壺  | 口径(11.1)          | 口縁部は外反後、内湾して外傾する。端部は丸い。                                    | 全面が磨滅しており、整形手法不明瞭。                    | A'+E<br>1/5存 覆土下層                       |
| 10 | 壺  | 口径 12.4<br>器高 4.6 | 口縁部は外反し、やや尖った端部を持つ。口縁部下端には一本の沈線が廻る。体部から底部は丸味を持つ。体部と境の稜は明瞭。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面から底部は横、斜位のヘラケズリ。丁寧。 | A+A'+E+F<br>内外: 明褐色<br>19/20存 覆土        |
| 11 | 壺  | 口径(13.4)          | 口縁部は外反する。端部は細く尖って屈曲する。稜は明瞭。                                | 内面から口縁部外面にかけて横ナデ。他は磨滅の為不明瞭。           | A+E<br>内外: 淡茶褐色~淡赤褐色<br>1/10存 覆土下層(やや軟) |
| 12 | 壺  | 口径(13.2)          | 口縁部は外反する。端部は細いが丸味を持つ。体部との境の稜は緩やかである。                       | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部は横位のヘラケズリ。            | A+D<br>内外: 淡赤褐色<br>3/20存 覆土             |
| 13 | 壺  | 口径(13.5)          | 口縁部はほぼ直線的に外傾する。端部は丸い。体部と境の稜は明瞭。                            | 内面から口縁部外面は横ナデ。稜の下端はヘラケズリされる。          | A'+E<br>内: 淡赤褐色<br>外: 灰褐色<br>1/10存 覆土   |
| 14 | 壺  | 口径(13.9)          | 口縁部は外反後、内湾して段を持ち、内湾ぎみに外傾する。端部は細く丸い。体部と境の稜は明瞭。体部の器肉は厚い。     | 内面から口縁部外面は横ナデ。器面の凹凸目立つ。               | A'+E<br>内外: 淡赤褐色~橙色<br>1/10存 覆土         |

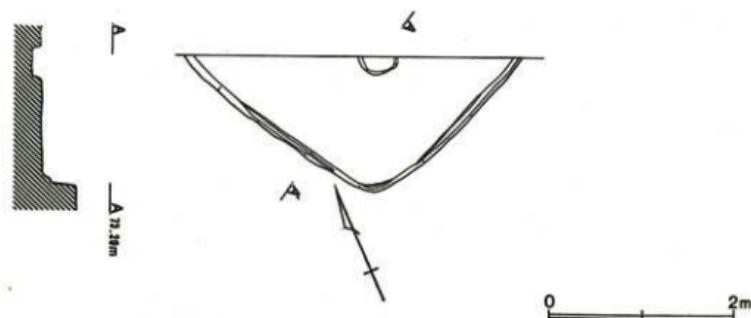


第47図 天神林遺跡18号住居跡出土遺物

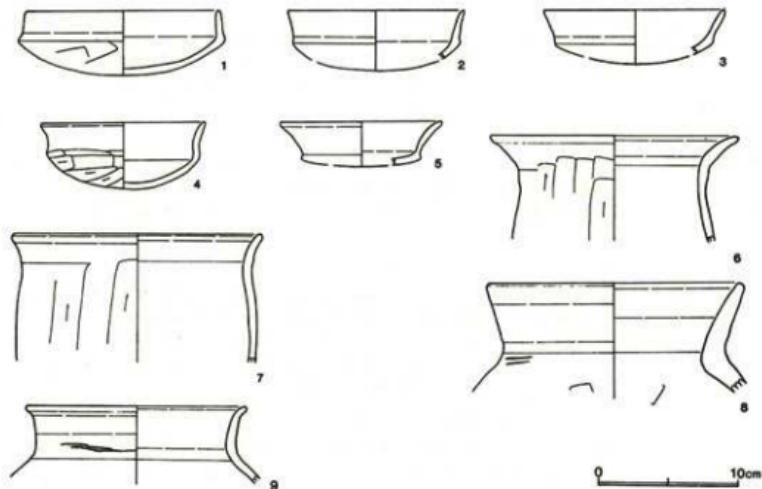
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴   | 手法の特徴                                   | 備考   |
|----|----|----------|---|---|--|
| 15 | 壺  | 口径(11.2) | 口縁部は外反ぎみに直立する。端部は細く丸い。体部と境の接は緩やかである。            | 全面に亘って、磨滅している。                          | A'<br>内外:赤褐色~橙褐色<br>1/10存 カマド内                       |
| 16 | 甕  | 口径 19.7  | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胸部と境の段は緩やかで、部分的にある。胴部はわずかに張る。 | 口縁部内外面は横ナデ。胸部外面は斜位のヘラケズリ。               | A+A'+F<br>内:暗赤褐色<br>外:淡赤褐色<br>1/2存 カマドN <sub>1</sub> |
| 17 | 甕  | 口径 20.5  | 口縁部は大きく外反する。端部は丸く、わずかに外傾に屈曲する。胴部はわずかに張る。        | 口縁部内外面は横ナデ。胸部外面は斜、縱位のヘラケズリ。内面はヘラナデ。     | A+D+E<br>内外:淡茶褐色~黒褐色<br>1/2存 カマドN <sub>2</sub>       |
| 18 | 甕  | 口径(20.0) | 口縁部は内傾ぎみに外反して、外傾する。端部は丸い。形態はやや歪む。               | 全面に亘って、磨滅しているが、口縁部内面、胴部はわずかにヘラナデが確認できる。 | A+A'+B+F<br>内外:淡赤褐色<br>1/5存 カマドN <sub>1</sub>        |
| 19 | 甕  | 口径(18.9) | 口縁部は外反し、外傾する。端部は丸く、内側に屈曲する。胴部は直線的である。整形丁寧。      | 口縁部内外面横ナデ。胸部外面の縱位のヘラケズリ。                | A'+B+C+F<br>内:暗赤褐色<br>外:淡褐色<br>1/5存                  |
| 20 | 甕  | 口径(18.9) | 口縁部は外反し、端部は丸く、外側に大きく屈曲する。胴部は若干張る。               | 口縁部内外面とも横ナデ。胴部から口縁部中位まで斜位のヘラケズリ。内面ヘラナデ。 | A+A'+B+C+D+E<br>内外:淡赤褐色<br>1/10存 覆土                  |

## (9) 天神林遺跡19号住居跡(第48図)

隅の一部のみ検出された。プランはかなり整っており、全体プランもよく整った竪穴住居跡の一部と思われる。壁高は確認面下25cm程度であり、ほぼ垂直に落ち込んでいる。床面状況は概ね良好であった。床面下には更に掘り込んだ部分があり、10cm程度の厚さになっている。これは壁際から掘り込まれており、他の例のように壁とやや離れて掘り込むものとは異なっている。柱穴の一部が検出された。床面下27cmで径40cm前後であった。隅部との位置関係から観察すると、隅の対角線上に位置する柱穴の一つであろう。遺物は割合多く、覆土およびその下層から壺、長甕が出土している。



第48図 天神林遺跡19号住居跡



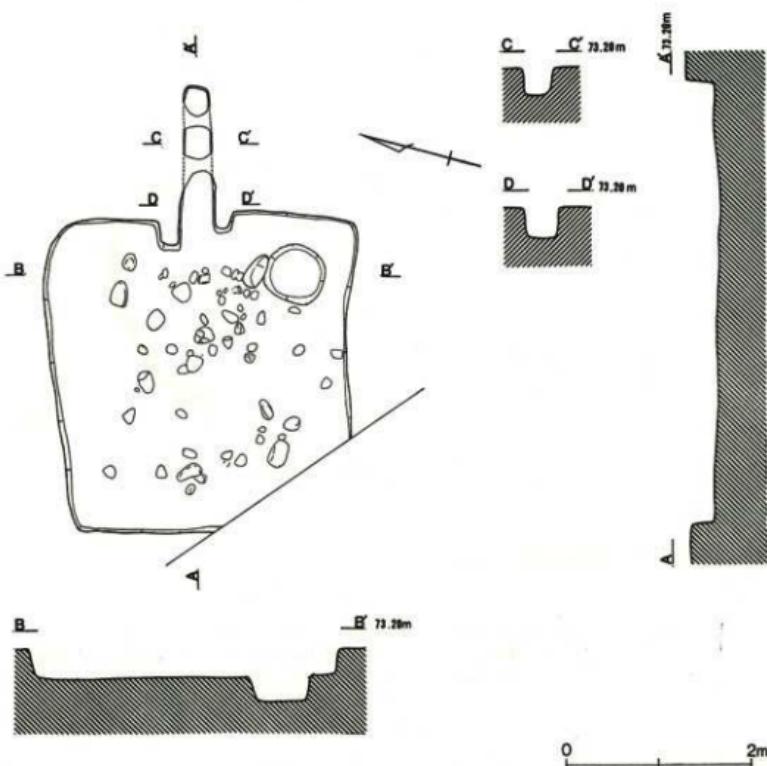
第49図 天神林遺跡19号住居跡出土遺物

天神林遺跡19号住居跡出土遺物（第49図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(No.)            | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考                                 |
|----|----|---------------------|---|--|------------------------------------|
| 1  | 壺  | 口径(13.9)<br>器高(4.6) | 口縁部は丸味をもって内傾する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味をもって底部へ移行する。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。磨滅目立ち、体部、底部に未調整部を残す。 | A+B'+D+E<br>内外：淡赤褐色～茶褐色<br>2/5存 覆土 |

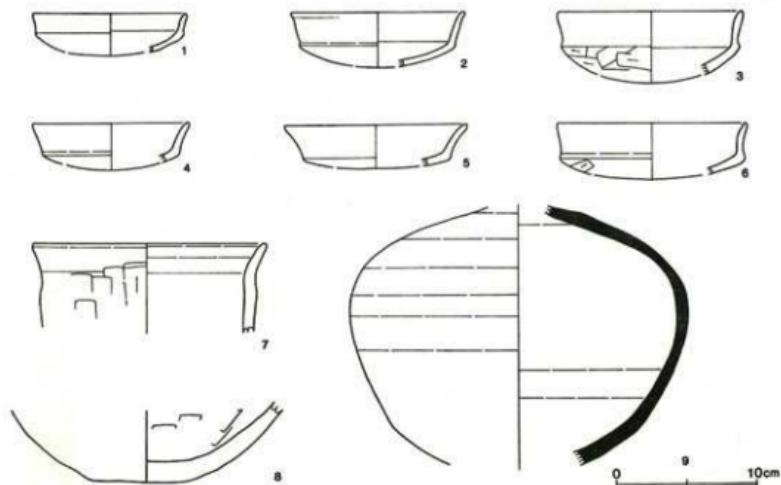
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考  |
|----|----|----------------------|--|--|---|
| 2  | 壺  | 口径(12.7)             | 口縁部は外傾する。端部は丸い。体部との境に縫やかな縫をもつ。                 | 全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。                                       | A+A'<br>内外：淡赤褐色～淡茶褐色<br>3/20存 覆土下層          |
| 3  | 壺  | 口径(12.9)             | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部との境の縫は明瞭だが、磨滅の為、丸味をもつ。   | 全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。                                       | A'+F<br>内外：淡橙褐色<br>1/10存 覆土                 |
| 4  | 壺  | 口径 11.9<br>器高 4.8    | 口縁部は直立後、外反する。端部は丸い。体部から底部は丸味をもち、器高は高い。形態整う。    | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。内面のナデ丁寧。                       | A'+E<br>内外：淡赤褐色～茶褐色<br>7/10存 覆土             |
| 5  | 壺  | 口径(11.6)<br>器高 (3.2) | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。底部は浅い。                       | 口縁部は内外面とも横ナデ。  | A+A'<br>内外：淡暗褐色～黒褐色<br>1/10存 覆土             |
| 6  | 甕  | 口径(17.8)             | 口縁部は大きく外反し、端部は外側に屈曲し、胴部は次第に膨らむ。                | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は磨滅している。                        | A+B+E+F<br>内外：淡橙褐色<br>1/5存 覆土下層             |
| 7  | 甕  | 口径(18.0)             | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。                   | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は殆ど磨滅しているが、僅かに横ナデの痕跡を留めている。     | A+A'+B+E+E<br>内：淡灰褐色<br>外：赤褐色<br>3/20存 覆土下層 |
| 8  | 壺  | 口径(18.5)             | 口縁部は下端に緩やかな段を有し、直線的に外傾する。端部は内側がやや尖る。胴部は大きく膨らむ。 | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも磨滅しているが、僅かに外面は縦位のヘラケズリ、内面は斜位のヘラナデが見られる。 | A+A'+B+C+E+F<br>内外：淡橙褐色～灰褐色<br>1/5存 覆土下層    |
| 9  | 壺  | 口径(15.8)             | 口縁部は緩やかに外傾し、端部は外反し、丸い。胴部は大きく膨らむ。               | 全面に亘り、磨滅しているが、口縁部外面にはヘラによる痕跡を留め、ヘラケズリが口縁部まで及んでいたことを窺わせる。     | A+A'+C+E+F<br>内：灰褐色<br>外：淡橙褐色<br>1/10存 覆土下層 |

(a) 天神林遺跡20号住居跡 (第50図)



第50図 天神林遺跡20号住居跡

3.4m×3.3mの方形プランでよく整った壁である。壁の高さは25cmまで確認できた。床面は焼土・炭化物が全体的に散布し、一部特に顕著であった。柱穴は検出できなかった。カマドは両袖型の粘土組みであるが、覆土と大差ない粘土で細部は検出できなかった。土器の補強は無い。内壁は若干焼けていたが、底面は必ずしも明瞭な面ではない。したがって燃焼部と煙道の境界ははっきりしないが、全長1.75mのカマドである。煙道部は一部に天井が残っていた。煙道先端はほぼ垂直に上る。貯蔵穴はカマド右側にあり、ほぼ円形に近いプランであるが、これも明確な壁は検出できなかった。床面下29cmである。遺物は床面から甕、壺が出土している他に大小の自然礫(5~25cm)が床面上に散乱していた。形態は差があり、特に形が一定したものではないが、出土レベルの差はない。主として床面の中央寄りに偏って出土した。



第51図 天神林遺跡20号住居跡出土遺物

天神林遺跡20号住居跡出土遺物（第51図）

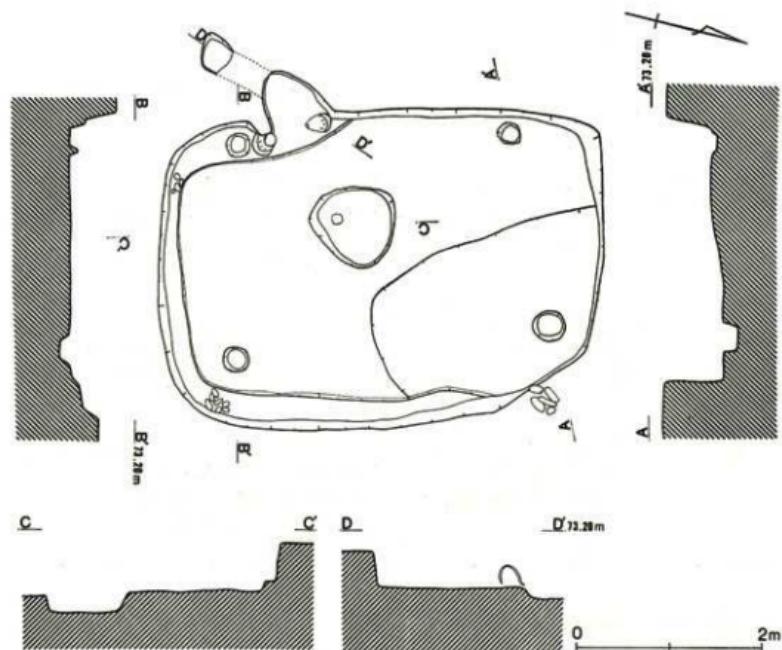
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴  | 手法の特徴                                     | 備考   |
|----|----|----------|--|---|--|
| 1  | 壺  | 口径(11.0) | 口縁部は短く、緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。              | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。全体に磨滅や凹凸が目立つ。 | A + D + E<br>内外：茶褐色～暗茶褐色<br>3/10存 覆土                 |
| 2  | 壺  | 口径(12.1) | 口縁部は直線的に外傾し端部付近で外反する。体部と境の稜は明瞭。体部は丸味を持つ。器内は一定。 | 全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。                    | A' + F<br>内外：淡赤褐色<br>2/5存 北床                         |
| 3  | 壺  | 口径(13.4) | 口縁部は中位から肥厚し、外反する。端部は丸い。体部と境の稜は明瞭。              | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。            | A + D + F<br>内外：黒褐色～赤茶褐色<br>1/5存 床直                  |
| 4  | 壺  | 口径(11.4) | 口縁部は外反する。端部は丸い。口縁部下端には二本の沈線が巡る。                | 全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。                    | A' + F<br>内：淡赤褐色<br>口縁：淡茶褐色<br>体部～底部：黒褐色<br>1/10存 床直 |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考  |
|----|----|----------|---|--|---|
| 5  | 壺  | 口径(14.3) | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。底部は浅いと思われる。                     | 口縁部内外面は横ナデが施されるが、他は磨滅している。                                 | A' + F<br>内外: 暗茶褐色~暗褐色<br>1/10存 床                   |
| 6  | 壺  | 口径(13.8) | 口縁部は直立て立ち、外反する。端部は丸く、内側に一本の浅い沈線が巡る。体部との境に大きな稜を持つ。 | 内面から口縁部外面は横ナデ、胴部は部分的に斜位のヘラケズリが確認できるが、殆ど磨滅している。             | A + E<br>内外: 赤褐色~茶褐色<br>1/4存 北床直                    |
| 7  | 甕  | 口径(16.8) | 口縁部は外反する。端部は丸い。胴部は緩やかな段を上半部に有し、内傾する。              | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は継位のヘラケズリ。内面はヘラナデされると思われるが磨滅の為不明瞭。        | A + A' + C + F<br>内外: 淡茶褐色<br>1/10存 床               |
| 8  | 壺  | 底径 6.5   | 平底である。胴部は内湾気味に立ち上がる。器内は一定している。                    | 磨滅、剥落が目立つ。胴部内面は不定方向のヘラナデ。                                  | A + A' + B + C + F<br>内: 暗赤褐色<br>外: 暗茶褐色<br>3/10存 床 |
| 9  | 瓶  |          | 胴部は上半部で大きく膨らみ、次第に内湾して底部へ移行する。短頸の瓶と思われる。           | ロクロ整形、胴部外面は横位の櫛目が施される。下半部は平行叩きの上に櫛目が施される。内面は青海波文を胴部下半に留める。 | A + A' + D + F<br>内: 淡青灰色<br>外: 暗青灰色<br>2/5存 床      |

## (2) 天神林遺物21号住居跡（第52図）

4.8m×3.4mのやや歪んだ長方形プランを示す。床面は不明瞭であるが、遺物やカマド袖部の基底等からレベルをおさえることができた。床面下は15~20cmの掘形があり、底面はおうとが激しい粗雑な掘り方をしている。部分的に壁面や内側から掘り込んだところもある。柱穴の壁面に寄った位置で検出され、通例とはやや異なる。床面下15~20cmであるが南隅寄りのものは40cmでかなり深い。カマドは位置、形態がやや異質である。両袖型に属するが袖部が極端に短く、その端部は長甕を内傾させて倒立状態で補強材としている。燃焼部は奥行70cmでやや幅広であるが、崩壊が激しく、右側部はやや不明瞭な状況であった。焚口部の面が壁面とやや角度を異にしているが、これは燃焼部の中軸方向と一致している。煙道部は70cmの長さであったが、図のようにカマド中軸とはかなりの角度で曲がっている。この周辺は遺構確認面が明瞭ではないところであるが、煙道端部の焼土が認められたので、こちらへのびているものと思われる。なおカマド内は焼土が少なく、底面の確認もかなり困難であった。遺物にかなり多くの壺が発見された他、長甕、瓶が若干出土した。床面よりやや浮いて出土したものがほとんどである。なお北東および南東隅寄りの壁際床面上から、各々7個、4個の扁平自然環が、ほぼ面をそろえて出土している。長さ10~15cm、幅5~10cm

の直方体形状の円礫でまとまって出土していた。なお北隅に扁平碟5ヶが置かれ、焼土がわずかに認められる遺構があるが、これは21号住居跡の覆土中にわずかに入っており、新しい遺構と思われる。この遺構は土器類の遺物は全くない。

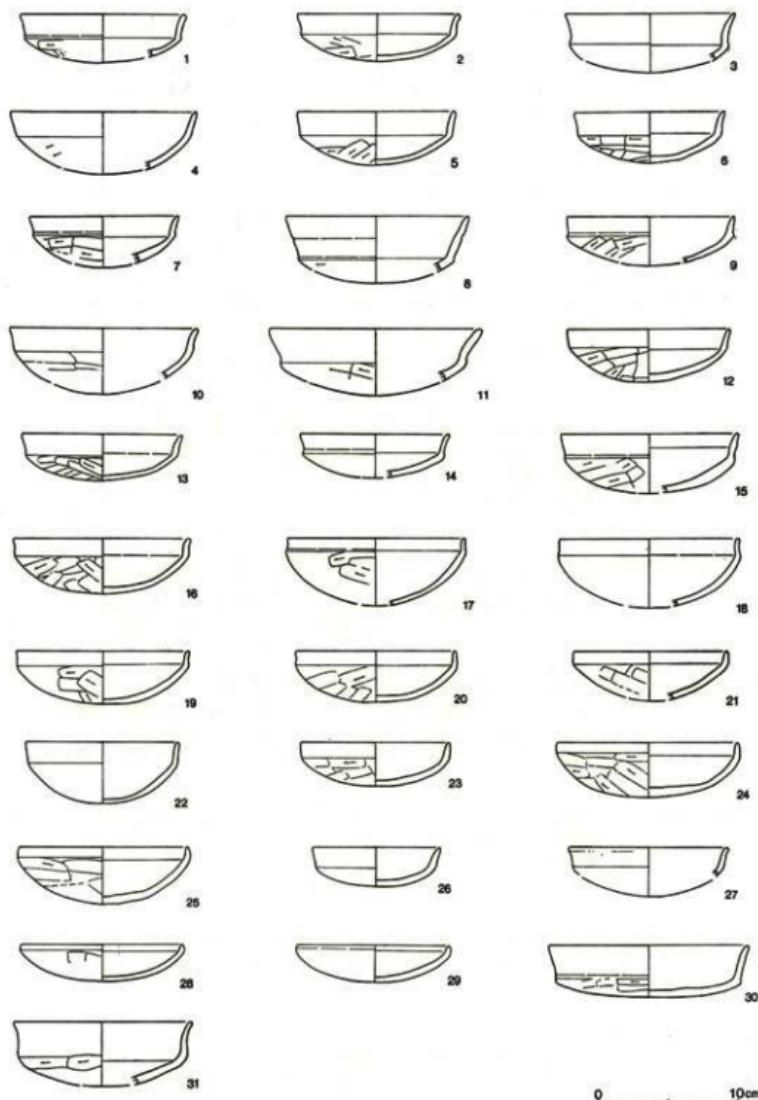


第52図 天神林遺跡21号住居跡

天神林遺跡21号住居跡出土遺物（1）（第53図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴  | 手法の特徴                        | 備考                                      |
|----|----|----------|--|------------------------------|---|
| 1  | 壺  | 口径(12.1) | 口縁部は短く、緩やかに外反し、端部は丸い。体部と境の稜は緩やかである。              | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部は横位のヘラケズリ。   | A + D + E<br>内：赤褐色<br>外：明赤褐色<br>1/5存 覆土 |
| 2  | 壺  | 口径(11.7) | 口縁部は短く、外反し、端部は丸い。体部を境の稜は緩やかである。体部は丸味を持って底部へ移行する。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。 | A + C + E + F<br>内外：淡赤褐色<br>1/2存 覆土     |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考  |
|----|----|---------------------|--|--|---|
| 3  | 壺  | 口径 12.2             | 口縁部は直立ぎみに立ち、外反する。端部は細く尖る。体部との境の稜は緩やかである。       | 全面に亘って、磨滅している。                                   | A + B + C + F<br>内: 淡茶褐色<br>外: 淡赤褐色<br>1/10存 覆土下層 |
| 4  | 壺  | 口径(13.4)            | 口縁部は直線的に外傾する。端部はやや尖り気味。                        | 口縁部は内外面とも横ナデ。体部は内外面とも磨滅しているが、外面には僅かに斜位のヘラケズリが残る。 | A' + E<br>内外: 淡茶褐色<br>7/20存 覆土                    |
| 5  | 壺  | 口径 11.4<br>器高 3.8   | 口縁部は直線的に外傾し端部は丸い。体部との境の稜は不明瞭。体部は丸味をもち、底部へ移行する。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。口縁部と体部の境付近は磨滅している。   | A + B + C + E<br>内外: 淡赤褐色<br>3/5存 覆土              |
| 6  | 壺  | 口径 10.7<br>器高 (3.7) | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。丸味を持って底部へ移行。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。                   | A + F<br>内外: 淡茶褐色<br>1/2存 覆土                      |
| 7  | 壺  | 口径(10.8)            | 口縁部はやや直線的に外傾する。端部は細く丸い。体部との境の稜は明瞭。             | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。稜付近に未調整部を残す。     | A + A' + E<br>内: 淡茶褐色<br>外: 淡赤褐色<br>1/4存 覆土       |
| 8  | 壺  | 口径(12.7)            | 口縁部は直線的に外傾する。中位に一本の沈線が巡る。端部は細いが丸い。体部との境の稜は明瞭。  | 内面は横ナデ。外面は磨滅している。体部外面は横位のヘラケズリと思われる。             | A' + E<br>内: 黒褐色～赤褐色<br>外: 茶褐色<br>2/5存 覆土         |
| 9  | 壺  | 口径(12.1)            | やや直線的に外傾する。端部は尖る。体部との境の稜は明瞭。                   | 内面から口縁部外面にかけて横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。内面は底部付近の剥落目立つ。    | A + B'<br>内: 黒褐色<br>外: 暗褐色<br>1/5存 覆土             |
| 10 | 壺  | 口径(13.3)            | 口縁部は外傾して外反する。端部は丸い。                            | 内面から体部外面の一部まで横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。                  | A' + E<br>内外: 淡赤褐色～淡橙色<br>1/5存 覆土                 |
| 11 | 壺  | 口径(15.3)            | 口縁部は外反して外傾する。端部は丸く、体部との境の稜は丸味を持つ。器肉は一定している。    | 内面から口縁部外面にかけて横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。                  | A' + F<br>内外: 淡茶褐色<br>3/20存 覆土                    |

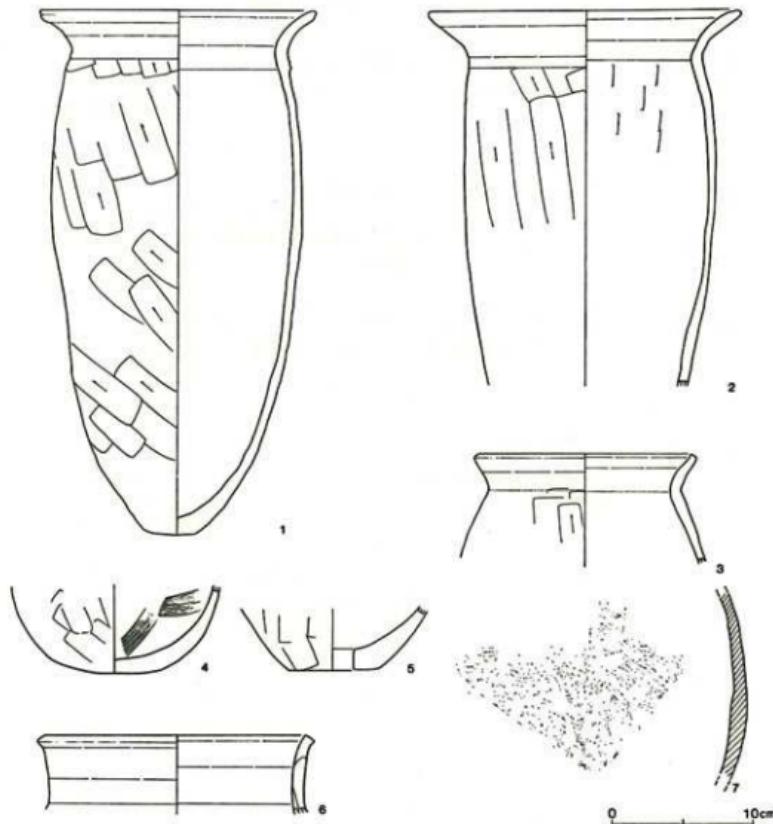


第53図 天神林遺跡21号住居跡出土遺物(1)

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考  |
|----|----|----------------------|--|--|---|
| 12 | 壺  | 口径 11.6<br>器高 3.8    | 口縁部はやや直線的に外傾する。端部は内側に尖る。体部は丸味を持って底部へ移行する。                | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜、横位のヘラケズリ。稜付近に未調整部を残す。       | A' + E + F<br>内:赤褐色<br>外:淡黒褐色~茶褐色<br>19/20存 覆土(北)                 |
| 13 | 壺  | 口径 11.5<br>器高 3.3    | 口縁部は外傾して、端部で少し外反する。端部は細く丸い。体部は丸味を持つ。形態整う。                | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部は不定方向のヘラケズリ。底部内面は磨滅している。     | A + E<br>内外:灰茶褐色<br>13/20存 覆土                                     |
| 14 | 壺  | 口径(10.7)             | 口縁部は細く、緩やかに外反する。端部は外側に屈曲し丸い。体部との境の稜は明瞭。                  | 全面に亘って、磨滅している。                                   | A + A' + E<br>内外:淡茶褐色<br>底部:灰黒褐色<br>1/5存 覆土                       |
| 15 | 壺  | 口径(12.7)<br>器高 (4.2) | 口縁部は緩やかに外反する。中位は肥厚し、端部は細い。体部との境の稜は明瞭。体部の器内は厚く、丸味を持つ。     | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。                     | A + A' + E<br>内外:明茶褐色~淡茶褐色<br>1/4存 覆土                             |
| 16 | 壺  | 口径(12.8)             | 口縁部は直立し、端部付近で大きく外反する。端部は丸い。体部との境の稜は不明瞭。体部は丸味を持って底部へ移行する。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は不定方向のヘラケズリ。                   | A + A' + B' + D + E<br>外(底部):赤褐色<br>(口縁):黒褐色<br>内:淡赤褐色<br>2/5存 覆土 |
| 17 | 壺  | 口径(13.0)             | 口縁部は短く、内傾し、端部で外反する。端部は尖る。稜は明瞭。体部の器内は厚い。                  | 内面には多く未調整部を残す。内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。磨滅目立つ。 | A + A' + D + E + F<br>内:茶褐色<br>外:淡赤褐色<br>2/5存 覆土                  |
| 18 | 壺  | 口径(13.0)             | 内傾して外反する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。                           | 全面に亘って、磨滅している。                                   | A' + E + F<br>内外:赤褐色~淡茶褐色~淡暗灰色<br>2/5存 覆土                         |
| 19 | 壺  | 口径(12.4)<br>器高 (3.8) | 口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は丸味を持つ。体部は丸部をもって底部へ移行する。形態整う。 | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。磨滅目立つ。         | A + C + E<br>内外:赤褐色~茶褐色<br>2/5存 覆土                                |
| 20 | 壺  | 口径(11.6)<br>器高 (3.6) | 口縁部は内傾ぎみに立ち端部は若干外反し、丸い。体部は丸味をもち、底部へ移行。形態整う。              | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。口縁部と体部の境に未調整部を残す。    | A' + C + E<br>内外:淡赤褐色<br>3/5存 覆土                                  |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考  |
|----|----|----------------------|--|--|---|
| 21 | 壺  | 口径(11.1)             | 口縁部は直立し、端部は丸い。体部はやや直線的である。                                 | 磨滅が目立つ。体部外面は斜位のヘラケズリと思われる。                   | A+A'+E<br>内:暗茶褐色<br>外:淡茶褐色<br>1/4存 覆土     |
| 22 | 壺  | 口径 11.3<br>器高 4.6    | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味を持って底部へ移行する。小振りだが器高は高い。 | 全面に亘って、磨滅している。                               | A+D+F<br>内外:暗茶褐色<br>完存 №3床                |
| 23 | 壺  | 口径 11.0              | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は鋭く尖る。体部との境の稜は不明瞭。体部は丸味を持つ。                | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。             | A'+B'+E<br>内外:淡赤褐色<br>4/5存 覆土             |
| 24 | 壺  | 口径 13.2<br>器高 4.0    | 口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。端部は丸い。体部は丸味を持つ。底部の器内は厚い。形態歪む。               | 内面はナデ(不定方向)<br>口縁部内外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。   | A'+F<br>内外:暗茶褐色～明赤褐色<br>4/5存 覆土           |
| 25 | 壺  | 口径(12.2)<br>器高 (4.1) | 口縁部は短く、内湾し、端部は内側に矢る。体部は丸味をもって底部へ移行する。                      | 内面から口縁部外面は不定方向、横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。底部に未調整部を残す。 | A+B+C+F<br>内外:茶褐色～淡褐色<br>3/10存 覆土         |
| 26 | 壺  | 口径 (9.3)<br>器高 (2.8) | 小形である。口縁部は緩やかに外反する。端部は尖る。体部は丸味をもつ。                         | 全面に亘って、磨滅している。                               | A+E<br>内外:淡黒褐色～淡茶褐色<br>底部:赤褐色<br>3/10存 覆土 |
| 27 | 壺  | 口径(11.2)             | 口縁部は外傾し、外反する。端部は外側に屈曲し、丸い。                                 | 全面に亘って、磨滅している。                               | A+A'+E<br>内外:灰茶褐色<br>1/5存 覆土              |
| 28 | 壺  | 口径(12.8)<br>器高 (2.7) | 口縁部は短く内湾し、端部は丸い。体部から底部は丸味を持つ。                              | 掲滅が目立つが、体部外面は斜位のヘラケズリと思われる。                  | A+A'+C+E<br>内外:淡赤褐色<br>2/5存 覆土            |
| 29 | 壺  | 口径(11.3)<br>器高 (2.8) | 口縁部は短く、内湾し、端部は丸い。体部から底部は丸味をもつ。形態やや歪む。                      | 全面に亘って磨滅している。                                | A'+B'+D+E<br>内外:淡黒褐色～茶褐色<br>1/5存 覆土       |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴  | 手法の特徴                                      | 備考                                |
|----|----|---------------------|--|--|-----------------------------------|
| 30 | 壺  | 口径(13.6)<br>器高(3.8) | 口縁部はほぼ直線的に外傾する。端部は丸い。体部(底部)との境の棱は明瞭。体部は口縁部に比べ器内が厚い。形態歪む。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部は横位のヘラケズリがされるが殆ど磨滅している。    | A+E+F<br>内外: 明茶褐色~淡赤褐色<br>2/5存 覆土 |
| 31 | 壺  | 口径(12.8)            | 口縁部は内湾ざみに立ち上がり、外反する。端部は細く丸い。体部は丸味をもつ。器内は厚い。形態やや歪む。       | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部は横位のヘラケズリ。体部下半から底部は磨滅している。 | A'+E<br>内外: 赤褐色<br>1/5存 覆土        |



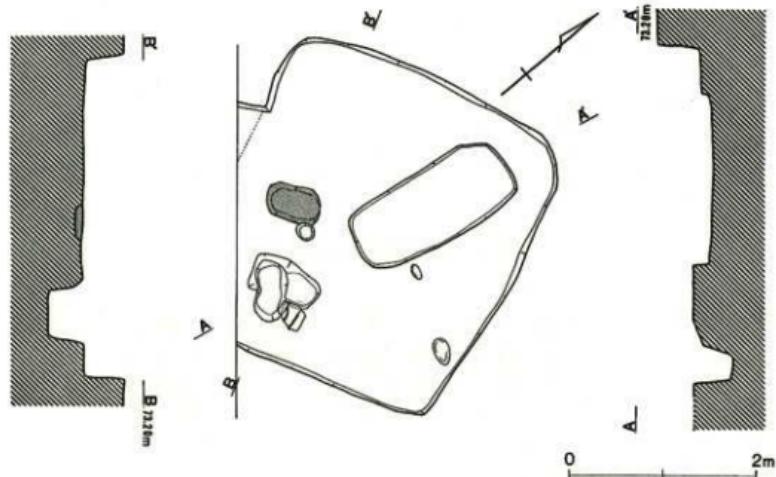
第54図 天神林遺跡21号住居跡出土遺物(2)

## 天神林遺跡21号住居跡出土遺物(2)(第54図)

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)                      | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考   |
|----|-----|------------------------------|---|--|--|
| 1  | 甕   | 口径 19.8<br>器高 37.3<br>底径 3.8 | 口縁部は大きく外反する。端部は丸く、下端には浅い沈線が一本這る。胴部との境には段を有する。胴部は中位で張り、次第に内湾して平底の底部へ移行する。形態整う。 | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリされるが若干磨滅気味。内面はナデ。上半は磨滅し、未調整部を残す。 | A + F<br>内外: 淡赤褐色~明茶褐色<br>19/20存 カマド                     |
| 2  | 甕   | 口径 22.1                      | 口縁部は大きく外反し、端部は丸く、内傾に沈線が這る。胴部は上半で張る。   | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。胴部下半は磨滅している。         | A + A' + E<br>内外: 淡茶褐色<br>7/10存 カマド左袖                    |
| 3  | 甕   | 口径(15.8)                     | 口縁部は外反し、端部は内傾に尖る。胴部は徐々に張る。  | 胴部外面は縦位のヘラケズリ。他の部分は磨滅している。                                 | A + A' + C + F<br>内: 淡橙褐色<br>外: 種褐色~淡赤褐色<br>1/5存 覆土      |
| 4  | 小形壺 |                              | 丸底である。胴部は内湾して立ち上がる。   | 胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は刷毛目状のケズリ。内外面とも未調整部を残す。                    | A + B + C + E + F<br>内: 赤褐色<br>外: 赤褐色~黒色(底部)<br>1/10存 覆土 |
| 5  | 瓶   | 底径(6.3)                      | 平底を呈し、中央に孔を持つ。胴部は内湾気味に立ち上がる。  | 胴部外面は縦位のヘラケズリ。他の部分は磨滅している。                                 | A + A' + C + F<br>内: 灰褐色<br>外: 淡赤褐色<br>1/5存 覆土           |
| 6  | 甕   | 口径(19.7)                     | 口縁部は緩やかに外反する。端部は内側が尖る。輪積痕明顯。  | 全面に亘り、磨滅している。  | A' + D + F<br>内: 淡赤褐色~茶褐色<br>外: 暗赤褐色<br>1/10存 覆土(須恵質)    |
| 7  | 甕   |                              | 胴部の破片である。   | 粘土紐巻き上げ整形。内面は青海波文、外面は無文で入念な横ナデが施される。                       | A' + D + F<br>内外: 淡灰青色<br>3/10存 覆土                       |

(2) 天神林遺跡22号住居跡（第55図）

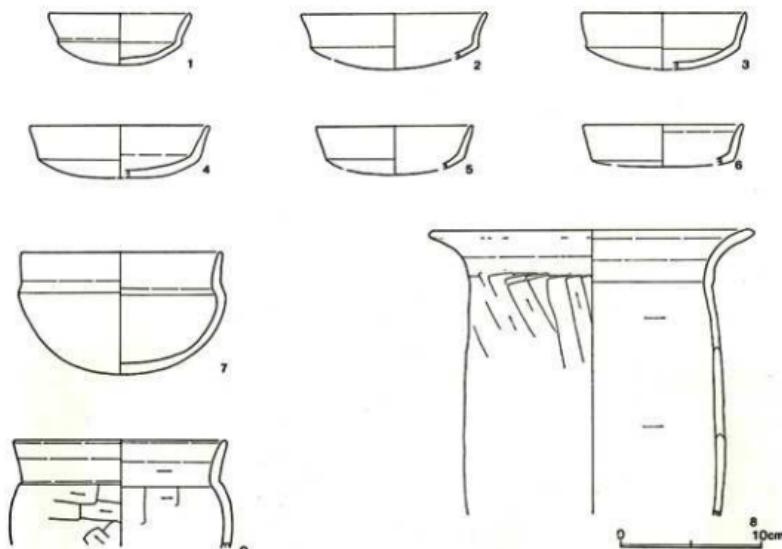
3.4m×3.1mのやや不整な方形プランを示す。南側は溝状造構に切られ、更に調査範囲外区域がある。床面はやや良好であるが、遺物出土レベル（自然疊、倒立長甕）でおさえることができた。中央は長方形土壇に切られている。柱穴については特にカマド左側に、貯蔵穴様のピットがある。通常の位置とは異なり、柱穴とも考えられる。2重になっているので2回にわたって掘られていることが知られる。以上の特長から柱穴の可能性が強い。壁外にかなり深いピット（底面は住居床レベルとほぼ同じ）があるが、22号住居跡との関係は不明である。カマドについては明確な造構はつかめなかつたが、南側の皿状ピット内に焼土木炭が散布し、長甕が倒立している部分があり、ここがカマドであった可能性が強い。南側の擾乱（溝状）がかなり深いものと思われる。長甕はカマド左袖の補強材として使用されたものであろう。出土遺物は坏、長甕が床面から出土している。



第55図 天神林遺跡22号住居跡

天神林遺跡22号住居跡出土遺物（第56図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴   | 手法の特徴         | 備考                                    |
|----|----|---------------------|---|---------------|---------------------------------------|
| 1  | 坏  | 口径(10.3)<br>器高(3.7) | 口縁部は外反し、端部で内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味をもつ。 | 全面に直り、磨滅している。 | A'+E<br>内：淡茶褐色<br>外：暗茶褐色<br>3/10存 覆土  |
| 2  | 坏  | 口径(13.4)            | 口縁部は外反する。端部は磨滅の為、丸い。体部との境の稜は明瞭。                 | 全面に直り、磨滅している。 | A+A'+C<br>内：淡赤褐色<br>外：緋褐色<br>1/10存 覆土 |



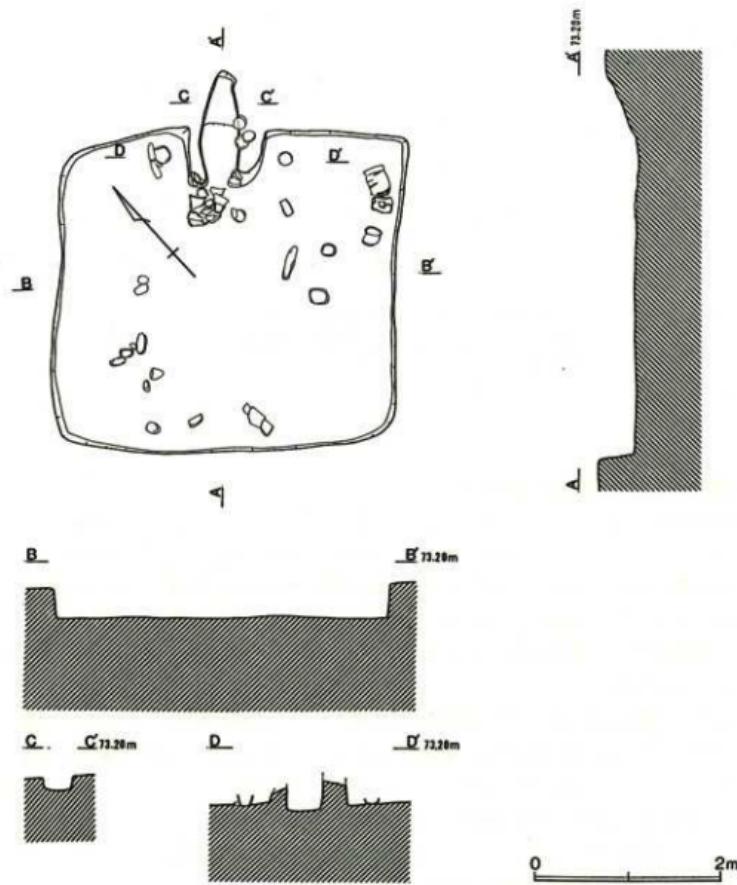
第56図 天神林遺跡22号住居跡出土遺物

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴                           | 手法の特徴                      | 備考  |
|----|----|----------------------|---------------------------------|----------------------------|---|
| 3  | 壺  | 口径(11.6)             | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は若干尖る。稜は緩やかである。 | 全面に亘り、磨滅している。              | A' + E + F<br>内: 淡橙色<br>外: 赤褐色<br>3/10存 覆土        |
| 4  | 壺  | 口径(12.6)<br>器高 (3.6) | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部は丸味を持つ。    | 全面に亘り、磨滅している。              | A + A' + E + F<br>内外: 淡茶褐色<br>7/20存 覆土            |
| 5  | 壺  | 口径(11.1)             | 口縁部は緩やかに外反し、内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。    | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。 | A' + E + F<br>内: 淡茶褐色<br>外: 淡茶灰色(黒色含む)<br>1/5存 覆土 |
| 6  | 壺  | 口径 11.4              | 口縁部は直線的に外傾して、短く、外反する。端部は丸い。     | 全面に亘り、磨滅している。              | A + D + E + F<br>内外: 淡赤褐色～黒褐色<br>3/20存 覆土         |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)           | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考   |
|----|----|-------------------|---|--|--|
| 7  | 壺  | 口径 14.6<br>器高 8.6 | 口縁部は内傾し、外反ぎ<br>みに外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭、<br>体部は丸味をもって底部へ<br>移行する。形態整う。 | 口縁部は内外面とも横ナ<br>デ。稜付近は指圧による調<br>整が加えられる。体部は内<br>外面とも磨滅している。 | A' + E<br>内外：橙色～橙褐色<br>3/5存 覆土上層                           |
| 8  | 甕  | 口径(23.2)          | 口縁部は大きく外反す<br>る。端部は細く尖る。胴部<br>は僅かに張る。輪積痕明<br>瞭。                       | 口縁部は内外面とも横ナ<br>デ。胴部外面は縦、斜位の<br>ヘラケズリ。内面は磨滅が<br>目立つ。横ナデ。    | A + A' + E + F<br>内：暗赤褐色～淡赤褐色<br>外：淡赤褐色～暗赤褐色<br>7/20存 No 1 |
| 9  | 壺  | 口径(15.3)          | 口縁部は緩やかに外傾す<br>る。端部は丸い。胴部は上<br>半部で張る。                                 | 口縁部は内外面とも横ナ<br>デ。胴部外面は横、斜位の<br>ヘラケズリ、内面は横位の<br>ヘラナデ。       | A + A' + E + F<br>内外：淡橙褐色<br>1/5存 覆土                       |

#### (2) 天神林遺跡23号住居跡（第57図）

3.6m×3.4mの方形プランでよく整った壁をもつ。床面は良好な状態ではなかったが遺物レベルでおさえることができる。柱穴は検出されなかった。カマドはかなり整った、しっかりしたものである。両袖型で、その先端は各々2個体のやや長大な縫を内傾させて立たせ粘土でかためている。その下面是床面下にやや埋め込まれていた。焚口幅25cmで燃焼部は奥行65cmで、やや両側にふくらんだ広い燃焼部である。底面、側面とともに良く焼けて木炭片、焼土が多く認められた。煙道部は幅広で短く、底面の傾斜がかなりあった。長さは60cm程で、上に抜ける。天井部は崩落しているが、右袖上に壺、小形甕が置かれていた。遺物はかなり多い。カマド左袖外側には長甕が倒立して置かれその周囲を囲むように偏平横長の自然縫が並べられていた。北東隅寄りの床面には甕類が3個並んで出土している。その他壺、甕が床面から出土している。自然縫も多く散乱しているが、形状に差があり、特に並べられたような状況は、カマド左側部分を除いては無い。なお、ほぼ中央には覆土を切り込んで円形土壙（23号）があった。土層の差があまりないので、底面を明確におさえることができなかつたが、23号住の床面までは達していなかつた。

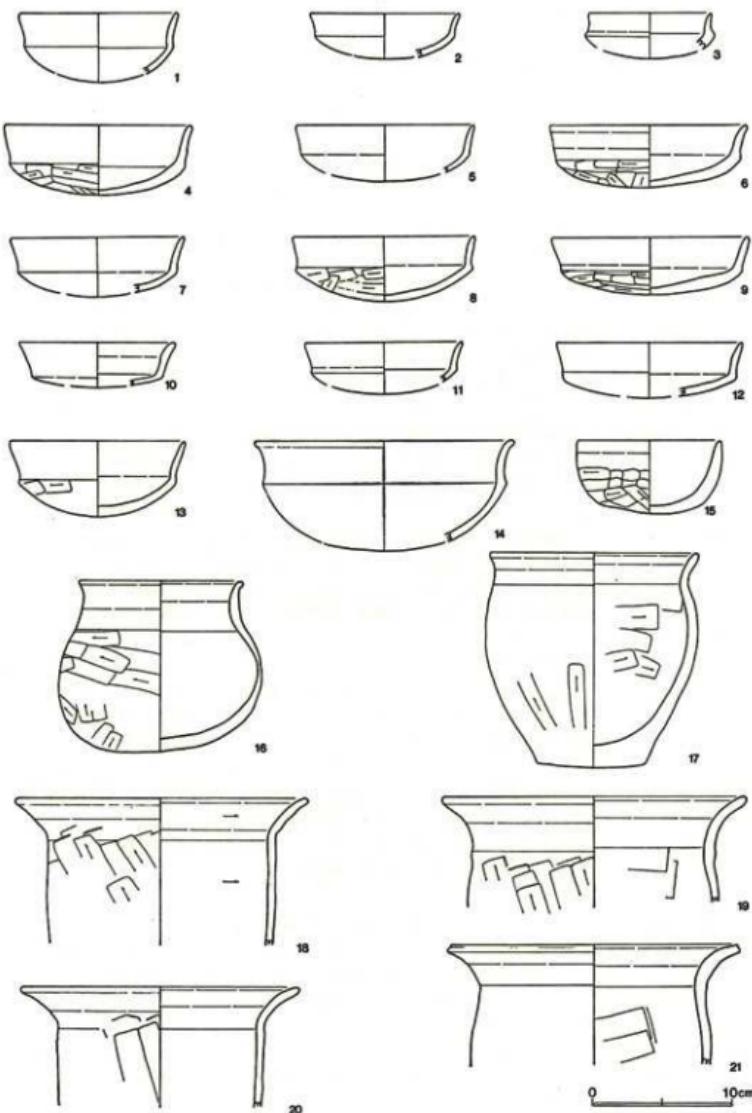


第57図 天神林遺跡23号住居跡

天神林遺跡23号住居跡出土遺物（1）（第58図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴                          | 手法の特徴              | 備考                           |
|----|----|----------|--------------------------------|--------------------|------------------------------|
| 1  | 壺  | 口径(11.6) | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。 | 口縁部外面の横ナデを除いて他は磨滅。 | A'+E<br>内外：淡橙褐色<br>1/5存 覆土下層 |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴   | 手法の特徴   | 備考  |
|----|----|----------------------|---|---|---|
| 2  | 2  | 口径(10.8)             | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は丸味を持つ。                                   | 内面にはナデが残るが、外面は磨滅している。                                 | A' + B' + E<br>内外：暗赤褐色～暗茶褐色<br>1/5存 床             |
| 3  | 坏  | 口径 (8.8)             | 口縁部は内傾ぎみに緩やかに外反する。端部は鋸く尖る。稜は明瞭で、器肉は厚い。                              | 内面から口縁部外面は横ナデ。稜の付近は未調整。                               | A' + B + C + D + E<br>内：淡赤褐色<br>外：淡黒褐色<br>1/10存 床 |
| 4  | 坏  | 口径 13.6              | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味を持ち底部へ移行する。器肉は次第に薄くなる。形態はやや歪む。   | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。                      | A' + B + C + D + E<br>内外：淡橙褐色<br>9/10存 覆土         |
| 5  | 坏  | 口径(13.6)             | 口縁部はゆるやかに外反する。端部は丸い。下端には浅い沈線が一本巡る。                                  | 全面に亘り、磨滅している。   | A'<br>内：淡赤褐色<br>外：淡橙褐色<br>3/20存 床                 |
| 6  | 坏  |                      | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。口縁部中位に低い段を有す。体部との境の稜は緩やかで、体部は丸味を持ち、底部へ移行する。形態歪む。 | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は不定方向のヘラケズリ。口縁部に未調整部分を残す。       | A + A' + C + E<br>内：淡赤褐色<br>外：橙褐色<br>完存 覆土        |
| 7  | 坏  |                      | 口縁部は緩やかに外反する。端部は細いが丸い。体部と境の稜は緩やかである。                                | 全面に亘り、磨滅している。   | A + A' + B + F<br>内外：淡赤褐色<br>1/5存 覆土              |
| 8  | 坏  |                      | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。器肉は一定。               | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は不定方向のヘラケズリ。しかし底部付近は磨滅が目立つ。         | A + A' + C + D + F<br>内：淡赤褐色<br>外：橙褐色<br>3/5存 覆土  |
| 9  | 坏  | 口径 13.6<br>器高 5.2    | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。形態やや歪む。         | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。体部は内外面とも未調整部を残している。 | A + F<br>内外：淡赤褐色～橙赤褐色<br>19/20存 №9                |
| 10 | 坏  | 口径(14.0)<br>器高 (4.3) | 口縁部は肥厚し、外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。体部は丸味を持つ。                         | 全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。                                | A + A' + E<br>内外：暗茶褐色～暗黒褐色<br>1/2存 №9             |



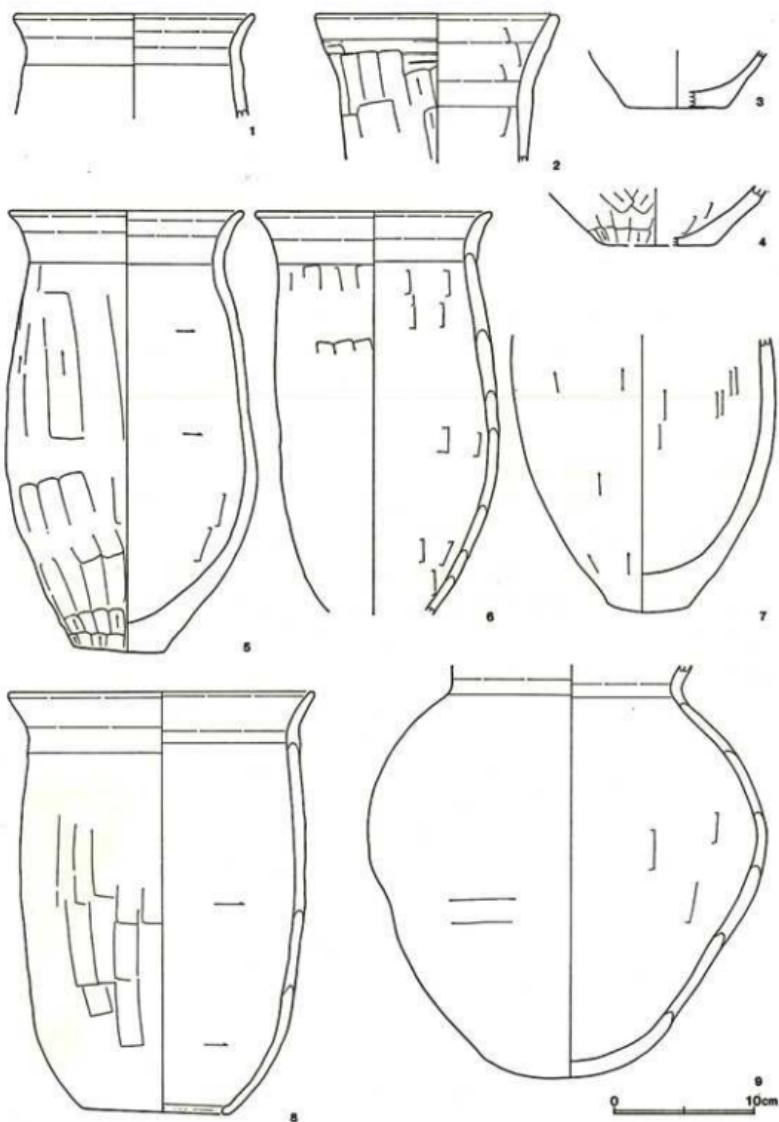
第58図 天神林遺跡23号住居跡出土遺物(1)

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)            | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考   |
|----|-----|--------------------|--|--|--|
| 11 | 壺   |                    | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の接は明瞭。                                       | 内面から口縁部外面は横ナデ。   | A' + C<br>内外：淡橙褐色<br>1/10存 覆土                          |
| 12 | 壺   |                    | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の接は緩い。                                       | 全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。                                     | A + A' + C + E<br>内：橙褐色<br>外：赤褐色<br>3/10存 覆土           |
| 13 | 壺   | 口径 12.8<br>器高 5.4  | 口縁部は直線的に外傾し、端部はやや内湾し、丸い。体部との境の接は明瞭。体部は丸味を持って底部へ移行する。形態整う。            | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリされるが、殆ど磨滅している。口縁部内面に未調整部を残す。    | A + F<br>淡赤褐色～茶褐色～灰黒灰色(底部)<br>19/20存 床                 |
| 14 | 塊   | 口径(18.6)           | 口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は丸く、外側に屈曲する。体部との境の接は明瞭。体部は丸味を持つ。                     | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。                                 | A + A' + E<br>内外：淡橙褐色<br>3/10存 床                       |
| 15 | 塊   |                    | 口縁部は短く、内湾ぎみに外傾する。体部は肥厚し内湾して底部へ移行する。形態歪む。                             | 内面から体部上半まで横ナデ。体部外面は横・斜位のヘラケズリ。底部付近は磨滅している。                 | A + A' + B + C + E<br>内：淡赤褐色<br>外：茶褐色<br>7/10存 覆土      |
| 16 | 小形壺 | 口径 11.8<br>器高 12.3 | 口縁部は把握し、内傾ぎみに直上して端部で外反する。端部は丸い。胴部は大きく膨らみ器肉を厚くして、丸底の底部へ移行する。形態歪む。     | 内面から口縁部外面は横ナデ。内面には指圧痕を残す。胴部外面は斜位のヘラケズリ。部分的に磨滅している。内面の調整丁寧。 | A + C + D + E + F<br>内：赤褐色<br>外：淡赤褐色～橙褐色<br>完存 床       |
| 17 | 小形壺 | 口径 14.9<br>器高 15.3 | 口縁部は外反する。端部は丸い。胴部は張り、上半部で口縁部と同様を持つ。器内は下半部ほど厚くなる。底部は平底であるが丸味を持つ。整形丁寧。 | 口縁部は横ナデ。胴部外面上半部は殆ど磨滅している。下半は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。底部は磨滅している。 | A' + B' + C + E + F<br>内：暗赤褐色<br>外：赤褐色～暗赤褐色<br>9/10存 床 |
| 18 | 甕   | 口径(21.1)           | 口縁部は外反して外傾する。端部は丸い。胴部は直線的である。  | 内面から口縁部外面は横ナデ(内面は若干磨減)。胴部外面は斜位のヘラケズリ。                      | A + A' + B + C<br>内外：暗茶褐色<br>1/5存 床                    |
| 19 | 甕   | 口径(21.8)           | 口縁部は外反して外傾する。端部は丸い。胴部との境には緩い接を持ち、わずかに張る。                             | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。                     | A + B + C + E<br>内：橙褐色<br>外：淡赤褐色<br>1/5存 床             |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴  | 手法の特徴   | 備考   |
|----|----|----------|--|---|--|
| 20 | 甕  |          | 口縁部は外反して、外傾する。端部は丸い。胴部との境には緩い段を持つ。胴部は直線的に垂下する。 | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は磨滅している。ヘラケズリは口縁部まで及ぶ。 | A + C + F<br>内外：淡赤褐色<br>1/10存 床                |
| 21 | 甕  | 口径(21.0) | 口縁部は大きく外反する。端部は中央に沈線を持ち、尖る。胴部は僅かに張る。           | 胴部内面は斜・横位のヘラナデを除いて他は磨滅している。器面の凹凸目立つ。                | A + A' + C + E<br>内：暗赤褐色<br>外：赤褐色<br>1/5存 覆土下層 |

天神林遺跡23号住居跡出土遺物(2)(第59図)

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)                      | 形態の特徴  | 手法の特徴   | 備考  |
|----|----|------------------------------|--|---|---|
| 1  | 甕  | 口径(17.2)                     | 口縁部は内傾ぎみに立ち、外反する。端部は丸い。口縁部と胴部との境の稜は緩い。胴部は僅かに張る。                      | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面は一部縦位のナデ。外面は磨滅。                          | A + A' + B + C + F<br>内：暗赤褐色<br>外：茶褐色<br>1/10存 覆土 |
| 2  | 甕  | 口径(17.3)                     | 口縁部は直線的に外傾し、肥厚する。端部は丸い。中位には2本の沈線が巡る。胴部は次第に内薄となり、内傾する。                | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。ヘラによる整形はとともに口縁部まで及ぶ。  | A + A' + B + C + F<br>内外：淡赤褐色<br>3/10存 覆土         |
| 3  | 甕  | 底径(7.0)                      | 平底であるが、やや上底気味である。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。                                   | 内面ナデミガキ。外面は磨滅している。  | A + A' + C + F<br>内：暗灰褐色<br>外：暗茶褐色<br>1/5存 北覆土    |
| 4  | 壺  | 底径(7.8)                      | 平底である。胴部は僅かに内湾しながら立ち上がる。   | 胴部外面は縦、斜位のヘラケズリ。内面は斜位のヘラナデ。底部のヘラケズリは磨滅。胴部外面は未調整部を残す。      | A' + B + F<br>内：黒色<br>外：赤褐色<br>1/5存 北覆土           |
| 5  | 甕  | 口径 16.8<br>器高 31.3<br>底径 6.4 | 口縁部は外反する。端部は丸い。胴部は緩やかに膨らみながら下半で最大径を持つ。底部は不安定な平底を呈する。形態は歪む。輪積痕などは不明瞭。 | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。輪積痕などは不明瞭。          | A + A' + C + F<br>内外：暗赤褐色<br>3/5存 №1              |
| 6  | 甕  | 口径(16.8)                     | 口縁部は緩やかに外反する。端部はやや細く丸い。胴部はやや張り、下半部で内湾する。形態は歪む。輪積痕は明瞭に残る。             | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面は横位のヘラナデ。外面は殆ど磨滅しているが、一部に縦位のヘラケズリが認められる。 | A + E + F<br>内：赤褐色<br>外：暗灰褐色<br>1/2存 №2           |

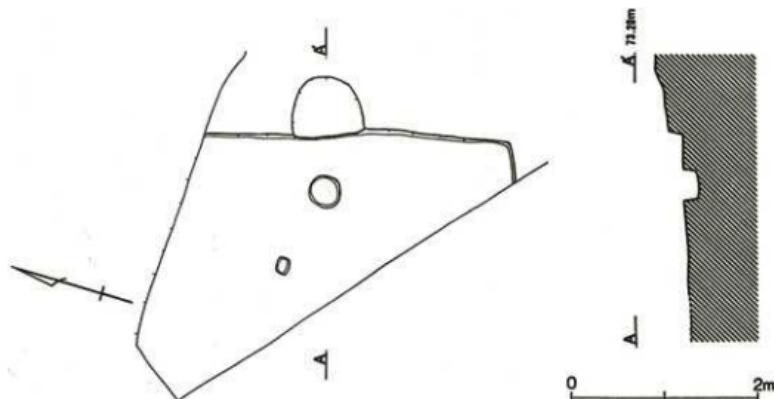


第59図 天神林遺跡23号住居跡出土遺物(2)

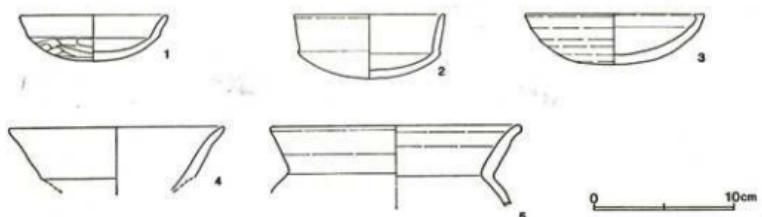
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)                       | 形態の特徴   | 手法の特徴   | 備考  |
|----|----|-------------------------------|---|---|---|
| 7  | 甕  | 底径(5.8)                       | 丸底ぎみの平底である。胴部は突出した底部から段を持ち、内湾し立ち上がる。底部の器内は厚い。             | 胴部外面及び底部は磨滅している。内面は横位のヘラナデ。                                 | A+A'+B+C<br>内:暗茶褐色<br>外:淡橙褐色<br>1/2存 床                  |
| 8  | 甌  | 口径 21.8<br>器高 29.9<br>底径 10.1 | 口縁部は直線的に外傾する。端部は丸い。胴部は僅かに張り、下半で内湾し、孔部に移行する。孔端の調整は丁寧。形態整う。 | 口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は縱位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデと思われるが、内外面とも磨滅している箇所が多い。 | A+A'+B+C+E+F<br>内:淡赤褐色～赤褐色<br>外:淡赤褐色～茶褐色・黒褐色<br>9/10存 床 |
| 9  | 壺  | 胴径 29.4<br>(最大径)              | 口縁部は大きく外反すると思われる。胴部は中位で大きく膨らみ、下半で内湾し、底部へ移行する。底部は丸底になる。    | 全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。内面には僅かに横位のヘラナデが確認できる。                 | A+A'+C+E+F<br>内:黒色～灰褐色<br>外:赤褐色～淡茶褐色～黒色<br>1/2存 覆土      |

## ◆ 天神林遺跡24号住居跡（第60図）

北側は削平され、南側は調査範囲外である。一隅だけ確認できた。壁はかなり明確なプランであった。壁は35cmの高さまで確認できた。床面はやや良好である。柱穴は1ヶ所検出され床面下20cmであった。北壁の上面に焼土、炭化物を含む皿状ピットがあるが、カマドとは異なり、床面とかなりレベルの差がある。9号住居跡にも類似の遺構があり、カマドとは機能を異にする遺構と思われる。底面は強く火熱を受けた痕跡は全くない。遺物は床面から壙が出土しているが、覆土中から須恵器壺、壺（土師器）、高壺（土師器）があった。



第60図 天神林遺跡24号住居跡

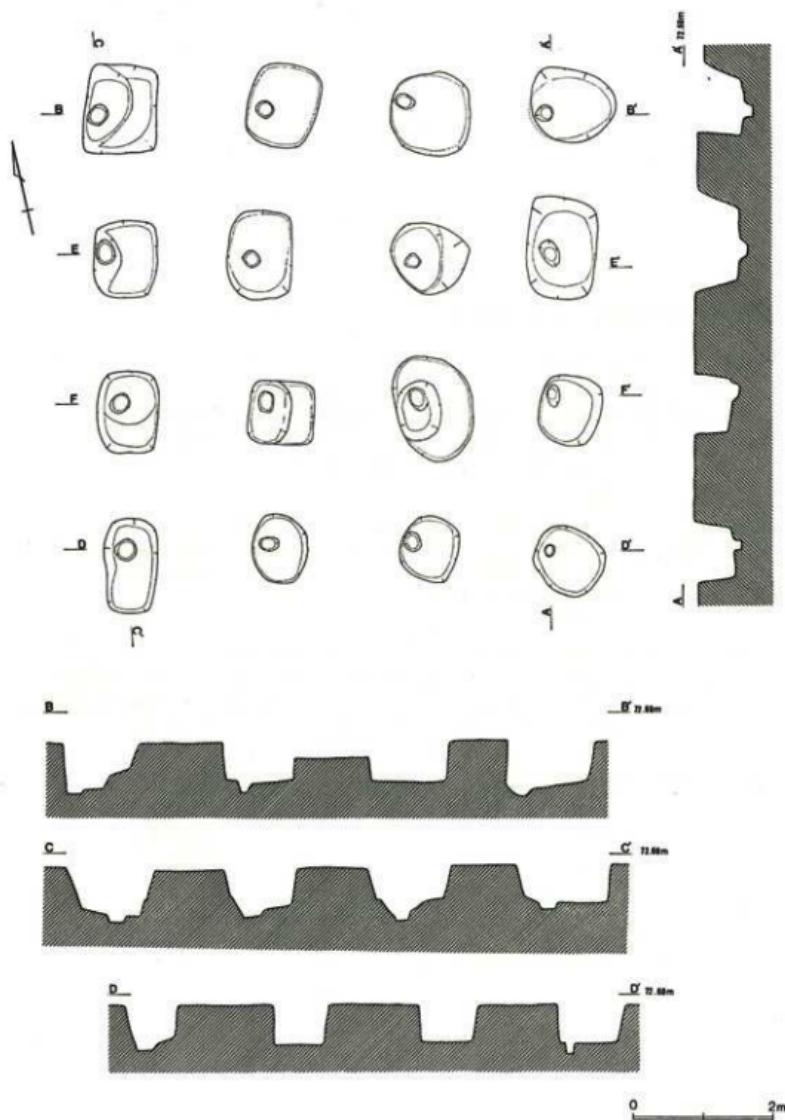


第61図 天神林遺跡24号住居跡出土遺物

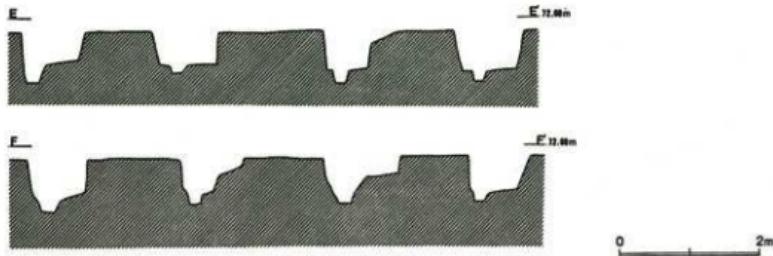
## 天神林遺跡24号住居跡出土遺物（第61図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴  | 手法の特徴                                       | 備考  |
|----|----|---------------------|--|---|---|
| 1  | 壺  | 口径 10.6<br>器高 3.3   | 口縁部は大きく外反し、端部は丸い。体部との境の稜は緩やかで、体部は丸味を持ち、器内の厚い底部へ移行する。形態や並び。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は不定方向のヘラケズリ。稜の部分は未調整部を残す。 | A' + E + F<br>内外：明褐色<br>完存 床                            |
| 2  | 壺  | 口径(10.8)<br>器高(4.6) | 口縁部は直線的に外傾し、端部は丸く、若干外側に屈曲する。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味をもち、器内は一定している。 | 内面は横ナデ及び不定方向のナデ。外面は磨滅している。                  | A + A' + E + F<br>内外：赤褐色～暗赤褐色<br>3/10存 覆土               |
| 3  | 壺  | 口径 12.8<br>器高 3.6   | 口縁部と体部の境はなく、丸味をもって立つ。端部は肥厚し、圓状になり、内にかえりをもつ。器内は一定している。形態整う。 | ロクロ成形、体部から底部は回転ヘラケズリ。内面はナデが施され、外面は剥落が見られる。  | A' + B' + E + F<br>内：淡茶褐色～暗褐色<br>外：灰黒褐色～暗赤褐色<br>4/5存 覆土 |
| 4  | 高壺 | 口径(15.3)            | 口縁部は直線的に外傾し、外反する。端部は鋭く尖る。                                  | 全面に亘って、磨滅している。                              | A' + B + F<br>内：橙色<br>外：橙褐色<br>1/5存 覆土                  |
| 5  | 壺  | 口径(18.0)            | 口縁部は「く」の字状を呈し、端部付近は外反する。胴部は大きく張る。                          | 口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は剥落、磨滅目立つ。                   | A + F<br>内外：赤褐色～茶褐色<br>口縁部：黒灰色<br>3/20存 覆土              |

(2) 天神林遺跡 1 号建物跡 (第62、63図)



第62図 天神林遺跡 1 号建物跡(1)



第63図 天神林遺跡 1号建物跡(2)

柱間が3間×3間で、整った掘形を有する掘立柱建物跡である。柱穴配列（柱根位置）はやや不規則で、P 1—P 4 (6.35m)、P 4—P 16 (6.20m)、P 16—P 13 (6.05m)、P 1—P 13 (6.20m)、P 5—P 8 (6.35m)、P 9—P 12 (6.15m)、P 2—P 14 (6.20m)、P 3—P 15 (6.25m)になり北辺が30cm程広がっている。各柱穴間も1.93~2.43mの差があり、柱根位置による差がある。P 4—P 16の列を中軸とすれば南北軸はN—10°30'—Eになる（磁北）。各柱穴には長方（方）形および不整円形プランの掘形があるが、柱穴配列がやや不整であるのに比して、掘形配列はかなり整っており、また長方（方）形の軸も一定して掘られている。規模はやや差があり、P 10、P 14~16のように1mに満たないものもあるが、P 7のように上面の広がりが確認されている掘形もあり、また現地表下1.8~2.0mの深さということを考えると、上面が広がる可能性もある。したがって平坦な底面になっていることなどから、すべて作業場として立入ることのできる掘形と考えられる。掘形内の覆土は、地山層である黄褐色粘土質土と、その直上の黒褐色土との混合した土層で、特に版築状況は認められなかった。

掘形底面に柱根跡が明瞭に残っていた。これは柱を固定するために掘形底面を更に掘り込んだ部分で実際の柱根の最下底位置に相当する。また柱根下底面は柱部分が皿状の酸化鉄分沈殿（高師小僧と称されるもの）部になっており、その底部には薄い青灰色粘土が堆積し、その上は黒褐色粘土質土になっていた。これは木質部の腐植に伴って水に溶けた鉄分及び微細粘土が浸透し、それが底部にたまつた結果と思われ、その痕跡は柱の太さと関係があるものである。残存状況は一定ではなく、柱位置設定による掘り込みもあるので、一概に言えないが、ほぼ円形状に残っているものは柱の太さに近いものとしてよいであろう。18~30cm程度の範囲におさまる太さとみることができる。

出土遺物は縄文土器片が認められた外には全くなかった。7号住居跡（鬼高窓後半）を切つないので、古墳時代後期以降になる。

## 天神林遺跡 1 号建物跡計測表

| No. | 掘形平面形 | 掘形規模<br>(長軸×短軸)<br>m | (1) 掘形深さ<br>cm | (2) 掘形底の<br>比高 m | (3) 柱根跡規模と<br>深さ cm | 備 考          |
|-----|-------|----------------------|----------------|------------------|---------------------|--------------|
| P1  | 長 方 形 | 1.25×1.05            | 36             | 1.98             | 29×25 -17           | 2段底、7号住を切る   |
| 2   | 隅丸長方形 | 1.20×0.95            | 65             | 1.92             | 24×22 -13           | 7号住を切る       |
| 3   | 隅丸方形  | 1.20×1.15            | 72             | 2.0              | 29×20 -9            | 一部内傾壁、7号住を切る |
| 4   | 不整円形  | 1.25×1.10            | 54             | 1.9              | 25×22 -12           |              |
| 5   | 長 方 形 | 1.10×0.9             | 38             | 1.73             | 33×27 -9            |              |
| 6   | 長 方 形 | 1.25×0.93            | 37             | 1.78             | 25×22 -12           |              |
| 7   | 不整円形  | 1.12×1.03            | 57             | 1.88             | 18×19 -14           |              |
| 8   | 長 方 形 | 1.45×1.00            | 57             | 1.87             | 37×23 -12           |              |
| 9   | 長 方 形 | 1.15×0.86            | 47             | 1.78             | 28×25 -15           | 2段底          |
| 10  | 長 方 形 | 0.95×0.9             | 39             | 1.76             | 28×19 -13           | 2段底          |
| 11  | 不整長方形 | 1.50×1.07            | 55             | 1.85             | 35×25 -9            | 2段底          |
| 12  | 隅丸方形  | 1.00×0.87            | 48             | 1.75             | 30×17 -13           |              |
| 13  | 長 方 形 | 1.35×0.75            | 58             | 1.8              | 30×30 -9            |              |
| 14  | 不整長方形 | 0.98×0.78            | 54             | 1.85             | 28×19 -8            |              |
| 15  | 不整円形  | 0.95×0.80            | 49             | 1.8              | 28×19 -9            |              |
| 16  | 不整円形  | 1.00×0.90            | 54             | 1.82             | 18×15 -12           |              |

備考 (1)確認面からの比高 (2)現地表面からの比高 (3)柱根の掘形部分、深さは掘形底面との比高

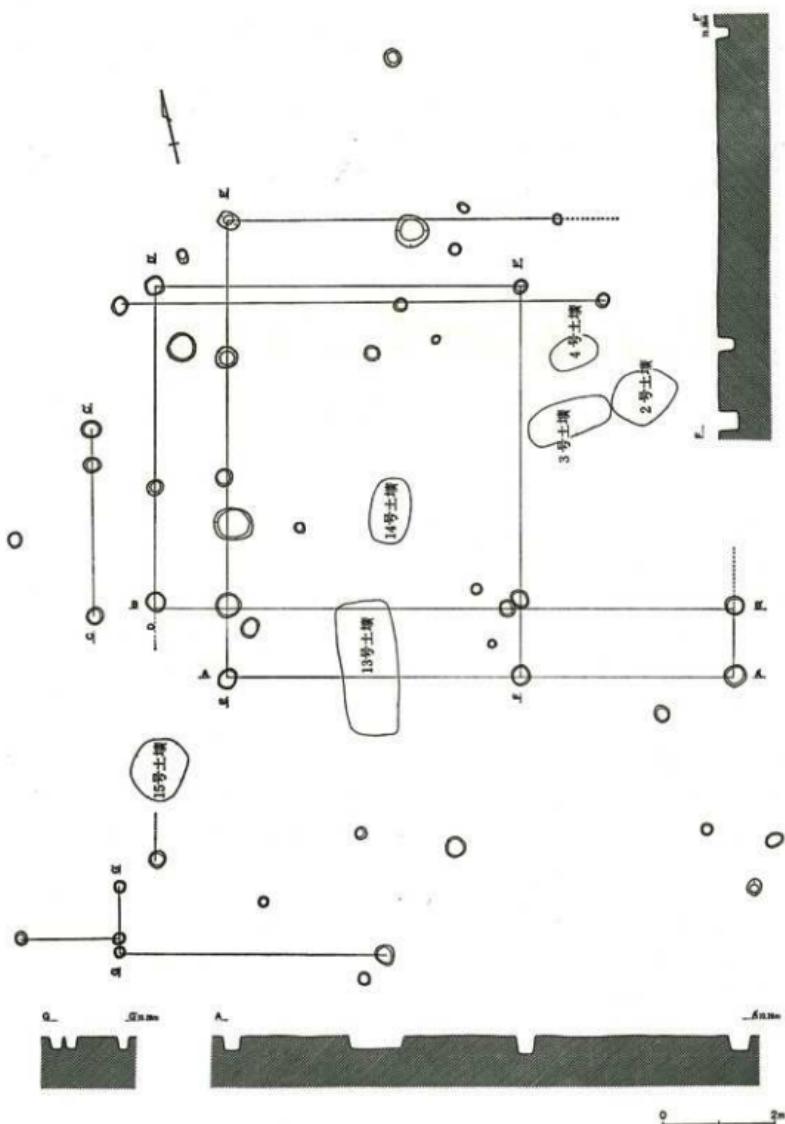
## (2) 天神林遺跡 2 号建物跡 (第64、65図)

6号住居跡の北側で検出されたものである。約15m四方の地域に直交する同一方向軸上に並ぶピット群を2号建物跡として想定した。ほとんどすべてのピットが同一方向軸上に並ぶ。南北軸はN-13°-Eである。ピット配置は柱間がやや不規則な部分があり、確実な建物プランがおさえられないが、複数棟も考えられる。30cm単位でおさまるものが多いので30cm1尺の尺度が使用されたものと思われる。ピットの深さは確認面下20cm前後であるが、深いものは40cm以上のものがある。

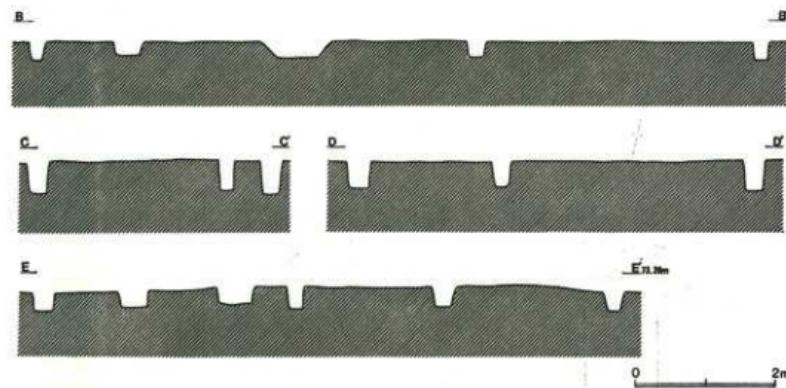
遺物は直接時期判定できるものはなかった。この地域は遺物はほとんどないが住居跡分布が途切れる地域であり、住居跡との関連も無視できない。東側に隣接する柱穴列との関係について直接結びつけることはできないが、無関係ともいい切れない。

## (2) 天神林遺跡 3 号建物跡 (第4図参照)

13号住居跡の南側で検出された。竪穴住居跡の柱穴のみが残存したと考えたが、確認作業ではそのような痕跡がなく、遺物等も無かったので建物跡を想定した。ピット径30~50cm、深さは確認面下22~27cmである。他の柱穴群とは異なり径が大きい。東西南北側の各辺は、2.1m、2.3m、1.7m、1.9mである。南北軸はN-40°-Eである。



第64図 天神林遺跡 2号建物跡(1)



第65図 天神林遺跡2号建物跡(2)

(4) 天神林遺跡柱穴列(第4図参照)

B・C・Dの各10・11区にかけてピット群が検出され、方向を同一にする2群の柱穴列と思われる。建物跡とも考えられるが、方格上に直交するピットが明確ではなかったので柱穴列とした。1～3号住穴列は東西方向(N-76°-W)に延びる柱穴群である。径20～25cm、確認面下20cm内外のピット群で1～2号の軸間は1.9m、1～3号は4.3mである。3号の両端は30×20cm、厚さ3cmの扁平礫が礫石として底面にすっぽり入っていた。同様のピットは3号東端付近にあり、更に先述のピット南隣に15cm大の自然礫1ヶを底に置いたピットがある。また1号と2号の西側に40×20cm、厚さ20cmの大型自然礫がほぼ水平位置で検出されている。これらは礫石、根石の類であり、1～3号柱穴列が建物跡である可能性も否定できない。直接時期判定できる遺物はなかった。

4・5号柱穴列はピットの形態、規模は1～3号と同じであるが、方向軸が異なり、N-19°-Eである。3号と複合しているが、その新旧は確認できなかった。遺物等も検出されなかった。4・5号は同一方向に並んでいるので、これも建物跡の可能性がある。

(5) 天神林遺跡ピット群(第4図参照)

発掘区内には100数ヶ所のピットが検出されている。これらは必ず群集する傾向をもつが、そのうちには1～3号建物跡、1～5号柱穴列群の中に含まれるもののがほとんどである。検出レベル面は黄褐色粘土質土の上面であり、これを切り込んだピットが確認された。現地表下1m以上あり、したがって、ここに確認されたものはかなり深いピットになる。ピット内は黒褐色土がつまり、特に顕著な例を示す状況はなかったが、柱穴列群中には礫石、根石と思われる自然礫を底面に置いた例がある。建物跡・柱穴列に伴うものを除いたピット群としては、柱穴列群北東の一組がある、径25～30cm、確認面下10cm程の小ピット群である。特に並んだ様子は認められないが、あるいは底面

レベルの高いピットがあったかも知れない。

5号住居跡北側の一組は30~40cmのやや大きなピット群である。住居跡内のピットに、その位置からこれらと同類と思われるものがあり、住居跡より新しい時期になる。

22号住居跡東側の一組は他の例とは異なり、50~80cmの大きなピット群である、2段底のものもあり、深さも確認面下40~50cmであった。柱穴以外の機能も考えられ、住居跡との関係が注目されたが、特に状況が明確なものはなかった。住居跡と切り合いはないが、近接した位置にあるものが多いので、住居跡よりは新しいものと思われる。

なお3号建物跡北側の皿状ピットは、わずかに黒褐色土の分布がみられた部分であり、特に遺物は出土していない。

#### (4) 天神林遺跡土壤 (第66~68図)

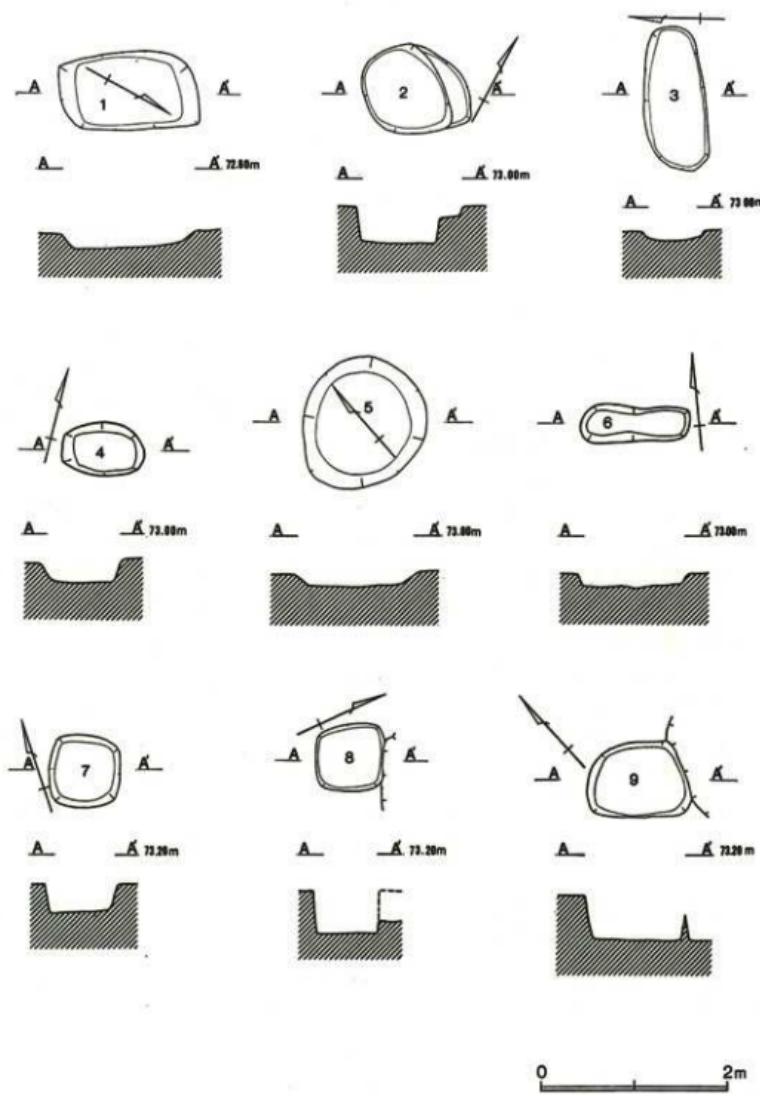
発掘調査区内で25基の土壤が検出されている。いざれも住居跡を切断しており、これらとは無関係の土壤群とみることができる。内部の覆土に特に注目すべき例はないが、全体的に層序区分が困難な土層堆積を示している。特に掘り方がしっかりとしたものと土壤としたが、これらはその形態から長方形および方形タイプと円形タイプに分かれ。長方形型はその規模の大小で2種類ある。1、13、16、24号が長さ1.5~2.4m、幅0.7~1.0mの定型化した大形の土壤である。その長軸は1号を除いて、磁北の南北方向に近く、方向がほぼ一定する特徴をもつ。同様に定型化したものでやや小形のものが9、10、25号で、長さ1.05~1.2m、幅0.7~0.95mのものである。その他やや不整になっているが3、6、11、14号があり、これらは長方形を意識した掘り方をしたものである。

以上は長方形型の土壤であり、これらは掘り方が定型化したものを多く含み、また、磁北の南北方向(13、10、16、24)とそれに直交する東西方向(3、6)に長軸を集める傾斜が認められ、方向に規定制が認められる。

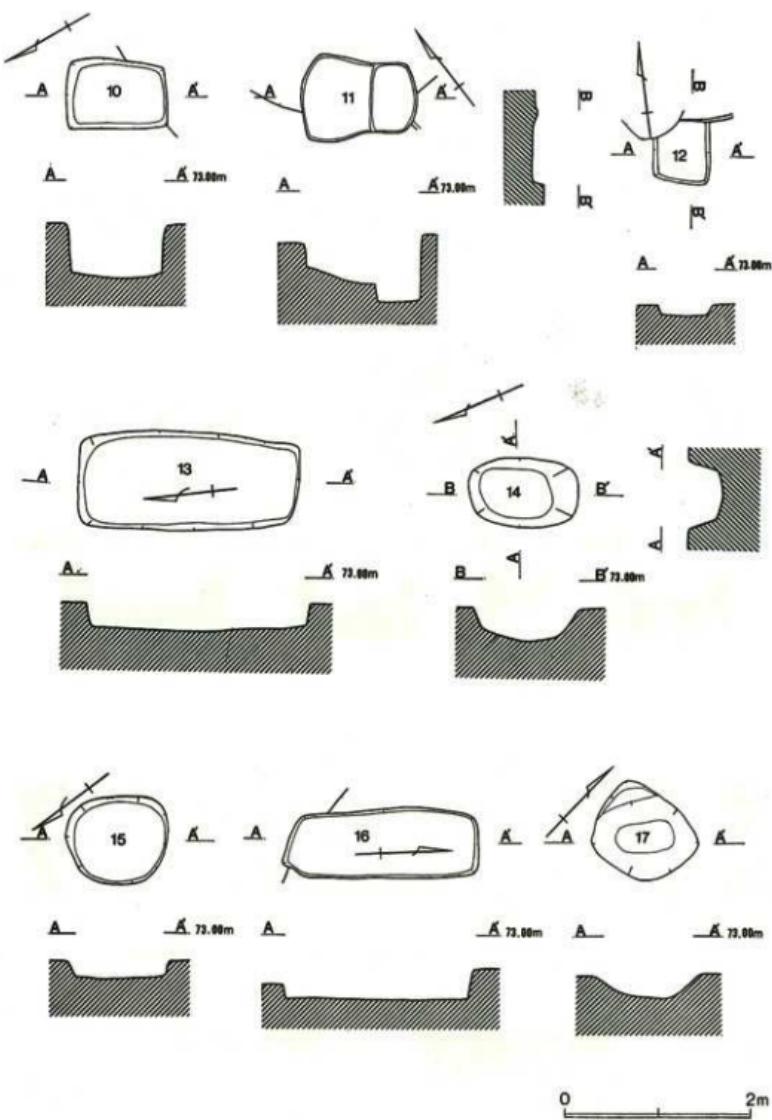
方形型は7、8、12号が該当する。典型的な土壤で掘り方もしっかりしている。

円形型は18、20、21、22号が径0.9m前後の典型例である。これらより更に大きい径1.1~1.2mのものが15号で、更に大形になり径1.3~1.4mの5、23号がある。その他2、4、15、19号については形態、規模、掘り方の特徴から、円形型とは異質のピットになるものと思われる。

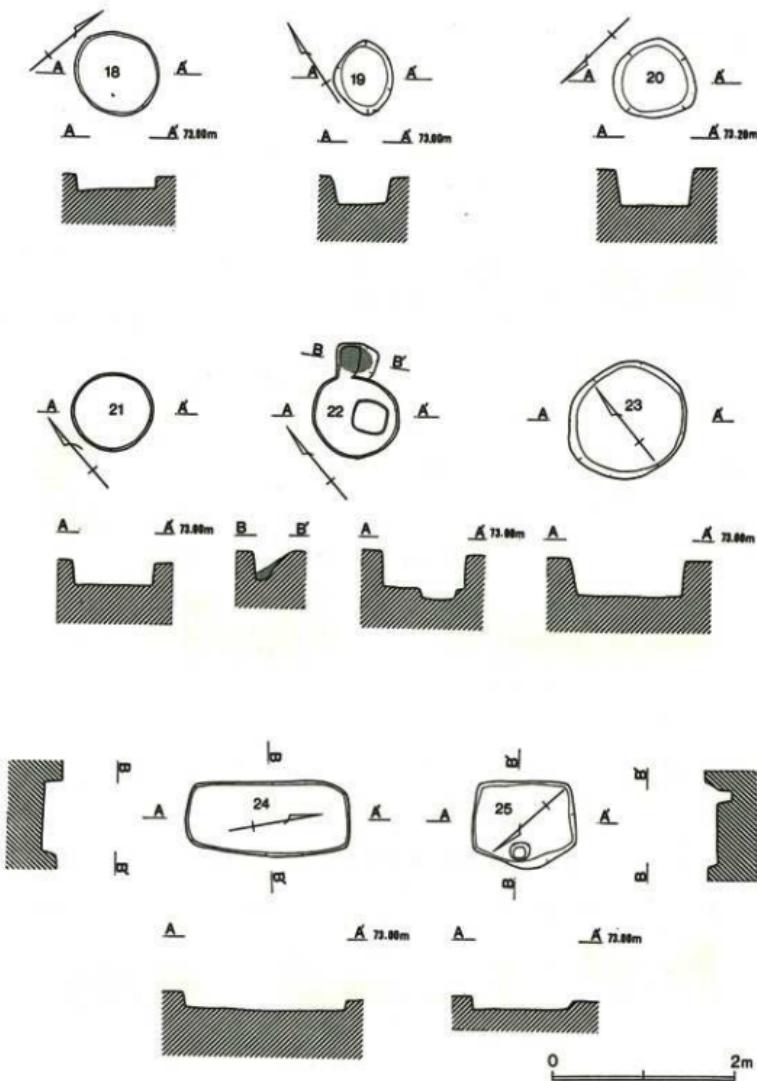
以上の土壤については、2号土壤内で底面上5cmのレベルで砥石片とカワラケ片が出土し、13、15号土壤から覆土中に10~20cm大の自然礫が出土している。その他は特に直接関係のある遺物は全く検出されない。総体的特徴として、1 定型化した形態をもっている。2 その規模に差がある。長方形型に関しては長軸方向が東一西、南一北方向に分かれ。したがって方向の規定(地割と関連するものと思われる)が認められる。3 分布については群になる傾向がある。4 遺物は含まれないこと。5 覆土は基本的には自然堆積ではなく、層序区分が不明瞭である。以上が特徴的なことである。



第66図 天神林遺跡土壙(1)



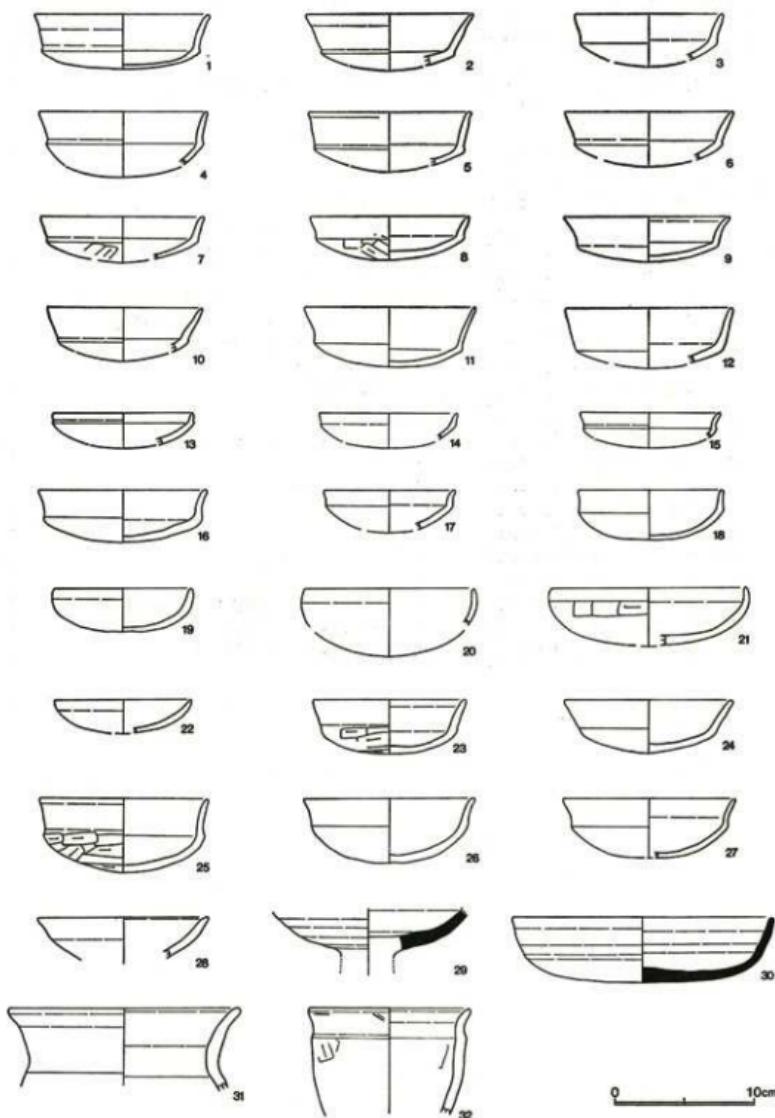
第67図 天神林遺跡土壤(2)



第68図 天神林遺跡土壤(3)

天神林遺跡土壤計測表

| 区 | 番号 | 平面形     | 長軸×短軸<br>(m) | 深さ<br>(cm) | 長軸方位    | 備考              |
|---|----|---------|--------------|------------|---------|-----------------|
|   | 1  | 長方形     | 1.48×0.84    | 37         | N-30°-W | 7号住を切る。         |
|   | 2  | 不整不定円形  | 1.05×0.9     | 39         | —       | 2段底             |
|   | 3  | 不整長方形   | 1.55×0.65    | 9          | N-76°-E |                 |
|   | 4  | 不整不定長方形 | 0.9×0.58     | 22         | —       |                 |
|   | 5  | 円形      | 1.4×1.3      | 15         | —       |                 |
|   | 6  | 不整不定長方形 | 1.15×0.38    | 10         | N-78°-W |                 |
|   | 7  | 方形      | 0.8×0.78     | 27         | —       | 8号と類似           |
|   | 8  | 方形      | 0.75×0.7     | 46         | —       | 7号と類似、溝1を切る。    |
|   | 9  | 不整長方形   | 1.1×0.8      | 50         | N-49°-W |                 |
|   | 10 | 長方形     | 1.05×0.72    | 50         | N-15°-E | 11号住を切る。        |
|   | 11 | 不整長方形   | 1.25×0.8     | 57         | N-40°-W | 11号住を切る。2段底     |
|   | 12 | 長方形     | (0.65)×0.6   | 10         | N-6°-E  | 11号住を切る。        |
|   | 13 | 長方形     | 2.38×1.02    | 28         | N-6°-E  |                 |
|   | 14 | 不整長方形   | 1.2×0.73     | 35         | N-18°-E |                 |
|   | 15 | 不整円形    | 1.1×0.95     | 15         | —       |                 |
|   | 16 | 長方形     | 2.05×0.7     | 32         | N-5°-E  | 12号住を切る。        |
|   | 17 | 不整不定円形  | 1.15×0.9     | 23         | —       |                 |
|   | 18 | 円形      | 0.9×0.9      | 16         | —       |                 |
|   | 19 | 不整不定円形  | 0.8×0.65     | 30         | —       |                 |
|   | 20 | 円形      | 0.9×0.85     | 31         | —       |                 |
|   | 21 | 円形      | 0.9×0.85     | 27         | —       |                 |
|   | 22 | 円形      | 0.9×0.9      | 38         | —       |                 |
|   | 23 | 円形      | 1.3×1.25     | 40         | —       | 23号住を切る。滑石劍形品出土 |
|   | 24 | 長方形     | 1.8×0.8      | 58         | N-12°-E | 22号住を切る。        |
|   | 25 | 長方形     | 1.15×0.95    | 46         | N-40°-E | 13号住を切る。        |



第69図 天神林遺跡グリッド出土遺物(1)

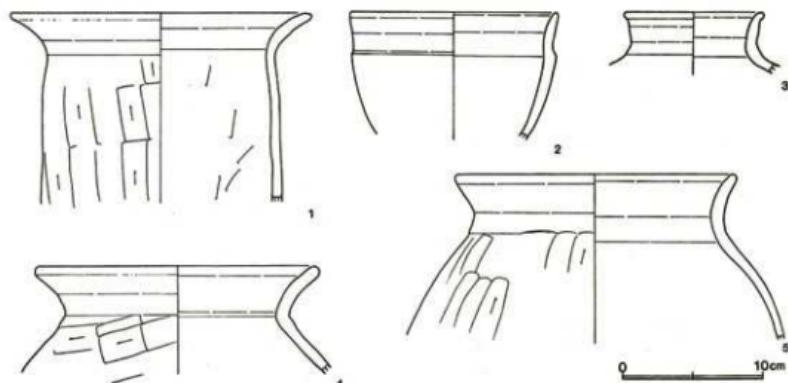
## 天神林遺跡グリッド出土遺物(1)(第69図)

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考                                   |
|----|----|---------------------|--|--|--------------------------------------|
| 1  | 壺  | 口径 12.3<br>器高 3.9   | 口縁部は緩やかに外反する。中位で膨らみ、端部は若干外側に屈曲する。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味をもつ。      | 内面から口縁部外面は不定方向及び横のナデ。外面は磨滅の為、整形手法不明瞭。形態やや歪む。           | A+A'+C<br>内外:淡茶褐色<br>4/5存 2層         |
| 2  | 壺  | 口径(12.0)            | 口縁部は直線的に外傾し、端部は鋭く尖る。体部との境の稜は明瞭。                            | 全面に亘って、磨滅している。   | A'+C<br>内外:茶褐色<br>1/10存              |
| 3  | 壺  | 口径(10.9)            | 口縁部は外反し、内湾ぎみに外傾する。端部は鋭く尖る。体部との境の稜は明瞭。                      | 全面に亘って、磨滅している。   | A+A'+F<br>内外:淡茶褐色<br>底部:淡赤褐色<br>1/5存 |
| 4  | 壺  | 口径(12.0)            | 口縁部は緩やかに外反し外傾する。端部は尖る。体部との境の稜は明瞭。                          | 全面に亘って、磨滅している。   | A+A'+E<br>内外:淡赤褐色~淡橙褐色<br>1/10存      |
| 5  | 壺  | 口径(11.6)            | 口縁部は稜やかに外傾し端部は外傾に丸く屈曲する。体部と境の稜は明瞭。                         | 口縁部外面は横ナデ、内面及び体部外面は磨滅している。器面の凹凸が目立つ。                   | A+A'+E+F<br>内外:淡茶褐色<br>1/5存          |
| 6  | 壺  | 口径(12.1)            | 口縁部は外反ぎみに外傾する。端部は尖る。下端には一本の沈線が巡る。体部との境の稜は明瞭。               | 全面に亘って、磨滅している。   | A'+E<br>内外:淡赤褐色<br>1/10存             |
| 7  | 壺  | 口径(11.8)            | 口縁部は緩やかに外傾する。端部は丸く、若干外側に屈曲する。体部との境の稜は緩やかで、体部は丸味をもつ。小振りである。 | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。磨滅目立つ。口縁部との境に未調整部分を残す。 | A'+F<br>内外:淡茶褐色~暗灰色<br>3/10存         |
| 8  | 壺  | 口径(11.3)            | 口縁部は緩やかに外反する。端部は尖り気味。体部との境の稜は緩い。体部は丸味をもち、底部へ移行する。形態やや歪む。   | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。                         | A'+E<br>内:暗茶褐色<br>外:淡茶褐色<br>2/5存     |
| 9  | 壺  | 口径(11.8)<br>器高(3.3) | 口縁部は大きく外反する。端部は鋭く尖る。体部は丸味を持つ。                              | 全面に亘って、磨滅している。   | A+A'+F<br>内外:赤褐色<br>1/2存 2層          |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴   | 手法の特徴                                   | 備考   |
|----|----|----------------------|---|---|--|
| 10 | 壺  | 口径(11.1)<br>器高 4.3   | 口縁部は外反し、内湾ぎみに外傾する。端部は鋭く尖る。体部との境の稜は緩い。                     | 全面に亘って、磨滅している。                          | A' + B + C + E<br>内外：赤褐色<br>1/10存 2層           |
| 11 | 壺  | 口径 12.3<br>器高 4.3    | 全体に器内が薄く、口縁部は外反し、内湾ぎみに外傾する。端部は鋭く尖る。稜は明瞭。体部は丸味をもって底部へ移行する。 | 全面に亘って、磨滅しているが、僅かに口縁部内面に横ナデが確認できる。      | A + E<br>内外：淡赤褐色<br>口縁部：淡茶褐色<br>底部：黒灰色<br>4/5存 |
| 12 | 壺  | 口径(13.0)             | 口縁部は直線的に外傾し、端部付近で内湾する。端部は丸い。体部は少し丸味をもつ。                   | 全面に亘って、磨滅している。                          | A + E<br>内外：淡茶褐色～淡黒褐色<br>3/20存                 |
| 13 | 壺  | 口径(10.1)             | 口縁部は短く、外反する。端部は鋭く尖る。体部との境の稜は丸い。                           | 内面は横ナデ。外面は磨滅している。                       | A' + E<br>内外：淡茶褐色～淡赤褐色<br>3/20存 2層             |
| 14 | 壺  | 口径 (9.9)             | 口縁部は短く、外反する。端部は丸い。体部との境の稜は丸味をもつ。                          | 内面は横ナデ。外面は磨滅している。                       | A + A' + E<br>内外：淡赤褐色<br>1/10存                 |
| 15 | 壺  | 口径(10.1)             | 口縁部は外反する。端部は丸い。稜は丸味をもつ。                                   | 全面に亘って、磨滅している。                          | A + A' + E<br>内外：暗赤褐色<br>1/10存                 |
| 16 | 壺  | 口径(12.3)<br>器高 (3.7) | 口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は丸味をもつ。体部から底部は丸味をもち、器内は厚い。      | 内面から口縁部外面は横ナデ。外面は磨滅している。器面は凹凸目立つ。(整形不良) | A + A' + E<br>内：淡茶褐色<br>外：赤褐色<br>3/10存 2層      |
| 17 | 壺  | 口径 (9.5)             | 口縁部は外反し、端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。                             | 内面は横ナデ。外面は磨滅している。                       | A + E<br>内外：赤褐色<br>1/5存 2層                     |
| 18 | 壺  | 口径 10.8              | 口縁部は直立ぎみに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。体部は丸味をもって底部へ移行する。      | 口縁部は内外面とも横ナデ。体部は内外面とも磨滅しており、整形手法不明。     | A + A' + E<br>内外：淡赤褐色<br>7/10存 2層              |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴   | 手法の特徴                                      | 備考   |
|----|----|----------------------|---|--|--|
| 19 | 坏  | 口径(10.8)<br>器高 (3.2) | 口縁部は内湾ぎみに立ち、端部は丸い。体部との境に稜はもたず、丸味をもって体部、底部へ移行。         | 全面に亘って、磨滅している為、整形手法不明。                     | A+A'+E<br>内外：淡茶褐色<br>3/10存                 |
| 20 | 坏  | 口径(12.2)             | 口縁部は内湾する。端部は丸い。                                       | 口縁部は外面とも横ナデ。                               | A'+E<br>内外：暗赤褐色<br>3/20存 2層                |
| 21 | 坏  | 口径(14.1)<br>器高 (4.0) | 口縁部は短く、内湾する。端部は内側に尖る。体部は丸味を持つ。底部付近の器肉は厚くなる。           | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。体部に未調整部を残す。    | A+A' (多量)<br>内外：赤褐色<br>7/10存               |
| 22 | 坏  | 口径 (9.7)<br>器高 (2.9) | 内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。                                      | 内面から口縁部外面はナデ（横ナデ）。体部外面は磨滅している。             | A+E<br>内外：淡茶褐色<br>1/5存 2層                  |
| 23 | 坏  | 口径(11.0)<br>器高 (3.9) | 外反して立ち上がり、内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。稜は緩やかで、体部は丸味をもち、底部はやや器肉が厚い。 | 口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ 内面は磨滅している。         | A+A'+C<br>内外：淡赤褐色<br>1/2存                  |
| 24 | 坏  | 口径(12.3)<br>器高 (3.5) | 口縁部は直線的に外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は不明瞭。底部は厚い。                 | 全面に亘って、磨滅しているため、整形手法不明瞭。                   | A'+E<br>内外：赤褐色～淡赤褐色<br>2/5存 2層             |
| 25 | 坏  | 口径 12.2<br>器高 5.3    | 口縁部はゆるやかに外反する。端部は細いが丸い。体部との境の稜は明瞭。器高は高い。              | 体部外面は横、斜位のヘラケズリ。内面から口縁部外面は横ナデ。内面は黒く塗られている。 | A+E<br>内：黒灰色<br>外：淡赤褐色～暗黒灰色<br>9/10存 22-C区 |
| 26 | 坏  | 口径(12.3)<br>器高 (4.6) | 口縁部は外反し、端部は丸い。体部との境の稜は丸味をもつ。体部から底部の器肉はやや厚くなる。         | 全面に亘って、磨滅しており、内面は凹凸が目立つ。                   | A+E<br>内外：赤褐色<br>3/10存 2層                  |
| 27 | 坏  | 口径(12.3)<br>器高 (4.2) | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭で、磨滅のため、丸味をもつ。形態や歪む。      | 全面に亘って、磨滅している。内外面とも凹凸が目立つ。                 | A'+E<br>内外：淡橙褐色<br>1/4存 2層                 |

| 番号 | 器種           | 大きさ(cm)             | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考  |
|----|--------------|---------------------|--|--|---|
| 28 | 高壺           | 口径(12.2)            | 口縁部は内湾ぎみに外傾し、端部は外側に屈曲する。                               | 内面は横ナデ。外面は磨滅している。                                      | A' + B + F<br>内外: 淡暗赤褐色<br>3/20存 2層                 |
| 29 | 高壺<br>(須恵器)  |                     | 長脚の体部と思われ、スカシの部分が3箇所残る。口縁部、脚部欠。                        | 内外面とも回転ナデ調整される。整形良好。                                   | A' + D + F<br>内外: 淡青灰色<br>1/3存                      |
| 30 | 盤<br>(須恵器)   | 口径(18.8)<br>器高(4.7) | 口縁部は内湾ぎみに外反する。端部は丸い。底部は平底に近い丸い底である。底部は器内が厚めである。形態やや歪む。 | 口縁部は回転ナデされ、底部は回転ヘラケズリされる。底部周辺は未調整部を残す。                 | A + D + F<br>内外: 淡青灰色<br>3/5存                       |
| 31 | 甕            | 口径(16.7)            | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。                                     | 口縁部は内外面とも横ナデ。  | A + A' + C + E + F<br>内: 赤褐色<br>外: 暗赤褐色<br>1/10存 2層 |
| 32 | 小形甕<br>(小形甕) | 口径(11.6)            | 口縁部は短く、外反する。端部は丸い。胴部との境に棱を持つ。胴部は内湾し、有孔の底部へ移行すると思われる。   | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも磨滅しており、整形度やや不明瞭。内面はヘラナデ。外面は凹凸目立つ。 | A + A' + B + C + F<br>内外: 淡赤褐色<br>1/5存              |



第70図 天神林遺跡グリッド出土遺物(2)

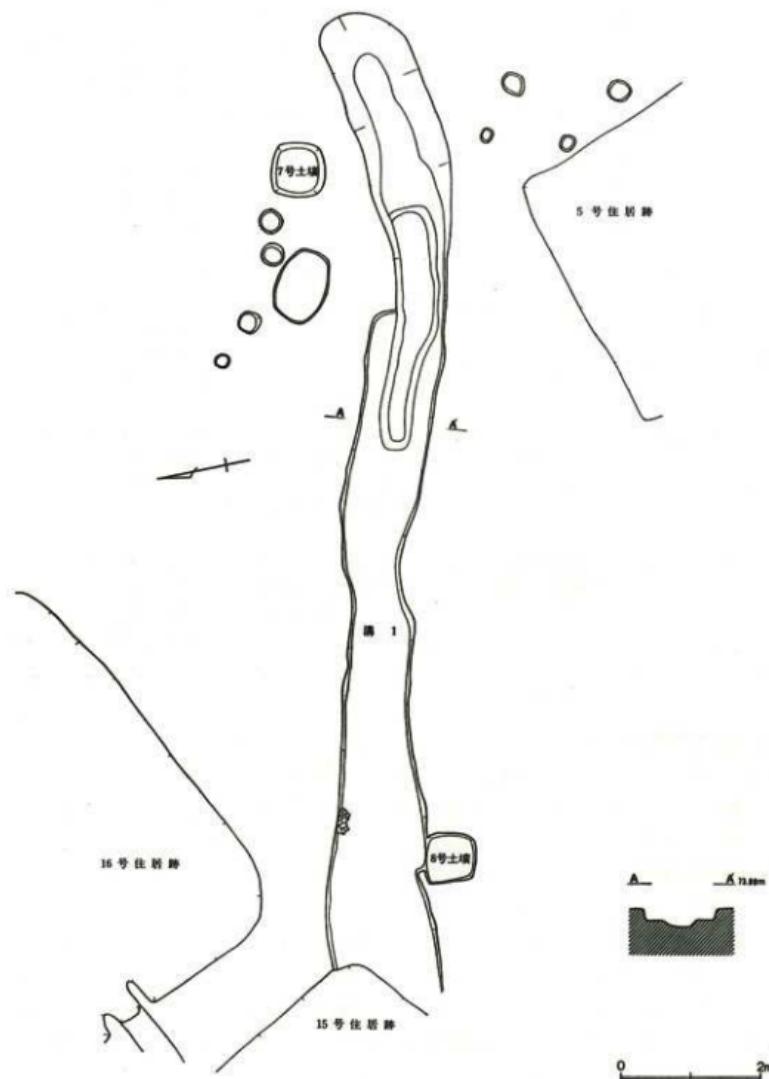
## 天神林遺跡グリッド出土遺物(2)

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)  | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考                                       |
|----|-----|----------|---|--|--|
| 1  | 甕   |          | 口縁部は大きく外反する。端部は丸く、内側に一本の沈線が巡る。胸部は直線的である。              | 口縁部外面は横ナデ。腹部外面は縦位のヘラケズリ。内面は不定方向のヘラナデ。内面は未調整部を残す。 | A+A'+B+C+D+F<br>内:淡赤褐色<br>外:暗赤褐色<br>2/5存 |
| 2  | 小形瓶 | 口径(14.8) | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。胸部との境の段は明瞭。胸部は内湾して有孔の底部へ移行すると思われる。 | 全面に亘って、磨滅している。                                   | A+A'+C+E<br>内外:淡赤褐色<br>1/5存 E-33         |
| 3  | 小形壺 | 口径(10.0) | 口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く外側に屈曲する。                             | 口縁部は内外面とも横ナデ。                                    | A+C+E+F<br>内:灰褐色<br>外:茶褐色<br>1/10存 E-33  |
| 4  | 壺   | 口径(20.2) | 口縁部は大きく外反する。端部は肥厚し、丸い、胸部は大きく膨らむ。                      | 口縁部は内外面とも横ナデされるが雜である。胸部は斜位のヘラケズリをされるが磨滅の為、やや不明瞭。 | A+A'+C+F<br>内外:茶褐色<br>1/5存 E-33          |
| 5  | 壺   | 口径(20.1) | 口縁部は内傾後、外反して外傾する。胸部は大きく膨らむ。                           | 口縁部は内外面とも横ナデ。腹部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。           | A+A'+C+F<br>内:暗赤褐色<br>外:淡赤褐色<br>3/10存 2層 |

## ⑩ 天神林遺跡溝1(第71図)

東溝と西溝に分かれる。両者は重複しており、掘り方も異なるので時期の差があるが、土層では新旧は確認できなかった。東溝は底面が舟底形でやや湾曲するプランをもつ、確認面下25~46cmで東寄りが深くなっている。底面レベルは西溝より深い。平面プランが西側に細くなっており、西溝底査で東溝が確認できたので、あるいは東溝が古くなる可能性もある。古墳の堀跡とも考えられるが、確認はできなかった。

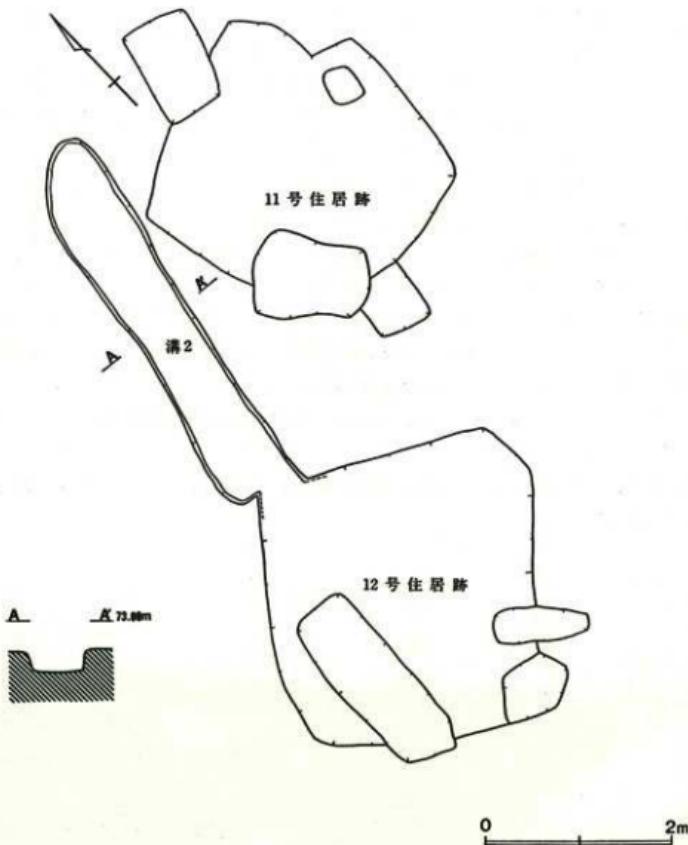
西溝は15号住を切り、8号土壙に切られている。底面はやや平底で、壁の立ち上がりもかなり傾斜がある。確認面下36cmである。底面は東側にわずかに傾斜しているがほとんど差はない。幅は0.8~1.5mで差があり、東西方向にのびる。遺物については東溝は全くなかったが、西溝については甕形土器の破片が北壁際で検出された。鬼高峰期後半のもので周辺住居跡出土のものと同時期であるが混入と思われる。



第71図 天神林遺跡溝1

(3) 天神林遺跡溝 2 (第72図)

幅0.7m、長さ4.2mの平底の溝であるが、そのプランはやや不明瞭であった。確認面下21cmであり、12号住居跡を切っている。わずかに北側が低いがほとんどレベル差はない。溝1の西溝とは直交するような方向にあるが、両者は結合しない。形態が類似するので、溝1の西溝と同様の時期と思われる。遺物はなかった。



第72図 天神林遺跡溝 2

## V 高野谷戸遺跡

### 1 発掘調査の経過

昭和51年1月28日、浦和市内県文化財保護課より発掘調査器材を搬入し、かねてよりプレハブ現場事務所の移築等準備を進めて来たところであるが、ここに全ての準備を完了し、2月2日、高野谷戸遺跡の調査を開始した。

調査は耕作土及びその下の黒褐色土を遣構検出面までブルドーザーによって削除後、残土の排除、遣構確認面の清掃を行う。

調査範囲が路線幅と狭く、さらに調査区中央を生活農道が横断しているため、排土の置場に苦慮する。調査前の予想では、周辺調査遺跡の結果や散布土器片の状況より、鬼高窓の集落遺跡と推定されていたものである。

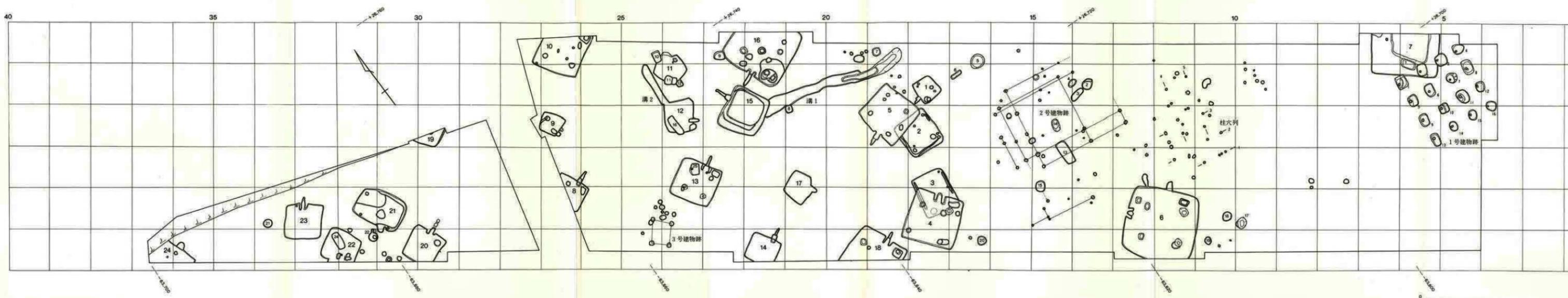
調査はまず、神流川鉄橋に最も近い、調査区北側より開始した。部分的に浮いた状態で焼土プロックが集中する箇所が認められるが、遣構に伴うものでない様である。これらに混じり、細片となった土器片がかなりの量で検出されるが、これと同じ状況は先に調査がなされている。中掘、若宮、台の各遺跡と同じ現象で、氾濫原中に所在する遺跡の特徴でもある。

遣構は検出順に番号を付し、2月16日から遣構内を振り進め。基本的にはカマドをかけて住居跡に十文字のセクションを残す。調査中には住居跡と推定しながら調査をしていたものが、最終的には土壤となってしまったものなどもあり、複雑な面もみられた。

順次発見順にしたがって調査を進めたが、途中、この時期に通有の霜と対岸より吹きおろす赤城おろしには、いつもながら往生したものである。

この様にして、終章一覧のとおりの遣構を確認・調査し、3月24日、2ヶ月にわたった高野谷戸遺跡の調査を終了した。





第4図 天神林道路全体図 (1/200)

## 2 遺跡の概観

遺跡は神流川と利根川の合流点近い、埼玉県児玉郡上里町五明部落の北方にあり、地元では小字を高野谷戸と称している。

神流川流域には左岸の群馬県側とともに多くの遺跡群がみられ、とりわけ群集墳が発達し、これに伴う集落遺跡は、埼玉県側では県玉郡神川村新里の中道遺跡など鬼高期から急激な増加数をみるとができる。

ここ高野谷戸遺跡は、神流川の氾濫原上にあり、厚い堆積土に覆われて、外観上からは遺跡の拡がりを確認することは困難であるが、地形図などから旧河川の流路や畑地の分布状況などを細かく観察すると、旧地形の復元から当時の微高地が追求できる。その微高地上という立地条件が限定される範囲には、ほとんどの地域から住居跡が確認されている。

地形図から推定される旧神流川にはかなりの蛇行がみられる。<sup>(註1)</sup>すでに調査が行われた若宮台跡遺跡・臺跡などいずれも同様の立地を占めるもので、地名により遺跡名は異なるが、連続的なつながりを示している。

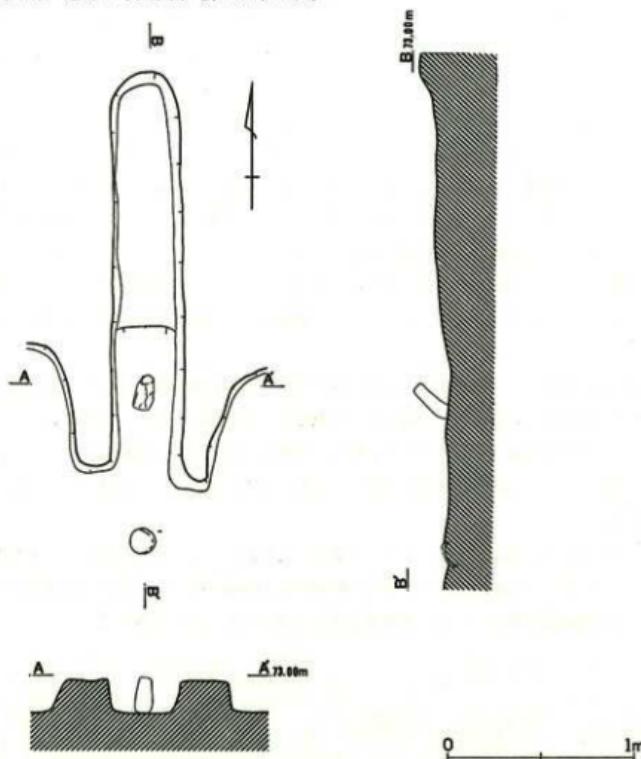
上越新幹線は埼玉県内をほぼ南北に貫き、児玉郡上里町で関越自動車道と並行して神流川を渡河し、対岸の群馬県藤岡市へと抜ける。遺跡は埼玉県側路線の西北端に位置し、鉄橋部分までせまっている。神流川河川敷は崖面で接しているが、集落形成時は川幅が狭く、遺構分布状況から、まだ北方にも住居が構築されていたことが推定されるが、川の浸食により、その後徐々に削り取られたものと思われる。

調査前に於ける現状は、桑園が主で、所々に野菜がつくられており、地表には細かな土器片の散布がみられた。調査範囲は路線幅21.0m、長さ120mの約2400m<sup>2</sup>である。当該区間は高架方式となり、大宮起点より約65kmの地点となる。東嶽見堂遺跡は西寄り数十mに位置する。



### 3 遺構と遺物

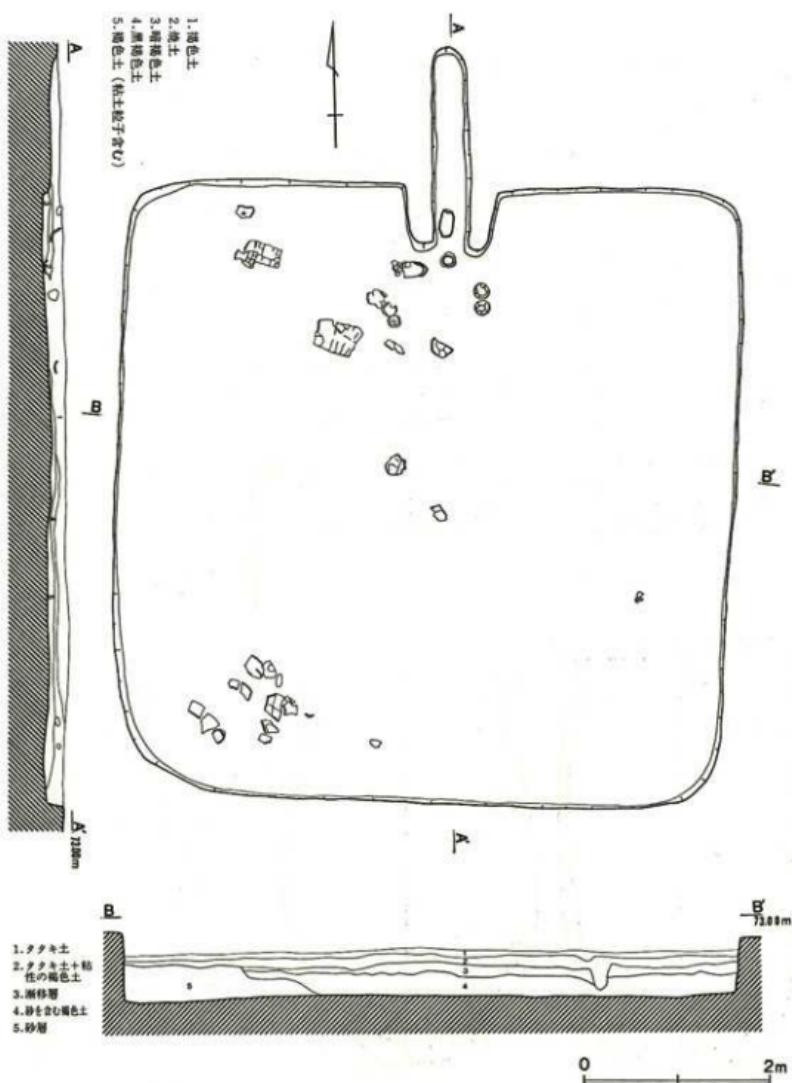
(1) 高野谷戸遺跡1号住居跡（第74図、75図）



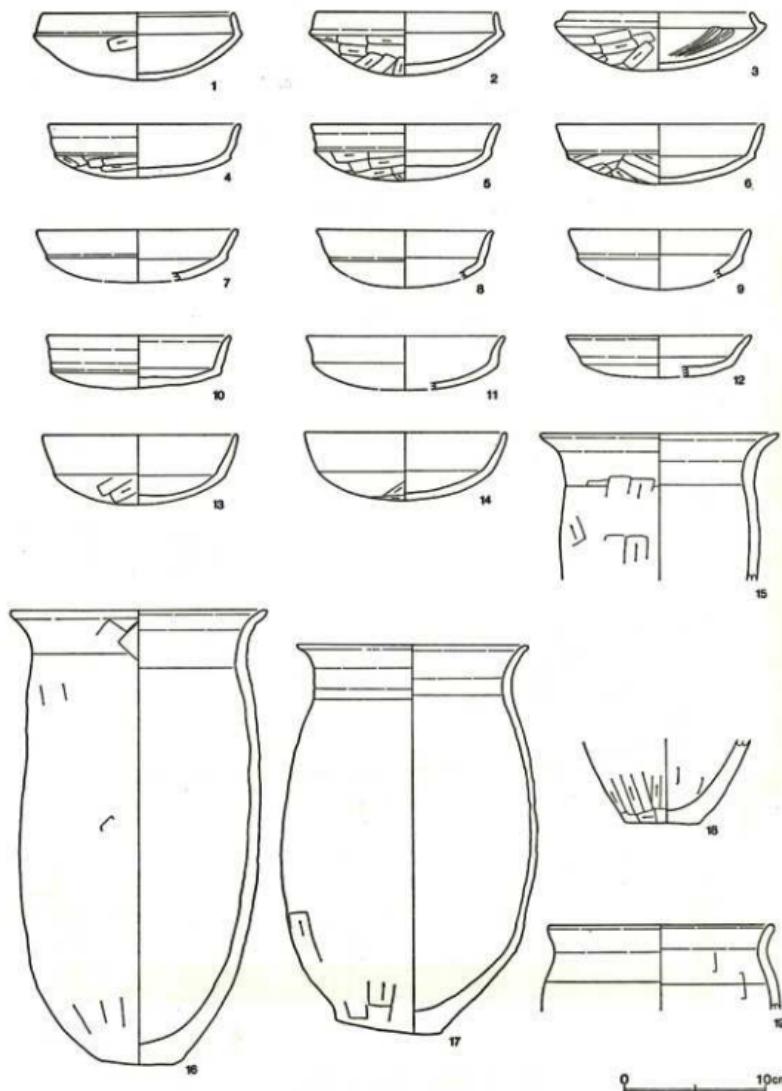
第74図 高野谷戸遺跡1号住居跡カマド

当遺跡中最大の住居跡である。カマドを北壁に構築し、ほぼ南北に主軸をとる。平面プランは正方形となるが、わずかに隅丸を呈し、東西6.55m南北6.45mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、堆積土中には砂を含む層が認められる。特に西側壁から流れ込んだ堆積層が確認される。土層には乱れた跡は無く、漸移的変化を示し、全体に粘性を含んだものである。

カマドは壁を深く掘り込んで、壁外へ1.5m程煙道が長く伸びている。煙道幅は40cmでゆるやかな傾斜を保ち徐々に上がっていき、燃焼部と煙道の境は浅い舟底状から段を有し、中央には河原石の支脈が直立して設置されていた。壁溝・柱穴・貯藏穴等の施設は認められなかった。カマド前面には甕・壺類等の土器が集中して置かれ、南西コーナー付近には数個体の土器がまとまって出土している。主軸はN-44°-Eを示す。



第75図 高野谷戸遺跡 1号住居跡



第76図 高野谷戸遺跡1号住居跡出土遺物(1)

## 高野谷戸遺跡1号住居跡出土遺物(1)(第76図)

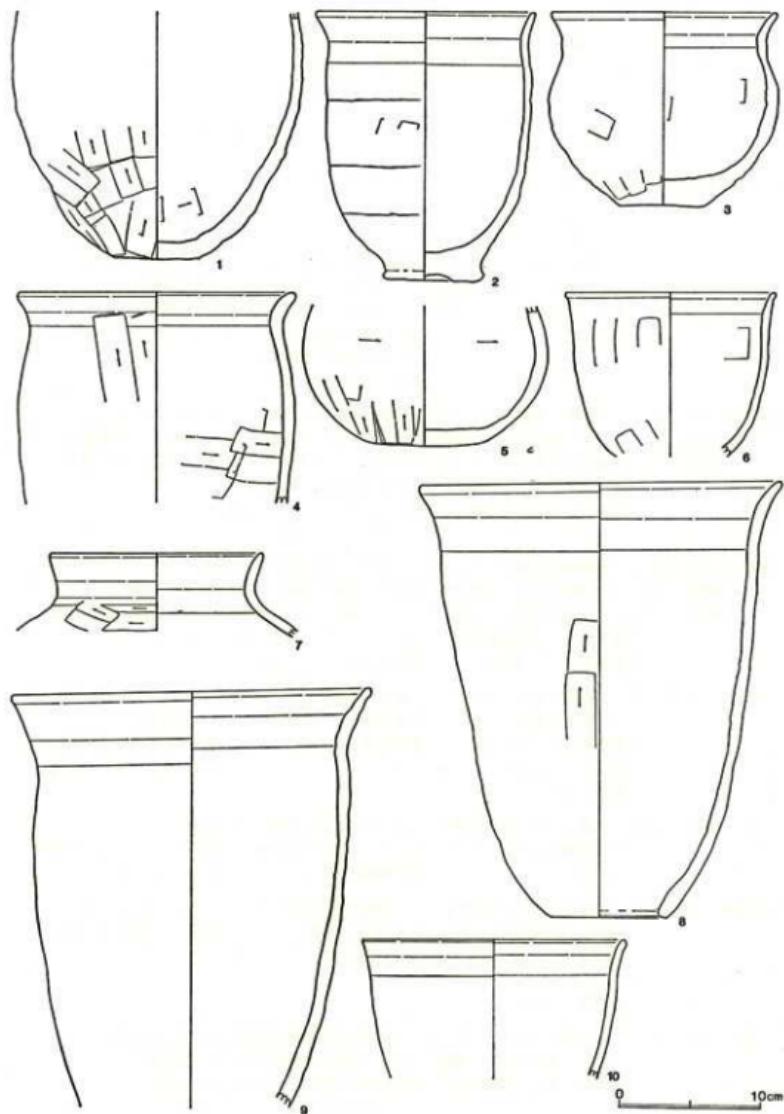
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考   |
|----|----|---------------------|---|--|--|
| 1  | 壺  | 口径 13.1<br>器高 4.8   | 口縁部は直線的に内傾し、端部は外側が尖る。体部との境は大きな稜を持つ。                       | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部から底部は横位のヘラケズリ。器表は磨滅部分が多い。              | A' + B + C + D + E + F<br>内外: 暗赤褐色<br>9/10存 床      |
| 2  | 壺  | 口径 12.8<br>器高 4.5   | 口縁部は直線的に内傾し、端部は外側に尖る。体部との境は明瞭。底部はやや深い。                    | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。底部内面にはヘラ状工具によるナデの痕跡あり。体部から底部は横、斜位のヘラケズリ。 | A + B + C + D + E<br>内: 淡黒褐色<br>外: 暗赤褐色<br>9/10存 床 |
| 3  | 壺  | 口径 13.2<br>器高 4.1   | 口縁部は短く、直線的に内傾し、丸い端部を持つ。稜は明瞭。                              | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ、内面の一部には暗文を残す。体部から底部は主に横位のヘラケズリ。          | A + C + E<br>内: 黒赤褐色<br>外: 暗赤褐色<br>4/1存 床          |
| 4  | 壺  | 口径 13.6<br>器高 3.8   | 口縁部は内湾しながら外反し、二段口縁を呈する。端部は丸い。稜は明瞭である。体部から底部は深い。           | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部及び底部は横、斜位のヘラケズリ。                       | A + A' + D<br>内: 淡暗褐色<br>外: 淡褐色<br>4/5存 覆土         |
| 5  | 壺  | 口径 13.5<br>器高 4.1   | 口縁部は内湾ぎみに外反し、段を持つ。端部は丸い。口縁部との境の稜は明瞭。体部から底部は丸味を持ち、器肉はやや厚い。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部から底部は横、斜位のヘラケズリ。内面にはヘラ状工具の痕跡あり。            | A + B' + C + D + E<br>内外: 淡赤褐色<br>完存 覆土            |
| 6  | 壺  | 口径 14.8<br>器高 4.2   | やや大型である。口縁部は少し内湾ぎみに外反する。端部は丸い。稜は明瞭である。体部から底部は丸い。          | 口縁部内外面は横ナデ。内面は磨滅。体部から底部は斜位のヘラケズリ。若干磨滅。                     | A' + B + C + D<br>内: 黒褐色<br>外: 暗赤褐色<br>4/5存 覆土     |
| 7  | 壺  | 口径(14.4)<br>器高(3.6) | やや内湾ぎみに立ち上がる。端部は丸い。体部と境の稜は緩やかである。                         | 内外面とも黒色処理される。内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部はヘラケズリされるが磨滅。             | A + B + C<br>内: 淡黒褐色<br>外: 黑赤褐色<br>3/10存 床         |
| 8  | 壺  | 口径(12.7)<br>器高(3.2) | 口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、後に外傾する。端部は丸い。稜は緩やかである。                   | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部は磨滅。                                       | A + B + C + E<br>内外: 淡暗赤褐色<br>1/2存 床               |
| 9  | 壺  | 口径(13.2)<br>器高(4.3) | 口縁部はやや内湾しながら外傾する。端部は細いが丸い。稜は緩やかで、体部は丸味を持つ。                | 内面及び口縁部外面は横ナデ。体部は磨滅。                                       | A + C<br>内: 淡褐色<br>外: 淡赤褐色<br>3/5存 覆土              |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)                      | 形態の特徴   | 手法の特徴   | 備考   |
|----|----|------------------------------|---|---|--|
| 10 | 壺  | 口径 13.2<br>器高 3.8            | 口縁部はやや内湾ぎみに外反する。中間に緩い稜を持ち、端部は丸い。体部との境の段は明瞭。           | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部(底部)のヘラケズリは殆ど磨滅。                      | A+A'+F<br>内外:淡橙褐色~赤褐色<br>完存 カマド            |
| 11 | 壺  | 口径(14.2)<br>器高 (3.7)         | 口縁部は直立ぎみに立ち上がった後、外反する。体部から底部は丸味を持つ。                   | 口縁部内外面は横ナデ。<br>内面、体部は磨滅。                              | A+B+D+E+F<br>内外:淡赤褐色<br>3/10存 床            |
| 12 | 壺  | 口径(13.2)<br>器高 (2.9)         | 口縁部は直線的に外傾し、端部付近で少し内湾する。端部は細く尖る。                      | 全面に亘って、磨滅している。  | A'+B+C<br>内:淡橙色<br>外:橙褐色<br>1/5存 覆土        |
| 13 | 壺  | 口径 14.0<br>器高 5.0            | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は細いが丸い。稜は緩やかで、体部から底部は丸い。              | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部から底部は斜位のヘラケズリ。磨滅著しい。                  | A'+B<br>内:淡赤褐色<br>外:暗赤褐色<br>7/10存 床        |
| 14 | 壺  | 口径 14.5<br>器高 4.8            | 口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。端部は内側に丸い。稜はなく、丸味を持って体部から底部へ移行する。      | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部、底部は横、斜位のヘラケズリがみられるが、大部分は磨滅している。  | A+B+C+F<br>内外:暗赤褐色<br>4/5存 床               |
| 15 | 甕  | 口径(17.0)                     | 口縁部は直線的に外傾した後、大きく外反する。胴部との境の段は殆どみられない。胴部はわずかに張る。      | 口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は基本的に縦位のヘラケズリ。口縁部までケズリが及ぶ。             | A+C+F<br>内外:淡褐色<br>1/10存 覆土                |
| 16 | 甕  | 口径 18.2<br>器高 32.4<br>底径 5.1 | 口縁部は外反して外傾する。端部は丸い。胴部は中位で張って、厚みをもって内湾し、平底の底部へ移行。      | 全面に亘って磨滅及び整形不良の為、整形手法不明瞭。口縁部に斜位のヘラケズリを残す。内面はナデ。形態や歪む。 | A+B+C+E+F<br>内:暗赤褐色<br>外:暗褐色<br>7/10存 床    |
| 17 | 甕  | 口径 16.5<br>器高 27.2<br>底径 7.7 | 口縁部は大きく外反し、端部は丸い。胴部は下半で大きく膨らむ。底部は平底であるが不安定。形態歪む。整形不良。 | 殆ど全面に亘って、磨滅している。胴部下半は縦位のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。                | A+B+C+E+F<br>内:明赤褐色~灰褐色<br>外:赤褐色<br>3/5存 床 |
| 18 | 甕  | 底径 5.5                       | 平底を呈し、胴部は内湾気味に外傾して立ち上がる。底部の器内は胴部より薄い。                 | 胴部外面は縦位のヘラケズリ。底部付近は横位のヘラケズリ。内面はヘラナデ。底部は不定方向のヘラケズリ。    | A+C+F<br>内外:赤褐色<br>3/10存 床                 |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm) | 形態の特徴                         | 手法の特徴  | 備考   |
|----|----|---------|-------------------------------|--|--|
| 19 | 甕  | 口径 16.0 | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。胴部は上半部で張る。 | 口縁部は横ナデ。外部内面は横位のヘラナデ。外面は磨滅。口縁部の横ナデは胴部の一部にまで及ぶ。 | A + A' + C + D + E<br>内: 淡灰褐色<br>外: 暗茶褐色<br>1/5存 床 |

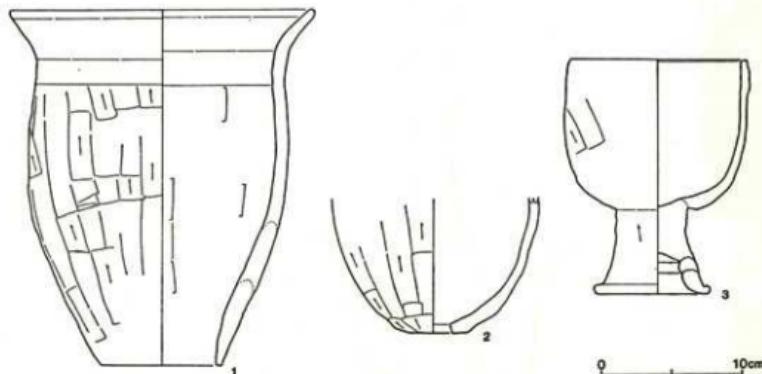
## 高野谷戸遺跡 1号住居跡出土遺物(2)(第77図)

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)                      | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考   |
|----|-----|------------------------------|--|--|--|
| 1  | 甕   | 底径 6.0                       | 平底で、胴部は内湾気味に立ち上がる。器内は胴部下半から底部にかけて厚い。                         | 胴部外面は斜位のヘラケズリ、底部もヘラケズリされるが大部分が磨滅している。内面は横位のヘラナデ。胴部外面上半部は未調整部分を残している。     | A + B + C + D + E + F<br>内: 淡赤褐色<br>外: 淡赤褐色~暗褐色<br>1/2存 床 3区覆土 |
| 2  | 小形甕 | 口径 15.7<br>器高 19.1<br>底径 7.2 | 口縁部は直線的に外傾し、丸い端部を持つ。胴部は殆ど張らず垂下する。底部は平底を呈し、中央部に輪環状の孔(2cm)を持つ。 | 胴部外面、及び底部にヘラケズリが部分的に認められるが、表面の胎土が粗く、不明瞭。輪跡痕を部分的に残している。内面から口縁部外面にかけては横ナデ。 | A + B + D + E + F<br>内: 暗褐色~淡赤褐色<br>外: 赤褐色~淡赤褐色<br>3/5存 床      |
| 3  | 小形甕 | 口径 16.2<br>器高 19.1<br>底径 7.2 | 口縁部は直線的に外傾する。端部は丸い。胴部は位に最大径を持ち、次第に厚みを増す。底部は若干上底気味で上半は磨滅目立つ。  | 口縁部内外面は横ナデ。胴部は下半部に斜位のヘラケズリが認められる。底部はヘラケズリ及びナデ。胴部内面は横位のヘラナデ。              | A + A'<br>内: 暗茶褐色<br>外: 淡茶褐色~淡黒褐色<br>3/5存 床                    |
| 4  | 甕   | 口径(19.8)                     | 口縁部は短く、外反する。端部は肥厚し、丸い。胴部はあまり大きく張らず垂下する。内外面とも未調整部を残す。         | 器面の磨滅者しい。胴部外面は縦位ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。   | A' + C + D + E + F<br>内: 赤褐色<br>外: 明赤褐色~灰黒褐色<br>2/5存 床         |
| 5  | 壺   | 底径 7.4                       | 底部は平底に近い形態を示す。胴部は内湾して立ち上がる。                                  | 胴部外面は斜、横位のヘラケズリ、上半部は横ナデ。磨滅が多い。   | A + C<br>内: 灰黑色 外: 淡黒褐色<br>2/5存 床                              |
| 6  | 小形甕 | 口径(15.0)                     | 口縁部は短く、直線的に外傾し、端部は丸く、外側に屈曲する。胴部は弱く内湾して底部へ移行。底部付近の器内は厚い。      | 口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。                                      | A + C + D + E + F<br>内外: 暗赤褐色~淡褐色<br>3/10存 床                   |
| 7  | 壺   | 口径(15.2)                     | 口縁部は緩やかに外反し、丸い端部を持つ。胴部は大きく張る。調整良好。                           | 口縁部は内外面とも横ナデされ、胴部との境に及ぶ。胴部は横、斜位のヘラケズリ、口縁部まで及ぶ。                           | A + C + D + E<br>内: 明灰褐色<br>外: 灰褐色<br>1/5存 覆土                  |



第77図 高野谷戸遺跡1号住居跡出土遺物(2)

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)            | 形態の特徴  | 手法の特徴   | 備考  |
|----|----|--------------------|--|---|---|
| 8  | 瓶  | 口径 25.9<br>器高 30.8 | 口縁部は緩やかに外反。<br>端部は丸い。胴部は弱く内湾しながら孔部に移行。孔端部は肉厚。      | 口縁部は内外面とも横ナデ、胴部との境にまで及ぶ。<br>胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は不明瞭。 | A+B+C+E+F<br>暗赤褐色～淡茶褐色<br>内：黒褐色～暗赤褐色<br>外：黒褐色<br>4/5存 床 |
| 9  | 瓶  | 口径 25.8            | 口縁部は直線的に外傾する。<br>端部は丸い。胴部は弱く内湾する。胴部下半部の器内は次第に厚くなる。 | 磨滅の為、整形手法不明瞭。                                     | A+A'+B+C+F<br>内：淡赤褐色<br>外：淡褐色<br>3/5存 床                 |
| 10 | 瓶  | 口径(18.8)           | 口縁部は短く、緩やかに外反。<br>端部は丸い。胴部は若干内湾気味に垂下する。            | 磨滅の為、整形手法不明瞭。                                     | A+B+C+F<br>内外：暗赤褐色<br>1/5存 床                            |



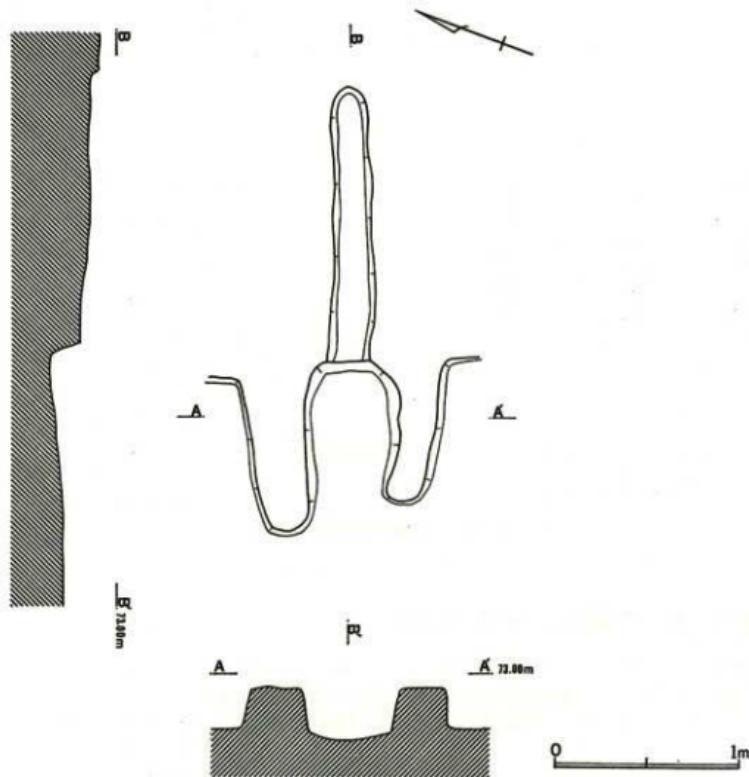
第78図 高野谷戸遺跡1号住居跡出土遺物(3)

## 高野谷戸遺跡1号住居跡出土遺物(3)(第78図)

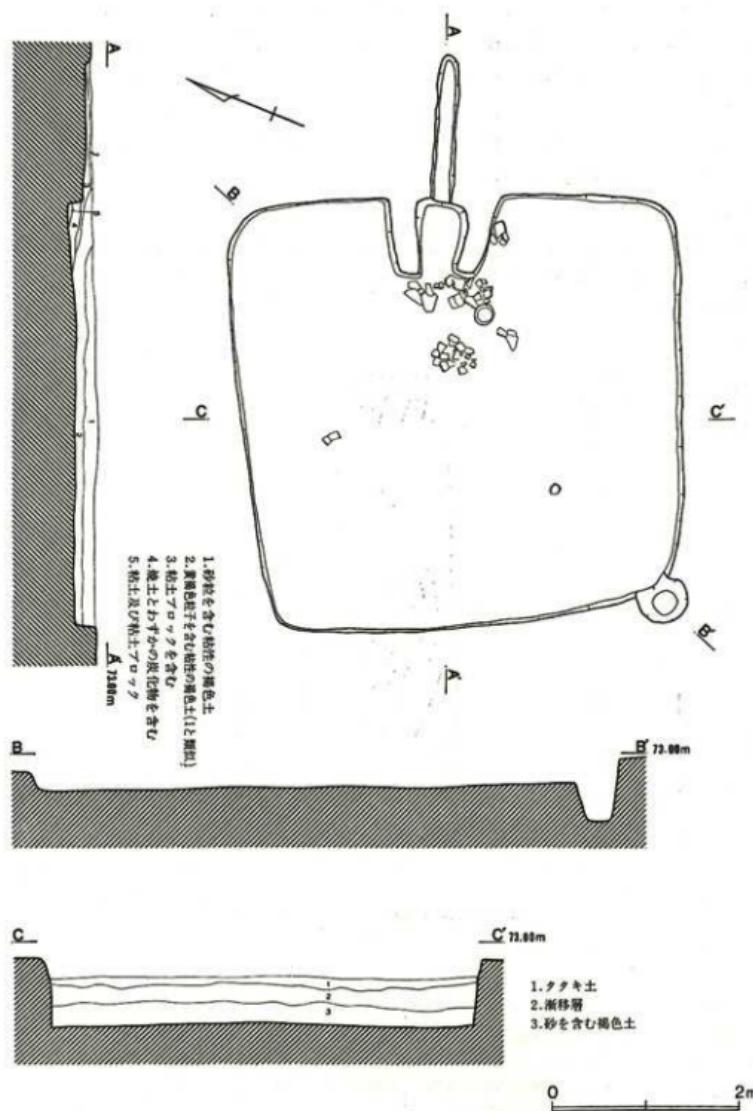
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)            | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考   |
|----|----|--------------------|--|--|--|
| 1  | 瓶  | 口径 21.7<br>器高 25.3 | 口縁部は途中から大きく外反し、端部は丸い。胴部は僅かに張り、下半部の器内は肥厚するが次第に薄くなる。 | 内面及び口縁部外面は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。胴部下半は二条の輪積痕を残す。 | A+F<br>内：赤褐色～淡赤褐色<br>外：赤褐色～暗茶褐色<br>口縁部：灰白色<br>3/5存 床 |

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)            | 形態の特徴   | 手法の特徴   | 備考   |
|----|-----|--------------------|---|---|--|
| 2  | 瓶   | 底径 5.3             | 底部は平底を呈し、中央部に孔を持つ。胴部へは段を持って立ち上がる。                       | 胴部は縦位のヘラケズリ。底部ヘラケズリ、内面ナデ。底部付近に未調整部を残す。        | A + F<br>内：暗赤褐色<br>外：暗茶褐色<br>3/10存 床                 |
| 3  | 合付鉢 | 口径 12.6<br>器高 16.7 | 口縁部と脚部の境はなく、端部はやや平坦で内湾気味である。脚部は直線的で据部外方に大きく開き、端部は丸味を持つ。 | 全面に亘って、磨滅している。脚部、脚部は斜、縦位のヘラケズリ。据部内面はナデ。輪積痕明瞭。 | A' + B + C + D + E + F<br>内：暗褐色<br>外：赤褐色～黒褐色<br>完存 床 |

(2) 高野谷戸遺跡 2号住居跡 (第79, 80図)



第79図 高野谷戸遺跡 2号住居跡カマド

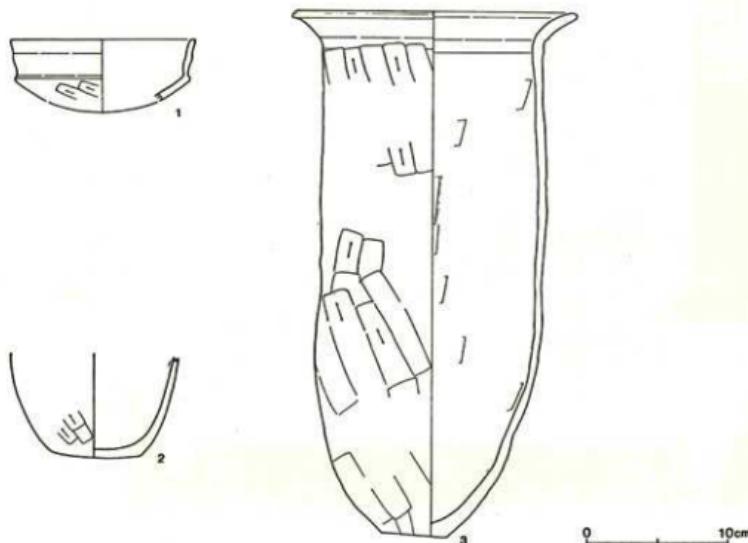


第80図 高野谷戸遺跡2号住居跡

1号住居跡の北西コーナーと接する様に位置している。平面プランは隅丸の方形となるが、各壁の長さに若干の異なりがみられ、各々の長さは東壁4.65m、西壁4.25m、南壁4.10m、北壁4.40mを測る。カマドは東壁に構築され、煙道は細長く1.60m程壁外へ伸びている。住居の掘り込みは確認面から床面まで20cm前後である。床面上の堆積土も比較的単純なもので、砂を含むもの、あるいは粘土ブロックなどが含まれている。

カマド前面の焚口周辺部には数個体の土器が割れて出土している。特にこの中の1点(第81図3)は口縁部を下にして、床に密着した状態で出土し、置かれたままを想定させ、当住居跡の年代を決定する有力な資料となるものである。

住居内には壁溝はめぐらず、又貯蔵穴、柱穴等の施設は認められなかったが、南コーナー部に径45cm、床面からの深さ40cmのピットが1箇所設けられている。床面は平滑で凹凸は無い。主軸はN-93°-Sを示す。

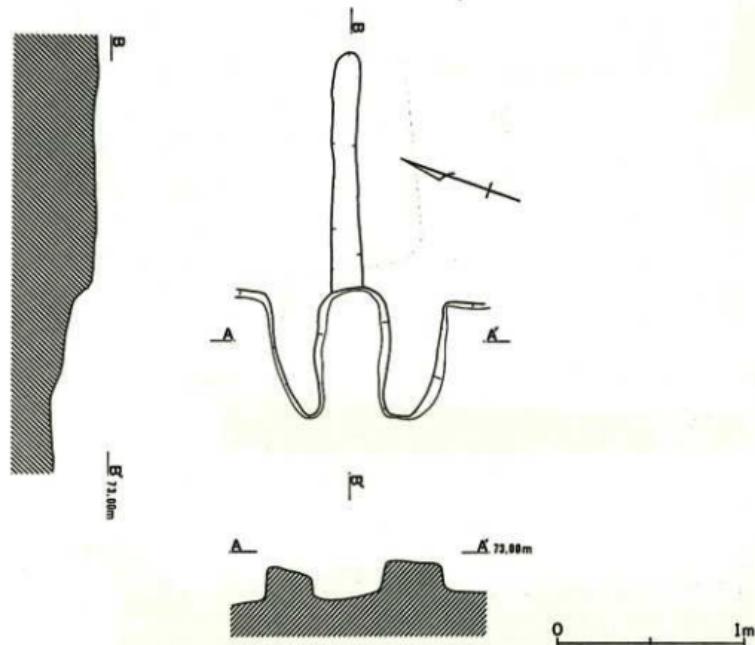


第81図 高野谷戸遺跡2号住居跡出土遺物

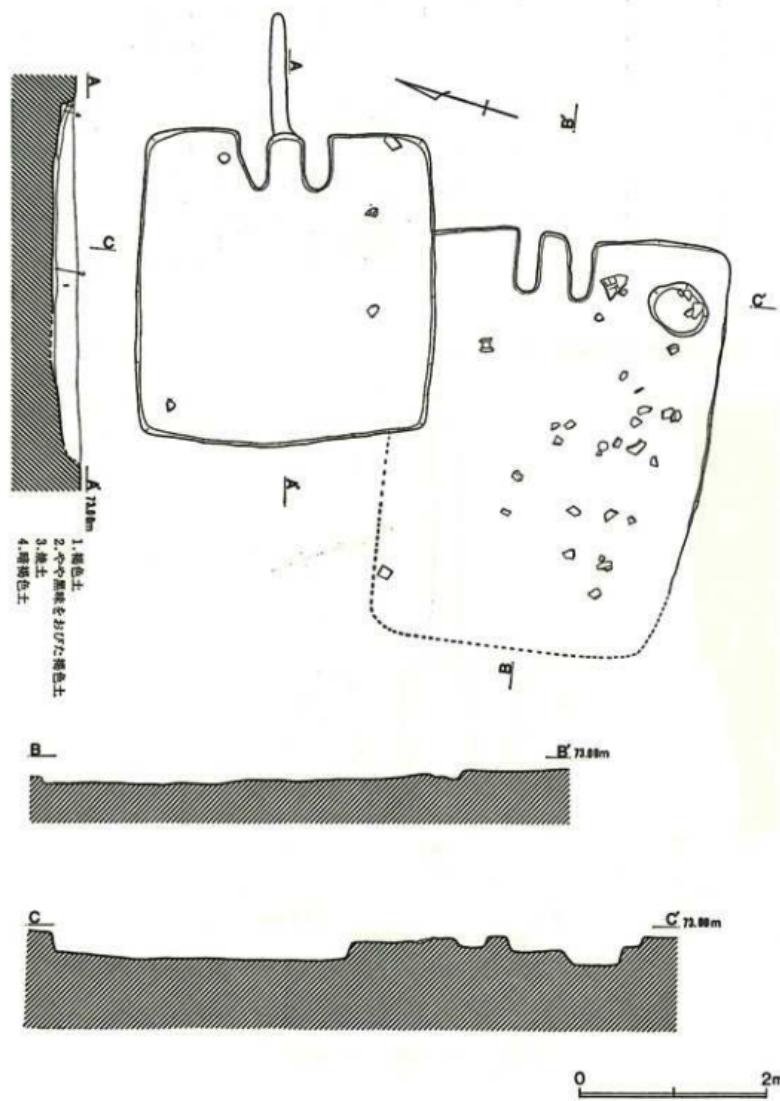
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴   | 手法の特徴                            | 備考                          |
|----|----|----------|---|----------------------------------|-----------------------------|
| 1  | 甕  | 口径(13.2) | 口縁部は緩やかに外反し、中位で段を有し、外傾する。端部は外側に尖る。体部との境の稜は明瞭。 | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。 | A+C+E<br>内外：灰黒褐色<br>1/5存 覆土 |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)                      | 形態の特徴  | 手法の特徴  | 備考                                       |
|----|----|------------------------------|--|--|--|
| 2  | 甕  | 底径 11.9                      | 平底である。胸部は内湾気味に立ち上がる。   | 胸部外面下半に斜位のヘラケズリが僅かに確認できるだけで、他は外面とも磨滅している。                          | A+C<br>内：明茶褐色<br>外：灰黒褐色<br>3/10存 床       |
| 3  | 甕  | 口径 20.2<br>器高 37.4<br>底径 4.8 | 口縁部は大きく外反し、端部は丸い。胸部との境の稜は明瞭。胸部は直線的で下半で内湾し、平底の底部へ移行する。形態やや歪む。 | 口縁部は外面とも横ナデ。胸部外面は不定方向のヘラケズリ(基本的に斜位)。内面は横位のヘラナデ。底部内面、口縁部外面に未調整部を残す。 | A+B+C+D+E+F<br>内：暗茶褐色<br>外：暗褐色<br>4/5存 床 |

## (3) 高野谷戸遺跡3号住居跡 (第82, 83図)



第82図 高野谷戸遺跡3号住居跡カマド



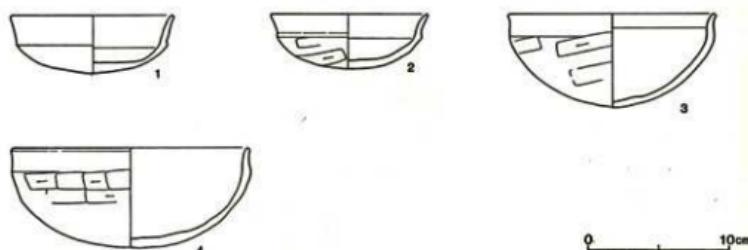
第83図 高野谷戸遺跡3号(B)、5号(D)住居跡

5号住居跡の北壁を切って構築されている。西壁がわずかなふくらみを見せるが、全体的なプロポーションは正方形を呈する。やや小ぶりの住居跡で東西3.25m、南北3.15の規模を有する。壁高は確認面から20cm程で、床面は中央が窪んでいる。中に堆積する土は壁付近に砂が多く含み、壁外から流れ込んだものと推定される。層序は単純で3層からなり、その大部分は焼土粒をわずかに含む褐色土が主体を占める。

カマ Fは東壁に構築され、粘質の褐色土で袖が作られており、大きな舟底状の燃焼部から段差をもって細長く伸びた煙道が続く。煙道はほぼ水平を保ち、幅15cm、長さ120cmを測る。

床面は良く踏みかためられているが、凹凸が認められる。壁高・貯蔵穴・柱穴等の遺構は確認されなかった。

出土遺物は少ないが、カマ F袖北側からは壺が出土している。主軸はN-74°-Eを示す。



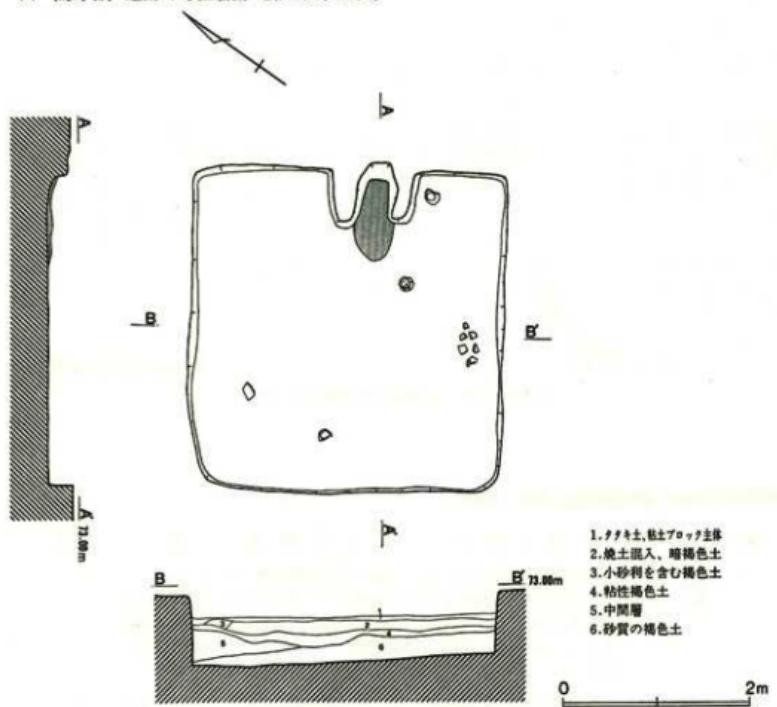
第84図 高野谷戸遺跡3号住居跡出土遺物

#### 高野谷戸遺跡3号住居跡出土遺物（第84図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)              | 形態の特徴   | 手法の特徴   | 備考  |
|----|----|----------------------|---|---|---|
| 1  | 壺  | 口径 11.7<br>器高 4.0    | 口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味をもち、器内の厚い底部に移行する。        | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面から底部は磨滅の為、整形手法不明瞭。          | A + C + E<br>内外：淡茶褐色<br>底：淡赤褐色<br>9/10存 床         |
| 2  | 壺  | 口径 11.3<br>器高 3.8    | 口縁部は外反し、端部は細く、外側に丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味をもち、底部へ移行する。底部の器肉はやや厚い。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面はヘラケズリされるが、磨滅の為やや不明瞭。           | A + B + C + E + F<br>内：淡橙褐色<br>外：淡赤褐色<br>7/10存 床  |
| 3  | 壺  | 口径(14.8)<br>器高 (6.8) | 口縁部は直線的に立ち、外反する。端部は丸い。体部は丸味をもって底部へ移行する。                     | 内面から口縁部外面は横ナデ+ミガキ。体部外面は斜位のヘラケズリ。底部内面は段をもち、未調整である。 | A' + B + C + D + E<br>内：灰茶褐色<br>外：淡橙褐色<br>3/10存 床 |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴   | 手法の特徴   | 備考  |
|----|----|---------------------|---|---|---|
| 4  | 埴  | 口径(17.1)<br>器高(7.2) | 口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。体部との境の稜は明瞭で、やや肥厚する。丸味をもって底部へと移行する。形態やや歪む。 | 内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリがされる。しかし、下半部は殆ど磨滅している。 | A + C + D + E + F<br>内: 橙褐色<br>外: 淡赤褐色<br>7/10存 床 |

(4) 高野谷戸遺跡4号住居跡(第85図、86図)



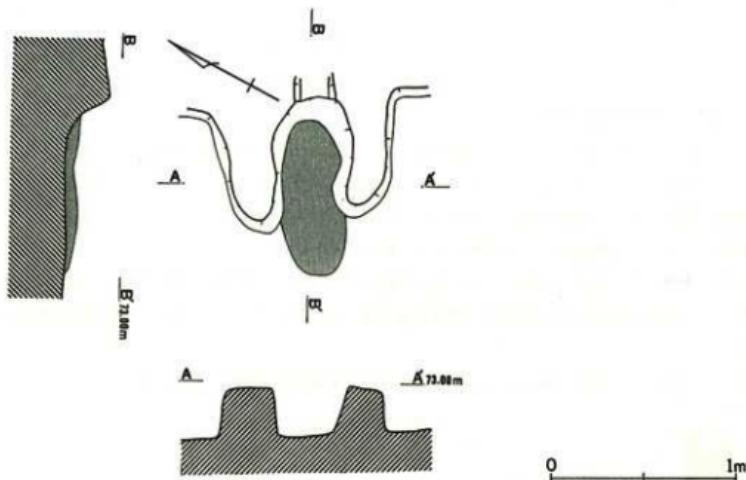
第85図 高野谷戸遺跡4号住居跡

正方形プランの小形の住居で、一辺の3.30m×3.35mの規模を有する。壁はほぼ直線的でコーナー部は小さく丸味を持つ。北西壁の西コーナー付近でわずかに壁が脛らむが、整った住居である。壁の掘り込みは垂直に立ち上がり、確認面からの高さ25cmを測る。床面は粘土ブロックを主体とした叩きしめた面となっている。

カマドは北壁に設置され、わずかに東に寄った位置を占めている。燃焼部には厚く焼土が堆積し

ている。カマド奥壁は住居壁と同じラインでそろえて立ち上がり、煙道は上部で住居外へ続くと推定されるが、明瞭に確認出来なかった。内部はかなり熱を受けており、壁面が硬く残っていた。

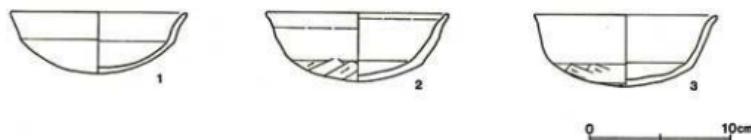
住居内には、貯蔵穴・柱穴・堀溝は設けられていない。主軸はN-50°-Eを示す。



第86図 高野谷戸遺跡4号住居跡カマド

#### 高野谷戸遺跡4号住居跡出土遺物（第87図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴   | 手法の特徴                                 | 備考                                      |
|----|----|---------------------|---|---------------------------------------|---|
| 1  | 壺  | 口径(12.6)<br>器高(4.4) | 口縁部は大きく外反する。端部は丸い。体部と境の稜は緩やかである。体部の器内は薄く丸味をもつ。      | 全面に亘って、磨滅している。                        | A+C<br>内:赤褐色<br>外:淡茶褐色~灰黒色<br>3/10存 床   |
| 2  | 壺  | 口径 13.1<br>器高 4.9   | 口縁部は内湾ぎみに外傾し、端部付近で外反する。端部は丸い。体部は丸味をもって底部へ移行する。      | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部は斜位のヘラケズリ。稜の部分は若干未調整。 | A+C+D+E<br>内:淡灰茶褐色<br>外:淡暗褐色<br>4/5存 覆土 |
| 3  | 壺  | 口径 13.0<br>器高 5.1   | 口縁部は内湾ぎみに外傾し、端部付近で大きく外反する。端部は丸い。体部との境の稜は不明瞭。形態やや重む。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。器面の凹凸目立つ。 | A+B+C+D+E<br>内外:淡黒褐色<br>4/5存 床          |



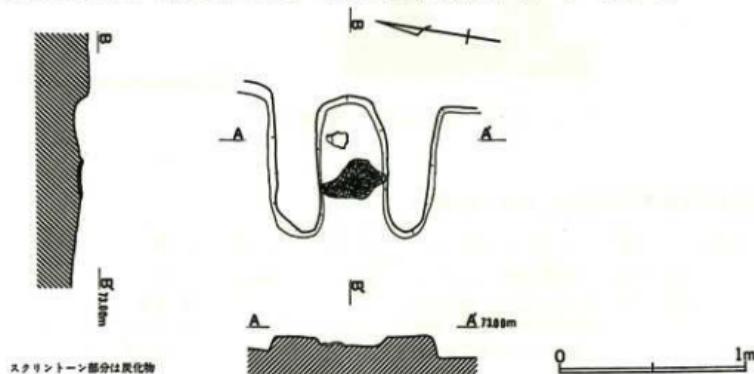
第87図 高野谷戸遺跡4号住居跡出土遺物

(5) 高野谷戸遺跡5号住居跡（第83図、88図）

この住居跡は3号住居跡によって、西側壁部分を切られている。西壁周辺部が調査段階では明瞭なプランが確認できず推定となってしまったが、長方形プランを呈すると考えられる。推定規模南北3.40m、東西3.90mの規模を有し、南壁に張りを見せる。住居の掘り込みは浅く、確認面からわずか10cmである。3号住居跡との床面差は20cmである。

カマドは東側の壁に構築され他の住居に比べて袖が長い。カマド南側に、壁に寄って円形の貯蔵穴が伴う。径65cm×55cmのやや楕円形で深さ17cmの浅いものである。中より変形土器の脚部破片が出土している。

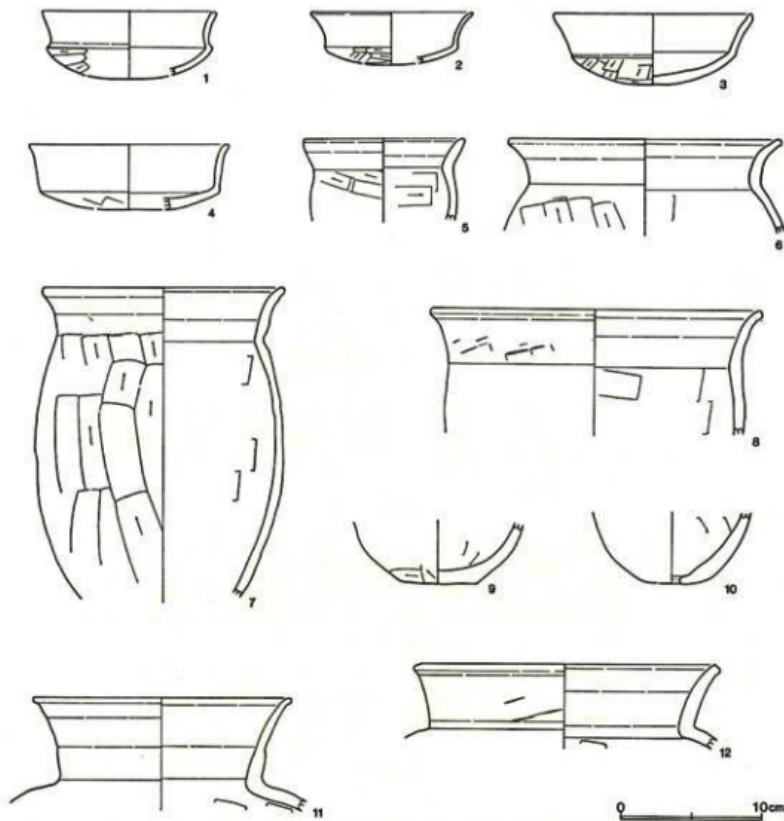
床面は西に向かって傾斜を持ち、多少の凹凸がある。主軸はN-77°-S-Eを示す。



第88図 高野谷戸遺跡5号住居跡カマド

高野谷戸遺跡5号住居跡出土遺物（第89図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴                                      | 手法の特徴                   | 備考                               |
|----|----|---------------------|--|-------------------------|----------------------------------|
| 1  | 壺  | 口径(12.2)<br>器高(4.5) | 口縁部は内傾後、外反する。端部は丸い。体部と肩の稜は明瞭。体部から底部は丸味を持つ。 | 内面から口縁部は横ナデ。体部横位のヘラケズリ。 | A'+B<br>内：赤褐色<br>外：橙褐色<br>1/5存 床 |



第89図 高野谷戸遺跡 5号住居跡出土遺物

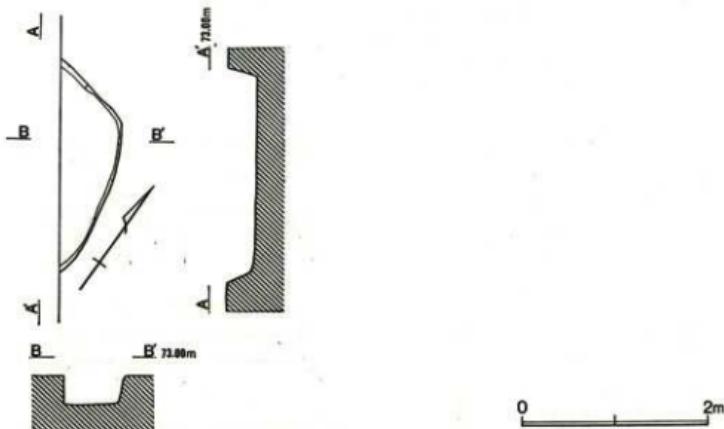
| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)            | 形態の特徴  | 手法の特徴                                      | 備考   |
|----|----|--------------------|--|--|--|
| 2  | 壺  | 口径(11.4)<br>器高 5.0 | 全体に薄い器肉を持つ。直立気味に立ち上がり、外反する。端部は脱いが磨滅の為、やや丸い。稜は明瞭。         | 内面から口縁部は横ナデ<br>体部から底部へラケズリ、器肉の剥落、磨滅目立つ。    | A' + B + C + D<br>内外：淡赤褐色<br>1/5存 床          |
| 3  | 壺  | 口径 14.2<br>器高 5.0  | 緩やかに外反し、やや内側に屈曲した丸い端部を持つ。稜は明瞭。体部から底部は丸味を帯びる。器肉は厚く、器高は高い。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。<br>体部、底部外面は縦ラケズリ、若干、磨滅している。 | A + B' + C + D + E<br>内外：赤褐色～淡赤褐色<br>9/10存 床 |

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)           | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考  |
|----|-----|-------------------|---|--|---|
| 4  | 壺   | 口径 14.2<br>器高 4.6 | 口縁部は外反気味に直立する。端部は外側に屈曲して丸い。体部はやや丸味を持つ。底部は厚い。                  | 内外面とも磨滅、倒落が著しく、整形は不鮮明。   | A+B+D+E+F<br>内: 淡赤褐色<br>外: 赤褐色～淡赤褐色<br>3/10存 床  |
| 5  | 壺   | 口径(11.3)          | 口縁部はやや内湾しながら外傾し、丸い端部を持つ。体部はやや張りを持つ。                           | 口縁部内外面は横ナデ。体部内面は横位のヘラナデ。外面は横方向のヘラケズリ。                            | A+C+F<br>内: 暗赤褐色<br>外: 淡赤褐色<br>1/10存 覆土         |
| 6  | 甕   | 口径(19.2)          | 口縁部は直線的に外傾後、大きく外反する。胸部は張る。                                    | 口縁部内外面は横ナデ。胸部内面は横位のヘラナデ、外面は縦位のヘラケズリ。口縁部と胸部の境のヘラケズリはやや不鮮明。        | A+B'+C+E+F<br>内: 明茶褐色～暗褐色<br>外: 暗茶褐色<br>3/10存 床 |
| 7  | 甕   | 口径 17.2           | 口縁部は緩やかに外反し、丸い端部を持つ。胸部は大きく張り出し、最大径を中位に持つ。                     | 口縁部は内外面とも横ナデ。胸部内面は横のヘラナデ、外面は縦のヘラケズリ。口縁部までヘラケズリは及んでいる。            | A+B+C+D+E<br>内外: 淡橙褐色<br>3/5存 床                 |
| 8  | 甕   | 口径(23.6)          | 直線的に外傾した後、端部付近で屈曲する。端部は肥厚し、やや角張る。胸部はやや張るが直線的に垂下する。            | 口縁部内外面は横ナデ。胸部内面は横位のヘラナデ、外面は磨滅。口縁部は縦位のヘラケズリの痕跡を部分的に留めている。         | A+C+D+F<br>内: 淡茶褐色<br>外: 淡橙色<br>1/5存 床          |
| 9  | 甕   | 底径 5.3            | 平底である。胸部は丸味を持って立ち上がる。底部と胸部の境は不明瞭。                             | 底部はヘラケズリされるが未調整部を残す。胸部外面は一部にヘラケズリが認められるが不明瞭。内面は底部付近にわずかに横位のヘラナデ。 | A+C+E<br>内: 暗赤褐色<br>外: 淡赤褐色<br>3/10存 床          |
| 10 | 小形瓶 | 底径 3.3            | やや不安定な平底である。中央に約1.8cmの孔を持ち、丸味を持って立ち上がる。                       | 表面の砂利の付着や磨滅の為、ヘラケズリ等不明。胸部内面は残存する上端に横位のヘラナデ。                      | A+B'+C+F<br>内外: 黒褐色<br>1/5存 床                   |
| 11 | 壺   | 口径(18.3)          | 有段の口縁部は緩やかに外反し、外側に屈曲したつまみ状の丸い端部を持つ。胸部は大きく外側に張り出す。胸部との境の器肉は厚い。 | 口縁部内外面とも横ナデ。胸部内面は縦位のヘラナデ。外面は磨滅している。                              | A'+B+C+D<br>内: 橙褐色<br>外: 淡赤褐色<br>3/10存 覆土       |
| 11 | 壺   | 口径(21.4)          | 直線的に外傾した後、端部付近で幾分外側に屈曲する。胸部外側に大きく張る。                          | 口縁部は内外面とも横ナデされるが、胸部外面の斜位のヘラケズリが残る。胸部は内面縦位のヘラナデ、外面磨滅。             | A+B+C+D+F<br>内: 淡橙褐色<br>外: 淡茶褐色<br>1/5存 床       |

## (6) 高野谷戸遺跡 6号住居跡（第90図）

この住居跡は、農道にかかってしまったため、全体を調査するまでには至っていない。

プランの一部を検出したのみであるが、壁の形から方形の住居跡になると思われる。住居の主軸は1号住居跡と同様、磁北に沿った形となり、カマド位置も北壁に設置されたものと推定される。確認面からの壁の高さは30cm前後となり、床面は硬くほぼ平らである。

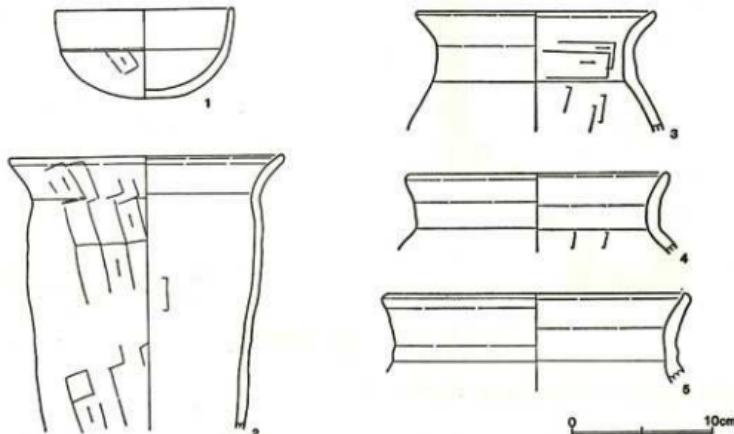


第90図 高野谷戸遺跡 6号住居跡

## 高野谷戸遺跡 6号住居跡出土遺物（第91図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)           | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考   |
|----|----|-------------------|---|--|--|
| 1  | 壺  | 口径 12.8<br>器高 6.2 | 口縁部は内湾気味に若干外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は僅かに残るが、やや不明瞭。体部から底部は丸味を持ち、厚い。 | 口縁部は内外面とも横ナデ。体部、底部外面は斜位のヘラケズリ(若干磨滅)。内面はナデと若干のミガキが残る。 | A+B+C+D+E+F<br>内:赤褐色<br>外:淡赤褐色<br>7/10存 覆土 |
| 2  | 甕  | 口径 19.7           | 口縁部は大きく外反し、丸い端部を持つ。胸部は上半部で若干張るが、次第に内傾する。                    | 口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は斜位のヘラケズリ、内面は中位に横位のヘラナデの痕跡を留める。     | A'+C<br>内外:淡赤褐色<br>2/5存 覆土                 |
| 3  | 甕  | 口径 16.8           | 口縁部は内傾後、大きく外反する。端部は丸い。胴部は最大径を持ち、大きく張る。                      | 胸部は内面は横位にヘラナデされ、口縁部の部まで及ぶ。外面は磨滅の為不明<br>口縁部は内外面とも横ナデ。 | A+B+C+D+F<br>内外:淡茶褐色<br>1/10存 覆土           |

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)  | 形態の特徴   | 手法の特徴                            | 備考  |
|----|----|----------|---|----------------------------------|---|
| 4  | 壺  | 口径(18.8) | 口縁部は直立後、外反する。端部は丸い。胸部は大きく張る。                            | 口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は磨滅、内面は横位のヘラナデ。 | A+B'+C+F<br>内: 淡暗赤褐色<br>外: 淡茶褐色<br>1/10存 覆土 |
| 5  | 壺  | 口径(21.8) | 口縁部は直線的に外傾し、内側に若干尖った端部を持つ。胸部との境には段を有する。胸部は大きく聞くものと思われる。 | 口縁部は内外面とも横ナデ。外面は磨滅が著しい。          | A+B+E<br>内外: 暗赤褐色<br>1/5存 覆土                |

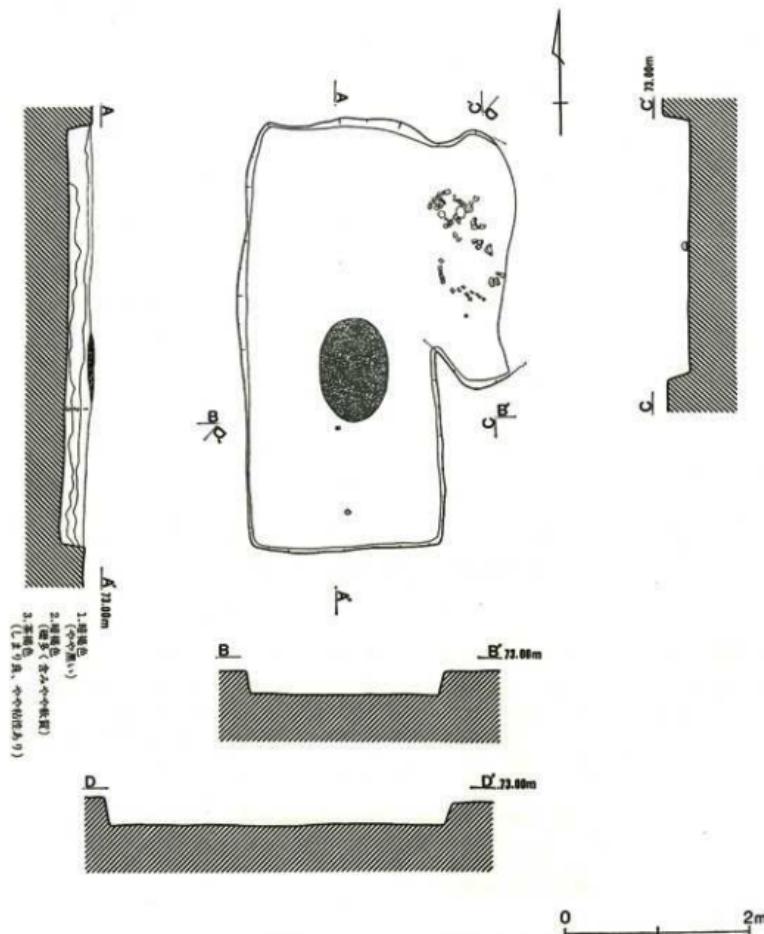


第91図 高野谷戸遺跡6号住居跡出土遺物

## (7) 高野谷戸遺跡7・8号住居跡（第92図）

7号住居跡は長方形プランを有し、8号住居跡と切り合っている。一般住居と異なりカマドを有していないため特殊な造構と思われる。長辺4.45m×短辺2.05mを測る。各壁は直線的であるが、北壁にはいくらかのゆがみが見られる。このあたりは調査の段階でもわかりにくかった部分で色調の判別に苦労した。

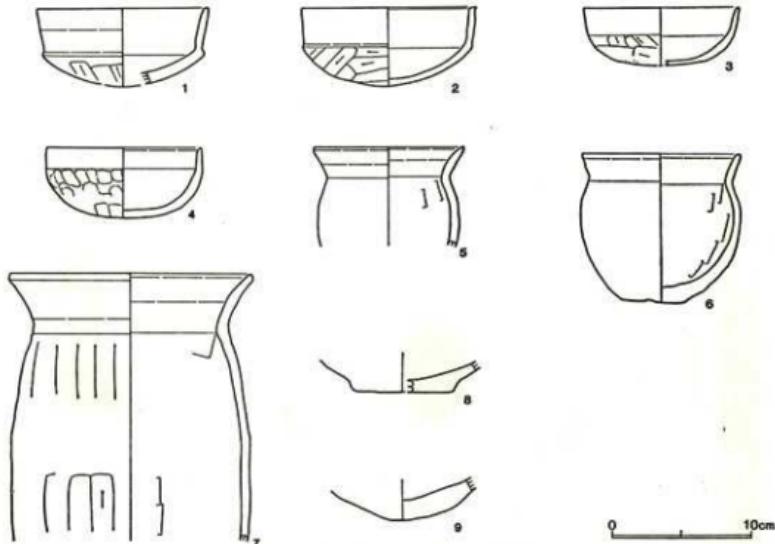
8号住居跡も、はたして住居となるか不明確なプランであるが、ほぼ中央部と推定される部位から土器片がまとまって出土している。2箇所のコーナーが検出され、約40°前後で7号と切り合っている。壁付近に焼土、粘土のまとまり等が存在していなかったことから、当初よりカマドを有しない造構と思われ、7号住居跡は特殊な造構と推定される。7号住居跡は、長辺は磁北と同一方向をとっている。



第92図 高野谷戸遺跡7・8号住居跡

## 高野谷戸遺跡7号住居跡出土遺物（第93図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm) | 形態の特徴   | 手法の特徴                                    | 備考                                       |
|----|----|---------|---|--|--|
| 1  | 壺  | 口径 11.3 | 口縁部は直線的に外傾する。端部はやや平坦で外傾に少し尖る。体部との境の稜は明瞭。体部の器内は厚く、丸味をもつ。 | 内面から口縁部外面は横ナデ。体部は斜位のヘラケズリ。口縁部との境付近は若干磨滅。 | A + B + C + E<br>内外：橙褐色～淡橙褐色<br>3/10存 覆土 |

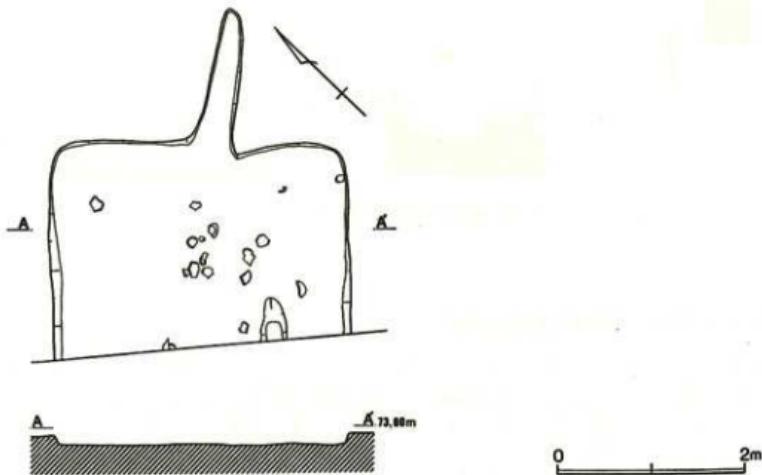


第93図 高野谷戸遺跡7号居住跡出土遺物

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)           | 形態の特徴  | 手法の特徴                                  | 備考  |
|----|-----|-------------------|--|--|---|
| 2  | 壺   | 口径 12.5<br>器高 5.7 | 口縁部は内湾気味に外傾する。壺部はやや外側に尖る。体部との境の稜は緩いが明瞭。体部は丸味をもち底部へ移行。形態整う。 | 体部内面から口縁部外面は横ナデ。体部は斜、横位のヘラケズリ。床部内面はナデ。 | A + B' + C + D + E<br>内: 淡赤褐色<br>外: 淡赤褐色~淡茶褐色<br>4/5存 床 |
| 3  | 壺   | 口径(11.2)          | 口縁部は内湾気味に外傾する。壺部は細く尖る。体部との境は不明瞭。体部から底部はやや直線的である。           | 内面から口縁部外面にかけてはナデ。体部は横・斜位のヘラケズリ。        | A' + B + C<br>内外: 暗赤褐色<br>3/10存 覆土                      |
| 4  | 壺   | 口径 11.2<br>器高 5.0 | 口縁部はやや直線的に内傾する。体部との境は不明瞭。体部から底部は丸味をもち、やや器内が厚くなる。           | 内面から口縁部外面はナデ。体部は細かい指圧によるナデ。底部附近はヘラケズリ。 | A' + B + C + E<br>内: 淡赤褐色<br>外: 赤褐色~茶褐色<br>3/5存 床       |
| 5  | 小形甕 | 口径(10.7)          | 口縁部は外反して外傾する。壺部は細く丸い。胴部は中位で張る。                             | 外面は磨滅している為、整形手法不明瞭。口縁部内面は横ナデ。胴部内面ヘラナデ。 | A + B + C + E + F<br>内外: 淡茶褐色<br>1/5存 覆土                |

| 番号 | 器種  | 大きさ(cm)            | 形態の特徴   | 手法の特徴  | 備考  |
|----|-----|--------------------|---|--|---|
| 6  | 小形甕 | 口径 11.4<br>器高 10.6 | 口縁部は直線的に外傾し<br>端部は丸い。胴部は中位で<br>口縁部とほぼ同じ径をも<br>つ。底部は平底で、中央部<br>付近に孔を有する。 | 口縁部は横ナデ。胴部外<br>面は横、斜位のヘラナデ。<br>外面及び底部は磨滅。                  | A+B+C+E+F<br>内:暗褐色～暗赤褐色<br>外:暗赤褐色<br>9/10存 床      |
| 7  | 甕   | 口径 17.4            | 口縁部は外反し、外傾す<br>る。端部は丸いが、内側に<br>若干尖る。胴部はやや張り<br>長胴化する。器肉は一定し<br>ている。     | 口縁部は横ナデ。胴部外<br>面は縱位のヘラケズリ。内<br>面は横、斜位のヘラナデ。<br>内外面とも磨滅目立つ。 | A+B+C+D+E+F<br>内:淡褐色<br>外:淡茶褐色<br>3/10存 床         |
| 8  | 壺   | 底径(7.1)            | 底部は平底を呈し、胴部<br>は大きく膨らむ。   | 全面に亘って、磨滅して<br>いる。   | A+C+F<br>内:淡暗茶褐色<br>外:淡茶褐色(底)～淡黑<br>褐色<br>1/5存 覆土 |
| 9  | 甕   |                    | 丸底である。内湾気味に<br>立ち上がる。   | 内湾はナデ。外面は磨滅  | A+C+F<br>内:明茶褐色<br>外:淡赤褐色～黒褐色<br>1/10存 床          |

## (8) 高野谷戸遺跡9・10号住居跡(第94、95図)

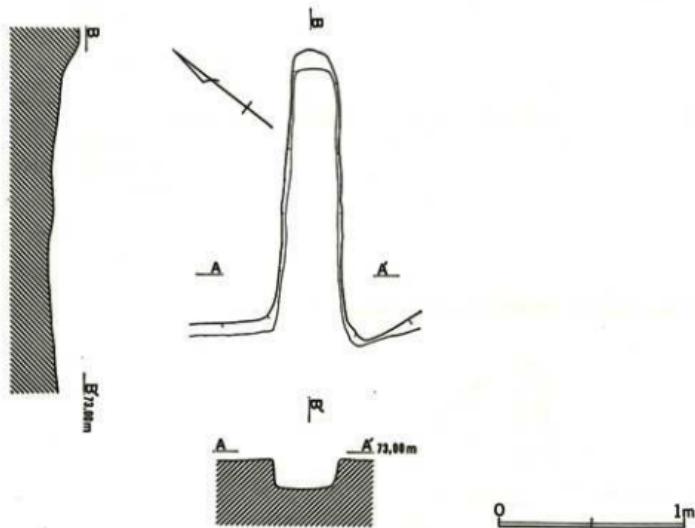


第94図 高野谷戸遺跡9・10号住居跡

調査区のはずれにあり、9、10号住居跡両者間に切り合いがみられ、9号住居跡の中に10号住居跡のカマドがのっている。調査範囲外に一部のみ出すため全形を検出することはできなかったが、一辺3.20m程の方形プランを有する住居跡になると思われる。

住居の掘り込みは浅く10cm前後で、カマドを東壁に構築している。煙道は壁に対して直交せず9°右に寄り、底は浅く舟底状を呈しながら先端へと続き、掘り方は断面箱形となる。住居内からは中央部に土器がまとまって出土している。

10号住居跡はカマド煙道先端のみが検出され、規模等は不明である。主軸方向はカマドの位置から9号住居跡と同方向と推定される。なお、9号住居跡の主軸方向はN-46°-Eを示す。



第95図 高野谷戸遺跡 9号住居跡カマド

#### 高野谷戸遺跡 9号住居跡出土遺物（第96図）

| 番号 | 器種 | 大きさ(cm)             | 形態の特徴   | 手法の特徴                                      | 備考                                      |
|----|----|---------------------|---|--|---|
| 1  | 壺  | 口径(13.1)<br>器高(4.3) | 口縁部は若干外反気味に<br>内傾する。端部は少し尖る。<br>体部との境の稜は緩やかだ<br>が明瞭。体部から底部は丸<br>味を持つ。 | 口縁部外面の一部に横ナ<br>デが確認できる他は、磨滅<br>の為、整形手法不明瞭。 | A+B+D+F<br>内：赤褐色<br>外：暗赤褐色～赤褐色<br>1/5存床 |